
超次元ゲーム ネプテューヌ～黒閃の騎士～

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌ〜黒閃の騎士〜

【Nコード】

N4058W

【作者名】

燐

【あらすじ】

なんとかクリアしました次は支配エンドを見ようかなと思いが
ら書いています

後悔はあるが反省はしてない！

ISの方は正直情熱が冷めてこっちの情熱が萌えてしまった
とりあえず最強系？チート系？になると思うのでその点をご理解し
ていただきたいでは、始り。始り〜（すいません連載と短編間違え
てしまいましたこっちが本家です（汗）

タイトル決定！MEEGAさんありがとうございました！！

いつもの朝（前書き）

なんかおかしいとおもったら連載と短編間違っていた・・・

いつもの朝

時間を超え

宇宙を超え

次元を超え

世界を超えた一人の少年がいた

その少年は優しすぎた

その少年は頑張りすぎた

その少年は知りすぎた

だからこそその絶望、なにをしても変わらないほど努力し強くなり弱きものを守り、助けたとしてもそれが無駄だと分かったからだ。所詮、運命なんて変えられない絶対不変なものだと少年は語った

でも、その少年は足掻いたこんな結末は嫌だと自分はこんな運命に従うのは嫌だと

そして足掻いても、努力しても、頑張っても無駄だとなことを本当に知った少年は逃げた（・・・）今ある全てを捨てた富も金も与えてくれた自分の運命を造る者から人間であるがゆえにいまある現実からの逃亡

そんな少年がたどり着いた世界、それが《ゲームキョウ界》かつて一つであった大陸は女神戦争と呼ばれる争いにより四つに分かれた

革新する紫の大地
『プラネテューヌ』

重厚なる黒の大地
『ラスティション』

雄大なる緑の大地
『リーンボックス』

夢見る白の大地
『ルウィー』

そんな歴史があるこの世界に少年は静かに暮らすことにした。現実から目を背くように
その世界も彼というイレギュラーの存在を気にせずただ平凡で静かで平和な時間が過ぎていくと思った・・・そう願った

突如、世間に噂される魔王『ユニミテス』の存在、それと同時に急増するモンスター

平和だと思われたこの世界に今魔の手が伸びようとしていることは、まだその少年は気付くことなくいつもの朝を迎えていた

「ふわあああ〜」

大きくベツトの中でいつものように眠気との決闘。その結果は勝利重たい身体を動かし毛布を綺麗に整え食パンをポップアップ式トースターに突っ込みパンが焦げる前に薄く油を引かしたフライパンに卵落とし一口サイズに切った野菜を皿に盛り付けそこでチンっとトーストからパンが飛び出す。

パンにマーガリンを塗り先ほど調理した目玉焼きをパンにのせる

「いただきます」

一人で住むには十分すぎる大きさの家に静かな呟きが響いた

彼の名前は零崎^{れいさき} 紅夜^{こうや}この雄大なる緑の大地『リーンボックス』に住む凄腕のハンターだ。その証拠に彼の近くにはモンスターの命を狩る為の武器が沈黙を守っている。

食事を終えた紅夜は、食器を片づけ身を隠すような大きな漆黒のコートを着る。本来彼は、この世界にいるべき人間ではないそのことを誰よりも紅夜は理解していていた。なので出来るだけ他人との関係を持たないようにしたこれも自分のためもしどこかで奴に自分の場所がばれることになればこの世界の住民に迷惑がかかる結論から言えば隠居生活を送っていた。

ゴーン、ゴーン、ゴーン

中世を思わせる町一番の大きい協会のベルが鳴らされる

朝礼の時間だ。紅夜はさつそく協会に向かったこの大陸の守護女神『グリーンハート』に紅夜は合ったことがあり細かく言えば命の恩人と言っても過言ではない

もちろん紅夜はグリーンハート様に信仰していた・・・とはいえグリーンハートとは親しい仲であり裏表を知っているので少し彼女を信仰する自分がおかしく思う時がある

高級感あふれる絨毯の上を歩きグリーンハートが祀られる女神像の近くの席に座り聖書を読む宣教師の話に耳を傾ける

何度聞いたであろう宣教師の読む声を聞きながらうつうつとしてしまう。そして・・・

・・・お前に造られる運命に従うのはもう、嫌なんだ！

「っ！。・・・寝ちまつたか」

どうやら寝てしまったようだ近くにはもう人の姿はない重くなった腰を浮かばせ協会を出ようと足を動かそうとしたとき廊下の陰から手が飛び出し紅夜の手を掴んだ

「ちょ、おい・・・」

されるがまま連れて行かれる。犯人はだれか分かっているが彼女のその豊胸の谷間に腕が挟まれており抵抗したくても出来ない自分がいた

ボタン！

結局、半強制的に連れて行かれ彼女の部屋に閉じ込められる

「えっと、何か用事でしょうか。グリーンハート様」

腰まである蜂蜜色の髪に穏やかな雰囲気かとれ露出度が多い服装をしたお姫様のような美少女

「もう、二人っきりの時は『ベール』って読んでくださいと言いましたわよ」

少し拗ねたように彼女は言うこの人こそこのリーンボックスの守護女神グリーンハート様である

「はあ、じゃ『ベール』予想は付くんだが・・・何の用事だ？」

「遊びましょう」

につこり母性溢れるその巨乳を揺らしながらベールはさらに奥の部屋へと紅夜を連れていった

「でっ、なにやるんだ？」

「ゲームよ。そうね今日は格ゲーで対戦をしましょう」

内心大きなため息をつく。彼女は所謂オタクに近い存在で本人いわくゲーム、漫画、アニメは三種の神器だと剛言しているほどだ

「協会のみんなは弱いだよ。相手になるのはあなたくらいしかないの」

「仕事はどうした。仕事は」

こんなほんと、普通（？）な少女もこの大陸の守護女神なのだ。モンスター討伐等やることはたくさんあるはず・・・なのだが

「いいじゃない。少しぐらいあなたと遊ぶくらいの時間は許してくれますわ」

「はあ、朝からゲームはどうかと思うけど」

「コウヤは朝礼と依頼の時しか協会に顔をださないじゃないですか」

確かにそうだけど・・・と言いかけたが寂しそうな彼女の顔に口を慎む立場上ベールに『友達』はいないと言っても過言ではない自分と仲良くなったのはほぼ奇跡と言ってもいい

「ベール、コントローラー貸せ」

「!・・・はいコウヤ」

綺麗な笑みを浮かべるベール本当の『神』ならば世界の真実^{システム}を知っているだろうが彼女は恐らくそのこと知らない理由は彼女は綺麗すぎるからだ。知っているなら自分のように汚れ、穢れる存在になる彼女が本当のこと知るそのときはどうなるのか。この可憐な笑顔は見れなくなってしまうのか

全てに絶望し自ら破滅の道を選んでしまうかもしれない

「――けど、今あるこの現実げんそつは守ってやりたい

握れば潰れ

叩けば壊れ

なんとも脆い現実そして儚いものだけど、だからこそ守る価値は十分にある

「昇竜拳！」

「うわっ、ちょ」

「そこよ！波動拳！！」

因みその対戦の結果は二勝一敗でベールの勝利となった

「今日はここまで」

「えっ〜」

かわいらしく拗ねるベールをスルーする。

ゲームとは魔境の兵器だ呑みこまれば時間を忘れ潜り込んでしまう

「お互い仕事があるだろう。それにお前の侍従に見つかると面倒だ」

紅夜の姿はいつも漆黒のコート建物の中でも必要最低限はフードを取らないそんな恰好は勿論他の人から見たら怪しまれる。

一応、ベールの部屋ではフードを取っていたのだが昔、今日のように遊んでいたら何らかの用事のために入ってきた侍従に発見され。その怪しい姿から女神の暗殺者と間違えられてそこから大騒ぎ、協会の全兵が紅夜に襲いかかり逃げても逃げても血眼となって襲いかかる兵士は恐ろしくベールの声によりなんとかその場は抑えられたが紅夜は大目玉を喰らった苦い記憶がある

「あのときは大変でしたわね」

「他人事のように言うなこっちは酷い目にあったんだぞ」

信仰心が強いのは、恐ろしいものだおれはまさしく眠れる獅子を起こしてしまった

「そうだわ。コウヤ私とパーティーを組まない？そしたら一緒にいられるわ」

「やたら『一緒』を強調するベールだがその本心は紅夜に伝わることは無かった」

「ああ・・・確かにその案はいいけど主張なんだラステーションに」

「・・・なんですって？」

空気は変わったさっきまでフフ、アハハみたいな花畑のようなものだったが一転、魔界の扉でも開いたように真っ黒いオーラが部屋を

包む

「なぜ、ラステイションに行かなければならない理由を言ってみなさいコウヤ」

なぜこれほどまでベールが真つ黒オーラを放つのか全く理解できない紅夜だったが、ここで話さなければ断罪の斧が振り下ろされ冥界に落とす刃が、落ちてきそうなことは分かったので事情説明することにした

曰く、初心者ダンジョンに突如巨大なモンスターが現れた。そのモンスターは驚異的な強さで討伐しに行った冒険者達は一人として帰ってくることは無かった。このままではいつ街に襲いかかってきてもおかしくないそこで『黒閃』と呼ばれているあなたの實力をお借りした・・・とのこと

「だからちよつと、行ってくる」

半分隠居生活をする紅夜だが彼は、とにかくお人好しで困っている者には迷いなく手を貸す性格をしている。そんな彼が家でじっとしていることも出来ることもできず。大陸を飛び出し熟練の冒険者達が集団となってもまったく歯が立たないモンスターをいとも簡単に一人で討伐したり街を襲った百匹のモンスターを一人で殲滅したとかそんな偉業を成し遂げた有名人なのだ。

その實力は、不謹慎だが女神でさえも凌駕するなど噂が流れるほどそんなこともあり紅夜は時折他の大陸の依頼を持つことがありどちらかといえば家で寝泊まりするより宿屋で寝泊まりするほうが数が多かったり意外に多忙なのだ

因み『黒閃』は漆黒のコートを摩かせ閃光のようにモンスターをなぎ倒すことから名づけられた（勝手に）名だ

「・・・無理をしないでくださいね」

紅夜の性格をよく知っているベールは、止めても無駄だと理解しているのでとくに何も言わない。

「そんなしよぼくれた顔するなベール、とつと終わらして帰ってくるから・・・な。その時は一緒にパーティ組んでモンスター討伐しような」

「二人つきりよ」

「ああ、分かった。二人つきりでだな」

まるでデートの約束をする熱々カップルのように甘い空気になり二人の距離は徐々に近付いて行った（ベールだけが近付いています）

『グリーンハート様、いらっしゃいますか？』

バツ、とお互いの距離は再び開き緊張の空気となる紅夜はすぐさま部屋の窓を全開に開ける

「分かりました。少しお待ちなさい」

『分かりました』

ベールも皆いるときの口調になる

「いきなりになっちゃったけど行ってくる」

窓に足をかけ大きく跳躍するため力を込める

「待って、コウヤ」

「ん？」

「いつてらしゃい」

「いつてきます」

顔を合わすことない小さな挨拶お互い間にはなにも無い二人にだが他人には見えない何かによりつながっている

大きく跳躍し中世の家々を飛び越える。目指すはリーンボックスとラストেশヨンを繋ぐ架け橋だ

風を切る感覚を感じながら背中に重く乗る生命を奪うための武器を掴み紅夜はさらにスピードを上げた。――自分を待ってくれる人がいるから

「・・・・・・・・」

遠く影になっていく彼を見つめるベール。彼との出会いは本当に偶然だった

色々あり今の関係になったがベール本人としては今の関係はいまいち不服だった

「失礼します。グリーンハート様・・・誰かいらつしゃたのですか？」

「いえ、部屋の空気を入れ替えていたところでしたわ・・・今日のスケジュールを教えてください。」

彼はとにかく人の気持ちに疎い。

なのに彼は本当に優しい困っている人がいれば手を差し伸べる彼は自分が思っている以上に有名人だ。

いつもは漆黒のコートで隠れているがひとたびそれを脱げば魅了（特に女）される美少年

それに彼は性格も良し実力も強し家庭的でもあり弱点があるかどうか疑問にもつほどの完璧人間

まだ秘密裏ながら彼だけのファンクラブがあるとか
きつと、これかも彼に惹かれる女性も増えるかもしれない

でも、彼女グリーンハート改めベールは負けるつもりは一切ない。
それに・・・

――恋は壁がある方が燃えるでしょ

彼女の呟きは雄大な自然に生み出される風に溶けていった

ラストেশヨからの依頼（前書き）

感想をくれたME-GA様マジすいません（土下座）

ラストেশヨンのからの依頼

「ううう・・・はあ」

リンボックスとラストেশヨンの架け橋を無事に渡る事がことができた紅夜、もちろん来る途中モンスターの襲撃はあったが所詮は雑魚レベル皆さん仲良く紅夜の刃の錆となった

さて、本題と行こう。紅夜はあまりラストেশヨンが好きではない苦手だった。その理由はいろいろとあるが紅夜は基本的に自然を好みルウィーやリンボックスを好みだ。プラネテューヌもあればあれでいいのだが・・・産業革命中のラストেশヨンは環境汚染が問題となっている。このラストেশヨンの守護女神^{ハート}ブラックハート様の心がけにより昔よりは幾分ましになったが。

一言で言えば空気が悪い

「はあ・・・」

文句を心の中で呟いてもしかたがない。自分は困っている人を助けるためにここに来たのだそうも言ってられないそれが今の自分、零崎 紅夜に唯一出来ることだった

「行くか・・・」

天空に昇る黒雲を見上げながら紅夜は最寄りの協会にむかう

「・・・ん？」

経緯はどうとあれ無事に協会に辿り着いた紅夜だが何やら入口が騒がしい。よく見ているとまだ幼さが残る女子三人と協会側の男性が言い争っていた

「馬鹿を言うな！ラステーションの軍隊でさえ、モンスターに苦戦しているんだ！お前たちみたいな子供がモンスター退治など、百年早い！さっさと帰れ！」

「見た目で判断しないでほしいです！こう見えて私達は今まで何度もモンスターさんをやってきてきたですう！」

ねぶねぶだつて変身したらうんと強く、格好良くなるです！そうです！変身して見せつけてやるです！」

「変身？何を言っているんだお前。ごっこ遊びなら余所で「大人の大人が見つともないぞ」・・・誰だ！部外者は・・・」

横槍をいれたのは紅夜だった。大の大人が子供に対して言う言葉じゃないからだ。相手も引つ込んでると言いかけたが紅夜を見たとなん止まった。全身漆黒のコートの姿はとても印象的で一度見た人物なら脳裏によく残る格好だった。恐らく彼も一度紅夜の姿を見ているであろう

「依頼書を拝啓した詳しいことが聞きたい上に話しを通してくれな
いか？」

威圧を込め送られてきた依頼書を協会の男に差し出す

「こ、『黒閃』！？・・・分った。直ぐに話を通す」

紅夜に差し出された依頼書を怯えるように受け取り逃げるように協会の中に消えていく。全くと紅夜を呟き女子メンバーに正面を向ける

「子供がモンスター退治だって？怪我するよ」

勇気と無謀は違う。人間はたった一つしかないものを持っているそれは命

それは簡単に消えてしまう。病気でも、怪我でも、たった一つの傷が生死を分ける事がある。

「もう！私達は強いんですう！ねぶねぶは変身すればどんな敵でもやっつけることのできるのですう！！」

薄ピンク色の髪をした少女が大きい声で訴える。正直普通の人ならば少し行きすぎた子供のうわ言と思うであろう。しかし、紅夜は眉を細めた身近に一名変身できる奴を知っているからだ

「・・・それ、どんな変身なんだ？」

「えっ？ 信じてくれるのですか？」

言った本人もまさかの返事に驚いた表情を見せる

「まあ・・・な」

その少女、ねぶねぶと呼ばれた少女の事を話し始めた。性格が変わるとか、姿が変わるとか色々

聞いた話ではあいつ（・・・）の変身時と似ている点がいくつかある。でも女神がたしか四人のはずでも今は、いやでも・・・もしかしてこいつは

「えつと、貴方が『黒閃』ですか？」

しばらく思考を動かすと緑色のリボンで縛ったサイドポニーの少女が話しかけてきた

「ああ、勝手に名付けられた名前だ」

「あいちゃん、この不審者みたいな人だね？もしかして本物の不審者！？」

・・・グサツ、見えぬ槍が紅夜の胸を貫いたがなんとか正常に戻る。自分でも怪しい格好している自覚はあるがこうも正面きって言われると辛いものがある

「なにつて、知らない・・・ああ、ねぶ子は記憶喪失だったわね。彼は黒閃、凄腕のモンスターハンターよ」

「えつ、あの雑誌で取り上げられた怪しい人物トップ1の人なんですか？」

グサグサとまたも見えぬ槍が紅夜の胸を刺す。それも複数、怪しい人物トップ1ってなんなんだよ。こんどは少しでもファッションでもしたら少しは世間の目は変わるだろうかでもこれ結構お気に入りなのに・・・自分が可笑しいのかと真剣に悩み始める紅夜だった

「でっ、話は戻るが止めておけ見た限りそれなりの实力はあるよう

だが慢心は死を招くぞ」

少し強み言う。初心の実力者はよくこうした『自分は意外に強いんだからもつと上をいける』という勘違いする奴を紅夜は見て事があり偶然助けれたこともあったが助けられなかったこともある。そうこれは警告でもあった

「大丈夫。私頑丈だからちよつとやそつとじゃやられないよ！それに私は鍵の欠片っていうアイテムをあと三つも集めないといけないし」

「・・・・・・・・」

俺の言った事理解しているかこいつと思ったが、仲間もいるようだし大丈夫だるともう投げやりなことを考えていると協会の扉が開き中から先ほどの男が出てくる

「お待たせしました。黒閃様どうぞ中にお入りください・・・・ってまだお前達いたのか！子供はとつとと帰れ！」

愛想良く笑顔を作り出てきた男であつたが、女子メンバーを見ると嫌悪を表情に変わり激を飛ばす

「・・・協会つて、ずいぶん不適切なのね。女神様に仕えるアナタ達がそんなじゃブラックハート様もたいしたコトないんじゃない？」

「何とでも言え！我々国政院は、女神にへつらう教院とは違う！女神がどう思われようと、痛くもかゆくもないわ。お前達の方こそあんまり聞きわけがないと痛い目を、ヒッ！」

それ以上男は口を開く事が出来なかった。それは自分の首元に黒く闇色に輝く大剣が向けられていたからである。協会の男も驚いたが女子メンバーも驚いた。視えなかった抜く瞬間がその大剣を見ると少なくとも紅夜自身の身の丈はあるそれをほぼ零秒で片手で協会の男に突き付けたのが・・・人間技ではない

「その閉まりのない口を閉じろ

——怒るぞ？（・・・）」

奈落のような低い声を放つ。それだけでその協会の男は自分がこの男が生殺与奪されていることを理解する。紅夜の持つ大剣もそれに反応するように鈍い光を放つ

「すつ、すいませんでした」

「・・・・・・・・」

自分の体の一部のように大剣を回し背中にも納める。・・・隠すそのフード中にはどんな表情をしているのか誰も知ることは出来なかった

「入っていいか？」

「は、はい。どうぞ・・・」

震える協会の男とともに紅夜は協会の中にその姿を消した

「あの、不審者みたいな格好の人。以外にいい人？」

「そうですね。私達を庇っているように見えました」

「そうね。でもずっと子供として見られていたけどね」

取り残された女子メンバー。ネプテューヌ、コンパ、アイエフは街を歩いていた。

その背中には冷たい風が吹いていた

「これからどうするのです？モンスターさんのことを聞くところか協会の中にも、入れてもらえなかったですう・・・」

「なにもあんな言い方しなくてもいいのに！！やっぱ大陸が違えば協会も違うのかな。・・・せちがたい世の中になったね。」

「ソレにしたってちょっと違い過ぎよ。女神様のコト、呼び捨てに
してたのよ！？教院とは違うとか女神様なんてどうでもいいとか！」

文句を並べる二人、明らかに嫌悪な扱いを受けた三人にはストレス
がすごく溜まっていた

「むー・・・分らないコトは街の人に聞いてみようっ!!」

「まだまだ序盤です。これしきのことでへこんだり、変に先走りす
ぎないでのんびりまったりいくですう！」

決意を改め元気にエイエイオーと掛け声を決める二人。そのなかで
アイエフは真剣な表情で考え込んでいた

「どうしたのですか？アイちゃん」

「ねえ、これは私の提案だけどーー」

『鍵』との出会い（前書き）

マジュコソネってみんな何レベで倒しているんだろう……

『鍵』との出会い

「・・・何が情報提供だよ。場所しか分ってないじゃないか」

愚痴りながら協会の重たい扉を開ける。分ったことはそのモンスターがいるダンジョンの地図と力が強いぐらいだった。後の話は自分の従者にならんとかそんな話だらけだった。

最強とまで呼ばれる紅夜を駒にすれば何かと便利なのだ。まず自分の立つ場や命など色々守ってくれるからである

紅夜はあんまり政治というものは嫌いである。裏でこそそ何やっているか分からないしこの大陸の国政院は賄賂でアブニールという会社の悪行をスルーしていると噂で聞いたこともある。さすがに確証はないので深く首を突っ込んではいないが・・・

「待っていたよ！えっと・・・『ごくせん』！！！」

ドゴン！！

「なにが不良高校生と熱血女性教師の青春ドラマだ！？おれは『黒^{くろ}閃^{せん}』だ！！」

なにかの反射神経が働いたのかその場でずっこけてしまった紅夜。よくみると先ほどにも出会った女子メンバーだった

「ちょっと、ねぶ子。いきなり名前間違えるのが失礼だと思うわ」

「あれ、間違った？というか『ごぼっ』さん。ナイスリアクション

「夢の為に笑いの道を究めているの？」

「もはや原型すらねえ……こいつら一体なんだよ……」

目上の人と話す言葉を知らないのかと考えてしまう。こいつら助けない方が世の中の厳しさを知ることが出来たかもしれない

「私は愛と正義の謎の美少女ネプテューヌだよ！因みに呼び方はねぶねぶ、ねぶ子でもなんでもあり！」

「自分から言うのはどうかと思いますけど……コンパといいます。よろしくですう」

「私の名前はアイエフよごめんなさいね。ねぶ子は少し常識知らずのところがあつて……」

「疲れた。モンスターと戦ってないのにものすごく、疲れた……俺の名前は零崎 紅夜。紅夜が名だよろしく頼む」

こうして始まり（スタート）は切られたあとは終わり（ゴール）に進むだけその間にどんな苦悩があるだろう

。そしてこの出会いは希望を生むかそれとも絶望を呼ぶ出会いだったのかまだこの四人はそんなことを知るわけもなかった

「……強いモンスター？」

「そう！私達はいーすんを助けるために鍵の欠片っていうアイテムを持っている強いモンスターを探しているの。あいちゃんから聞いたんだけどこうちゃんは大陸中を回って強いモンスターを倒し回って

いるんでしょ？なにか知っているのかな？って」

現在四人は宿屋のレストランにいた偶然か否か泊まる予定の宿屋が一致していてネプテューヌは先陣を切って話を進めていた

「・・・最初に一言こうちゃんとは俺のことか？」

「そうだよ。こうちゃんいい愛称だと思うわない？」

「・・・あつて早々名前を間違えるわ。仲良くもないのに愛称付けるわ。妙に馴れ馴れしくないかと思う紅夜だったけど彼女の笑みをみるかぎり悪気なしのようで、これも彼女の個性なのかと割決めることにしようと紅夜は心に決めた

「あの、こうさん。何かとても疲れた顔しているんですけど大丈夫ですか？」

「コンパ。今はそつとしてあげなさい普通なら私達怒鳴られるほど失礼なことしているんだから」

アイエフの提案はあの『黒閃』に情報を求めることにした。彼は大陸中を渡り歩き軍隊でも中々手を出せない強豪のモンスターをことごとく倒して行っているからだ。彼ならばネプテューヌの捜すアイテムを知っているかもしれない。そのことを自分のパーティーに話すとそれじゃ聞いてみようかと話になったのだが・・・恐らく彼からしたら私達の好感度は零に近いであろうとアイエフもまたため息をついた

「まず、その鍵の欠片とやらはしらない。強いモンスターは心当たりが多すぎるがなにかその鍵の欠片を守るモンスターの特徴とかな

いか？」

「えっと……とにかく強い！」

「……………はあ」

まさにため息しか出ないこの子にはもう少し後先考える思考能力はないのか

「残念だけどそれだけじゃ、どうしようにも出来ない。ラスティシヨンの強いモンスターが棲んでいそうなダンジョンを虱潰しに探したら一ヶ月以上はかかるぞ」

「そつ、そんなに！？」

「大陸中を歩き回るんだそれぐらいは必要だ。それにお前らの今のお前達には無謀だ。死ぬぞ」

今度は本気で眼力を込め睨む。好奇心は猫を殺すそんな危ない所に案内なぞ出来るかその気持ちだけは本物と分ったが早すぎるせめて今の自分達よりかなり強くなってもらわないと不安で溜まらない

「だって、ねぷ子。やっぱり自分達で調べるしかないみたいよ」

「うっ」

さすがのネプテューヌも紅夜の眼力には竦み呻き声を出す

「お前達が今よりもっと強くなったら教えてやるよ日々精進。毎日の積み重ねがなによりも大事だ」

今の紅夜の実力もそのすべて努力の結晶と言ってもいい。ただ目の前にいる誰かを助けたくて血反吐を吐く程の過酷な修行を耐え今の紅夜があると言ってもいい。だからこそ・・・

「はあ、ネプテューヌちゃんその鍵の欠片っていうアイテムの特徴は？」

「えっ？」

「もしかしたこの先その鍵の欠片っていうアイテムを見る機会があるかもしれないかな。もし見つければお前達に譲るよ」

目の前でだれかの笑顔が失う事は紅夜にとってそれがとても苦痛だった

「きゃ！？」

ピチャ！とてもカッコいい思考はいきなり中断されたそれは同じレストランにいた小さい子供が躓き手に持っていたジューズは一回転、見事に紅夜の頭に落ちた

「・・・・・・・・」

そのジューズはオレンジジューズらしく紅夜の漆黒のコートはオレンジ色に染まっていた。とりあえず今日は厄日なのかとネガティブな思いを抱きつつ立った

「ふええ・・・」

その子供はまだ幼くしかし見た目怪しい度MAXの紅夜が近づけば
勿論怖がりその瞳からは今にでも大粒の涙が零れおちそうだった

「大丈夫か？大きな音したけどどこか怪我はないか？」

子供と同じ目線にまで腰を落とし手を差し出す

「ふえええええ
・
・
・」

しかしその子供からは全身真っ黒の誰かが近づいてくるフードで隠された喜怒哀楽の見るこたないその顔は更に子供の恐怖を煽る

「
・
・
・
・
・
はあ
」

今日だけで何度ため息をついたか分らない。とりあえずと紅夜はフ
ード掴みゆっくり捲りあげた・・・

[[[[.]]]]

空気が変わった。芸術、そして神秘的。もっと言えば神々しいといつても間違えない。

首まで伸びた白銀の髪、右目は蒼穹を見るような蒼き瞳、左目は真紅のような紅き瞳。

一流の画家でさえ造れないような顔は優しく子供を見てその様は視線を、

注意を、
心をも、

一瞬にして奪い去った

かっこいいとか綺麗だとかその程度の次元を超越し彼は暴力的にま
で美しかった

「一人で立てるか？」

「・・・うん」

今にでも落ちそうだった涙は引つ込み少しよろけたが無事に立つことが出来た子供を紅夜は優しく頭を撫でた

「あゝもう。今日は運が悪いなホントなにかに憑かれているのか俺」

愚痴を零しながらなんだかんだあの子供を両親のところまで送りつけ問題解決。ネプテューヌ達が座っていて自分が座っていたテーブルに再度腰を落とす

ジューズによりベトベトになったコートは既に従業員にクリーニングに出してある明日、昼前までには頼んでいる。

「「「・・・」」」

「・・・なんだよ」

紅夜を見つめる三人の視線それぞれ反応が違うが
ネプテューヌは紅夜を見ながら何度も瞬き
コンパは口をあんぐりと明け啞然とし

アイエフはその余った袖で一度紅夜を見ては目を拭いてはまた見る
としたループ

「本人だよな？忍法身代わりの術で入れ替わりましたなんて無しだ
よ！」

「………かつこいいですう」

「噂ってほんとだったんだ……」

上からネプテューヌ、コンパ、アイエフの順に口を動かす

「なんでこうも顔見せると同じような感想が返ってくるんだ？……
そんなに变か俺の顔」

ある意味では可笑しいと言っても良いだろう。だが勘違いしてはな
らない紅夜の外形のことを一言で言えば美しすぎるのだ（………
……）

「ところでこれ以上の話はあるか？そろそろ明日の用意をして寝た
いんだが……」

「う、うん。こうちゃんは私達とパーティー組んでくれないかな？」

「ちょ、ねぶ子それは……」

それはまだ紅夜を待っていたときに出了た話だったあの人がそんなに
強いならパーティーに入れちゃおうみたい話だった。たしかに紅夜
が自分達のパーティーに入れば泣いて喜ぶほどだが彼は今までパー
ティーを組んだことがない。

嫌、必要がないと言ってもいい。誰からも助けを必要としない孤高でありながら絶対的力を持つ彼には自分と同じくらいの強さしか興味がないとまでささやかれる程だ。そして帰ってくる返事も予想して通りだった

「無理無理、お前達と俺とじゃ違い過ぎる」

「え〜〜、」

納得いかないようなネプテューヌだがそれは当たり前だ。紅夜は自分が他人に自分の闘いを見せるのが拒否していたその理由は簡単だアレ（・・・）を見せるのも嫌だったし更に言えば自分は人間じゃない異体の存在、彼女達のような綺麗な者に近づいてはイケナイ

「それじゃ、お休み俺はもう寝る。じゃあな（・・・）」

ネプテューヌ達は何か言っていたような気がするが、今の紅夜には聞く耳はなくもう会わないでしょうとでも言うように去って行った

朝のひと時（前書き）

変身後のネプティーンと変身前のネプティーン・・・どっちが好き
ですか？

自分は変身後が好きですね。 うんうん

朝のひと時

世界とはなにか？

そんな質問された記憶がある

俺は間違いなくこの世にある全てのことと答えた

そんな答えにそいつは悲しそうな顔した。そいつにとってその答えは自分を自分自身を否定するものだと言った

分らない今でもそもそもその問題に答えは存在するのか
千差万別に帰ってきそうなその疑問に答えはあるのか

俺は聞き返したそれじゃお前としては世界とはなにかと
相棒にして

師匠であり

親友である

そいつはこう答えた

—— 幻想の蜃気楼と

「……最悪な目覚めだな。おい」

嫌な思い出だ。後悔は今でも自分を責め自分の無力を証明するよう
な思いだった

ねむいとかくねむい。昨日の疲れが身体重くする。なぜ自分は彼女達に関係を持つような言語を取ってしまったのだろう基本的に分が名乗るようなしなかった。イレギュラーの自分は誰かと関係を持つようなことを避けてきたはず・・・なのに、何故だろう

「ははは、まだこんなことを考えるってことは俺はまだ人間なのか」

当たり前のように夢を持って、

当たり前のように生きて、

当たり前のように息をする、

合理的に非合理的に正義と不義、闇と光が分れている自分はまだ自分の意思がありきつと今この瞬間生きているんだ。生きていられるんだ。

生きる資格も死ぬ資格もないそこにあるだけの幽霊のような自分はまだ心臓がはちきれそうに鼓動する。

うん、大丈夫、零崎 紅夜お前はまだやれる

そんなシリアス思考を遮断し自己暗示を自分自身に掛ける。そして起き上がる為にその毛布を取る

「・・・・・・・・」

紅夜はありえないものをみたように何度か瞬いたこの部屋はいるのは自分だけの筈だ何故なら一人部屋に泊まったのだからなのに・・・なのに・・・

「すうすうすう・・・」

薄い紫色の髪に幼さ残る顔、初対面で名前間違える。そして妙に馴れ馴れしが元気な少女ネプテューヌ

彼女は、紅夜の胸に顔を押し付け気持ちそうに熟睡していた。ついでに言えばいい夢でも見ているのか口からは涎

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紅夜はあんまり女性と会話すること少ない。仕事がらみでも一言、二言、まじ合わせる程度だ

昔の記憶はあるかもしれないが紅夜にとってはそれは禁忌^{タブー}なので心の奥底に蓋をしているので思い出さないようにしている
女友達も一人はいるのだが彼女とは違ったタイプなのでどう扱っていいのか分らん

「・・・・・・・・ふっ」

そんな紅夜が取って行動とは・・・！

「夢だ。寝よう」

現実逃避であつた。つまるところ零崎 紅夜。彼はヘタレだった

「むにやむにや、・・・アレ？」

紅夜が再度眠りにあと付いたあと入れ替わるようにネプテューヌは目覚めた。

「・・・・・・・・」

まず最初に思ったことは、自分が誰かを抱きしめていることそして

胸であるであろう部分に顔を押しつけていること、ふつくらとした感触はない為コンパではない事が分る。だとしたら誰か？

「あつ、・・・」

魅せられたという言葉が正しい。見上げるとそこには安らかに寝息をする紅夜の顔する昨日、見て思わず見惚れてしまったその顔は今自分との距離は限りなく近いものだった。自分の顔に血液が集合していくのが分るほどネプテューヌの顔は真っ赤に染まった。

「・・・温かい」

心のそこからの言葉だった。自分には記憶がないなので家族と言う事を知らない

でもこの全てを癒し包みこんでくれる温かさはきっとそれは・・・

「すうすう・・・」

答えが出る前にネプテューヌはまた夢の世界へ旅立った。
紅夜を抱きしめ眠るその光景はまるで仲のいい兄妹だった

チェン、チェン、チェン

「ん・・・」

再び朝の目指しに目を覚ます。
外の風景は相変わらず黒い曇りが立ち上っていた

「ふう・・・よし」

念の為と自分の頬をそれなりに強い力で引っ張る当然痛みがして眠気から活性化する

あれは夢だ

あれは夢だ

大事なことなので二回言いました

「よし・・・ととつと依頼を終わらして帰ろう」

それにしても変な夢を見たものだ一日の半分くらいしか関係がないのにあんな夢を見るなんて・・・もしかして俺、要求不満とかいう奴？いや、俺そんなことまったく興味ないし・・・まあ気にしない方が世の中の為だね。うん、とまたしても自分がつくりだした決めつけ（幻想）に入り込む紅夜だが

「ん・・・」

パキッ、幻想が破壊された瞬間だった

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい。なんで俺の部屋に居るんだ？」

紅夜の胸に顔を当てまるで抱き枕のように足も絡ませる。少女ネプテューヌがいた

紅夜は彼女の頭を何回か突いた。するとネプテューヌはようやく起きたらしくゆっくり顔をあげた

「・・・ねぶっ？」

「おはよう。そしてなんでここに居る？」

「…………おはよう。こっちゃん」

「はい。おはよう」

「……………」

「……………」

「……………」

長い沈黙のネプテューヌは既に紅夜から手を離し紅夜の無駄にあふれるプレッシャーに正座されていた

「てへ♪。部屋間違えちゃった」

「出てけ————！！！」

宿屋に怒りの叫びが轟いた瞬間だった

「なにやってんのよ。ねぶ子」

「朝起きてもいなかったから心配しましたですう」

「トイレに行って寝ぼけて隣（俺）の部屋に間違っただけだとか・・・はあ」

「ごめん。ごめん。ホント反省しているよ！」

ただいまアイエフ、コンパを含めて説教タイム
罪人ネプテューヌは頭を掻きながら反省（？）それはまるで幼い子供が小さい悪戯に怒られているような感じ

「アイエフちゃん。こいつにはしっかりと怒っていてくれもうやっつけられない。俺にも仕事があるから・・・」

「はい。あとそのちゃんずけやめてくれませんか？」

「Ok。分った。アイエフ」

そろそろコートもクリーニング終わっているころだと思っし早く行かないと被害が街にまで及んだら俺の責任になってしまう

「あの〜。こうさんってやっぱりこれから強いモンスターさんを倒しにいくんですか？」

アイエフががみがみネプテューヌに説教している間際でコンパは口を開いた。

「ああ、初心者レベルのダンジョンに異常種が出たらしく近辺にも被害が出始めているらしい！今のところそいつをまともに見て帰って奴はいないらしい」

あの国政府のくれたそれほどない情報の一つだ。とりあえず強い。

視た者は帰ってきた者はいない。巨大それくらいだ

「それを一人で倒しに行くんですか。危ないですよ誰か助っ人がいると思いますう」

「それ言い案！私達が付いて行くよ！！」

「・・・勝手に話を進めるな！」

ゴンツ！いきなり話に介入するネプテューヌに紅夜のチョップが叩きこまれた

「いたーい！。タンコブが出来た！」

「話は戻るけど俺一人で大丈夫だ。いつも俺だけでなんとかできたしな」

「そうなんですかあ・・・」

「プロが言っているならその通りでしょう。ほらねぷ子も転がってないで早く立ちなさい」

心配そうに呟きコンパだがアイエフに補助した言葉に分りました。と引くその間にも紅夜の放ったチョップにより床を転がるネプテューヌ

「あいちゃんはこの痛みが分らない！？すごく痛いんだよ！」

「元を辿ればあなたが悪いんでしょ？当然の罰よ」

あいちやんが冷たいといいながら立つネプテューヌを尻目に紅夜は部屋に置いていた自らの武器『黒曜日』を取りだした

「・・・・・・・・」

鋭い目つきで黒曜日を見るとそのまま専用の鞘を納めそれを背中に背負い部屋を出ようとした

ガシッ

「・・・・・・・・まだ何かあるのか？」

紅夜の服を掴んだのは、ネプテューヌだった

「連れて行つて」

「その鍵の欠片とかドロップしたら上げるって・・・・信用できないのか？」

「信じているよけど、昨日あれほど言われてはいそうですかって納得できないんだよ！私達も連れて行く」

彼女は意外にもプライド高いのかそれかワガママ。大きくため息をつく。コンパとアイエフを見れば苦笑の表情を作っており諦めるといっているようなものだった

「分った。今回だけだ」

「ホント!？」

もうどうにでもなれと思った。無理に断れば本当に着いてきそうだしそれならいつその事、一緒にいた方が安全かもしれない。とりあえずアレ（・・・）を見せない程度のレベルの奴だといいいんだけどな

「食事も含めて身支度は2時間後この宿屋の出口に集合。一秒でも遅れたら置いてく以上!」

「質問!」

「なんだネプテューヌ」

「おやつは何円までですか!？」

ゴソッ!今度は拳骨因み狙った場所は先ほどチョップを叩きこんだ場所なので痛みは倍増。涙目でやられた場所を抑えしゃがみこむネプテューヌ

「他に質問は?ちなみさつきみたいにくだらな質問した奴はネプテューヌと同じ末路になるぞ」

「質問いいですか?」

手を挙げたのはアイエフだった。

「なんだ?アイエフ」

「そのモンスターの情報があれば教えてくれないでしょうか?」

「ああ、資料はここに置いておくとは言っても大した情報はないんだけどな。あと別に敬語はいいぞ」

一応これからパーティーを組んで一緒に戦う奴だあんまり敬語もすきじゃないけどな

「そう。分ったわ」

「とりあえず目標は誰ひとりとして傷つくことなく生還する事いいか？」

「分ったわ」

「わかりました」

「痛いよ」これが噂に聞く親父の鉄拳というもののなのか・・・」

一人だけ返事をしなかったが紅夜達は完全スルーの方向でいった

「あと、お前達は俺が守る」

唐突に紅夜はそう言った。誰かを守ることそれが昔も今も変えなかった信念

そんな信念は笑われたことがあった空想で描いたような正義のヒーローだねと

たとえ空想だろうが

たとえ笑われようが

たとえ馬鹿にされようが

これだけは逃げた時に持っていた最期の気持ち。零崎 紅夜を支え

る最期の柱

「それだけだ・・・またな」

木造で出来た扉は古臭い音を立てながら閉まる。顔を真っ赤にした三人を残して

パーティ組んでの初戦闘！（前書き）

ちつ、親の監視が強い

不用意にゲームしたら小言言われる

いつクリア出来るだろうか

今回少し戦闘シーンが入ります出来はあまりよくないかも知れませんがよろしければ見てください

パーティ組んでの初戦闘！

「あー、・・・いい天気だな」

広い草原を歩きながら紅夜は呟いた。全身を隠すような漆黒のコートを靡かせ

背中には自分の身の丈はある大剣『黒曜日』を背負い天を見つめる

その日の天気は雲ひとつない晴天の青空だった

「ねえ、コウヤ黄昏るのはいいけど前見ながら歩かないと危ないわよ？」

後ろを歩いているアイエフに指摘が聴こえる。でも今いるこの状況を意識しないようにするためにこれはしかないんだ・・・！

「くくくくくく」

豊富な感覚がいつぱいに伝わる左腕と、未成熟な青い果実のすっぱさを感じさせる右腕くっ・・・ダメだ意識したら俺の負けだ！

クールになれ。零崎 紅夜！

「こうちゃんって・・・温かいね」

「そうですねえ～おもわずは眠ってしまいそうですっ」

「こら、眠らないのコウヤが迷惑そうな顔していわよ」

いや、かなり迷惑しています。アイエフさん

「おい、いい加減に離れてくれないか？まだ合って一日程度しか付き合いが無い男に抱きつくのは不謹慎だと思うぞ」

その気になれば解くこと簡単だが可憐な彼女たちを無理やり振り払うのは男として最悪な行為だろう

「そうなの（んですの）？」

・・・常識知らずと、天然ボケに言っても無駄か？

「それよりこうちゃんってなんでいつも顔を隠しているの？もったいないよ物凄いイケメンなんだし」

お返しとばかりにネプティーンが口を開く。その問いに紅夜はその隠したフードの中で少し困った顔して

「ほら、おれの目。オッドアイっていうんだけど気味悪いから・・・それで隠すようにしているんだ」

まるでなにかで固めたような言葉を言う紅夜その本心は隠れたままだった

「そんなことないよ！すごく綺麗だと思うよ！」

「そうねサファイアとルビーみたいで綺麗だと思うわ」

「そうですよ！こうさん！」

三人の言葉に意外そうな顔をする紅夜、そして静かにフードに手を掛け脱ぐ。露わになった太陽の光に煌く銀髪、蒼と紅のオッドアイ神秘的とも言えるその光景にネプティー又達は思わず頬を赤らめた

「ありがとう」

太陽をバックに微笑む紅夜。何無言かせないその完璧と言ってもいい絵はさらにネプティー又の温度を上昇させた

「かつこいい、かつこよすぎるよ・・・／／／」

「太陽バックであの顔は卑怯でしょ・・・／／／」

「はうゝ胸がドキドキするですうゝ／／／」

「????」

三人のリアクションを理解できないように顔を傾げる紅夜。
目標のダンジョンまでの距離はもう目と鼻の先だ

ピコーン

「・・・コウヤが誰かにフラグを立てましたわ。・・・帰ってきた

らOHANASSIね」

その時、とある緑の大地に立つ協会の一室でコントローラを手に恐ろしい笑みを浮かべる女神がいたとか・・・

さつきものすごい悪寒がしたがとりあえずダンジョンに到着、ダンジョンの中は驚くほど静かだった

「・・・・・・・・酷いな」

先へ進むとネプティー又達も思わず顔を青ざめた。もともとこのダンジョンに住んでいたであろうモンスターの残骸が無残に転げ落ちていた

「まったくね」

多少なりともなれているであろうアイエフは自分の武器カッターを装備する

「ネプティー又は変身しとけコンパも武器くらい構えとけ・・・いつ奇襲されてもいいようにな」

地面に残るのは巨大な斬痕、武器を持っているのかそれとも鋭い突起があるモンスターなのか

『SET UP』

機械音が聞こえネプティーヌが光に包まれる身長伸び特殊なユニットに身を装着させ濃くなった紫色の髪は三つ編みのツインテールとなりその手には大太刀が握られた。そのまなざしはまさしく戦士
の意思が感じられた

「よし、前衛俺とネプティーヌ、後衛コンパだ。アイエフは中衛だ分かったか？」

思えばこのネプティーヌ達のパーティ（俺抜き）バランスがいいな
前衛にパワー系ネプティーヌ、中衛にオールラウンダーのアイエフ、
回復役のコンパ。とな俺もオールラウンダー何だが一人の時間が多
いからパワー系になっているんだけどな

「分かった」

「頑張るですう！」

「ええ、分かったわ・・・初めて見たのに驚かないのね」

「いや、内心驚いているけど。ネプティーヌはネプティーヌってこ
とは分かっているから、な」

「そう。・・・ありがとう」

最後の方は聴こえなかったけどうつすらと笑顔になるネプティー

又になる。いつもと違うネプティー又にドキツとしたがすぐに心を入れ変える。

「・・・・・・・・」

背中に感じる二つの鋭い視線に身の危険を感じるが腰を下ろし地面に手を当て意識を集中させる

「なにをやっているのですか？」

「こんだけ殺戮したんだ・・・もうこのダンジョンに他のモンスターはいないと思っていいだろう。そして情報によると巨大なモンスターらしいからな足音さえ感じられだいたい位置は掴める」

すごいんですねとコンパと呟く。そして目を閉じ自分の意識を膨張させそれを根のようにするイメージをする

「・・・・・・・・」

緊張の時が過ぎ去る。ネプティー又達は紅夜を囲むように円陣を組み奇襲に備えた

「・・・・・・・・！？全員離れろおお！！！」

「えっ？」

一瞬で紅夜はネプティー又達を弾き飛ばし神速で抜刀する！

ガキンっっ！！！！

上から巨大な斧が振り下ろされるそれを『黒曜日』で受け止める

「つ・」

それは確かに巨大なモンスターだった

巨木のように太い腕と足に散々斬ってきたこと証明する赤黒くなった二つの斧、頭を守るための兜その全長は約5mはあるだろう

「は、悪趣味な野郎だな!!」

じゃらじゃらと首にぶら下がる骸骨のイヤリング

それはこのあたりのモンスターの骸骨だったりこのモンスターを討伐しに来て返り討ちにあつたであろう人間の骸骨も……

「はああああ！！！」

もう片方の剛腕が振るわれようとした時、それをいち早く察知したネプテューヌが突進する！

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ——— ! ! ! ! ! ! ! !

耳を劈くような咆哮が響き突進するネプティー。又にかウンターを入れるように斧を振るう

「くっ！」

ガキンっ！！

ネプティー又はすぐに刀を前に振り斧と鐔迫り合いなる

「――！！！」

紅夜は身体を一回転させ受け止めていた斧を地面に落とす。そのことによりモンスターの注意が紅夜に向くその瞬間、ネプティー又は斧を受け流しそのモンスターの顔前に立つ

紅夜は『黒曜石』を地面に突き刺し円を描くように遠心力を込めネプティー又は大太刀を身体を巻くように構え二人の一撃はモンスターの腹と顔を捉えた

「……中々やるじゃないか。ほんとに口だけじゃなかったんだな」

「当たり前じゃない。私は世界を救うのよ。この程度朝飯前だわ」

吹き飛ばされモンスターは壁に激突しその兜は一部完全に断たれ、顔が一部露わになにその表情からは憎悪が溢れだした

「二人ともすごいですう……」

「ええ、そうね。あの百戦錬磨の二人がそろえば敵なしね」

「■■■■！！！」

二人の会話を遮断するようにモンスターが吠える。空気が振動しあふれ出る殺気が死を誘う

「いくぞ、ネプティーヌ。」

「ええ行きましょう。コウヤ」

そんな時、二人は笑った。

いや、彼らの後ろにいるアイエフ達も笑っていたこの程度の壁も四人にとっては十分超えて行ける

「オオオオオオオ・・・！！！！」

低い咆哮と共に崩れていくモンスター

怒りで我を忘れたのかやみくもに攻撃してくるのでアイエフとコンパで注意をそつちに回し

その隙に紅夜とネプティーヌの一撃が立て続きに決まりついにその生命が絶たれた

「手ごわかったですう・・・」

「体力が底なしだったわ」

「このパーティなら天下をとれる！」

「はは・・・元気だな」

上からコンパ、アイエフ、プラティーヌ、紅夜として順番でコンパとアイエフは疲労の表情を見せるがネプティーヌは元気で喜んでいた。紅夜も黒曜日を地面に刺し地面に座り込んでいた

「ふう、『癒しの風よ。戦士たちにしばしの休息とご加護を――フォース・シールド』」

詠唱を詠み、地面に手を置く紅夜を中心に魔法陣が展開されネプティーヌ達を包んでいく

「えっ、こうちゃんって魔法も使えたの？」

「ああ、基本的には肉体強化の魔法しか使わないんだが一通りは出来る。因みこれ守護と回復の両方の魔法だからしばらく休もう」

「本当すごいんですね。魔法も使えて剣術もすごく強いですし弱点がないんです」

「そっか？。まあ一人でいろいろこんなモンスターを相手にしてたんだ。これくらい出来ないと今頃モンスターの胃袋の中だよ」

このモンスターより強い奴とか戦ったことあるしなあおのときはしんどかったな

まあ、アレ（・・・）使わなくてよかった。このモンスターもこいつらがいなかったら迷わず使っていたな

「ほんと、私たちと合ってそう立ってないのにすぐに戦術を組み立てたりするしほんと強いわね。いい経験になったわ」

「経験積みめば誰にでも出来るようになるさ」

そんな雑談を繰り返し傷が癒えダンジョンを後にするネプティー又達、その後ろで紅夜は静かに空を見ながら思考を動かす

なぜこのモンスターは街を襲わなかった？

最初にこのダンジョンに来たときこのモンスター以外のモンスターは全て殺されていた見た限りもう白骨化しかかなり時間がかかっているはずなのにそうなると勿論食料がないたまに来るであろう冒険者もこの巨体だ。

この巨体を維持するにはかなりのエネルギーが必要になるはず・・・こここのダンジョンは正直他のダンジョンに行くよりずっと街の方が近い奇襲を考えるほどの知識があるにも限らずだ

まるで・・・誰かがこいつ飼育し操っていたように（・・・・・・・・・・・・・）

「（悪い予感がする・・・）」

晴天の青空を覆い隠すように黒雲が覆っていく・・・一雨来そうだ

心のなかになにか突っかかるものを感じながら紅夜は足を速めた・・・

「フフ」

全て見られていたことを知らず

パーティ組んでの初戦闘！（後書き）

今回に出てきたモンスター……名前ないんですけど

牛鬼を一回りでかくして斧を二刀流に

首に色んな生き物の骸骨をネックレスにした感じです

後書きはオリジナルモンスターや技の説明などをしていきたいと思っています。では

P・S・タイトル募集中

まさかの出会い（前書き）

学校が本格的にスタート・・・だるいつす

まさかの出会い

今ある現実がもし壊されたとき人はどうするのだろう
壊されたものを元に戻そうする人
絶望しそのまま朽ちていく人

そんな人の歴史をずっと見てきた

時には介入しもつといい方へ導こうと人を斬ったこともあったかも
しれない

結果的には確かにいい方法に進んだかもしれない
みんな平和が来たと歓喜の美酒を飲んだかもしれない
英雄だと言われ崇められたこともあったかもしれない

でも・・・

俺が介入したことにより決められた死人が多くなっていることにな
っているという結果

莫大な力を持つ者への宿命

そして俺はその世界で一度殺された

悪魔と呼ばれて

「はぁ・・・くそぉ！」

汗でベトベトとなった服を鬱陶しく感じながら身体を起こす

「はぁ、はぁ、はぁ」

この世界に来て約一年と少し最初はなかなか記憶に蓋を締められなかったが

少し前から快適に眠ることが出来た

けど・・・この頃はかなり頻繁に見るようになった

「俺は・・・くっ」

外を見ると雨

なんとも言えない感情が逆周りし気持ち悪い

「・・・・・・・・」

ネプテューヌ達は今日早速ラストেশョンの依頼を受けにいき元氣よく外に出て行った

一緒に行かないと誘われたが立て続けに依頼がきてそれなり疲れていたのが今日は超かるい依頼をやって休むといった

それでも中々引かなかったので頭を撫でながらまた今度な。という顔真つ赤になって絶対だよと去って行った。

大体女性に対してこれすると言うことを聞いてくれる。

すごく便利だなうん・・・他の二人にはうらやましいと言った表情をしていたが・・・

「行くか・・・」

漆黒のコートを羽織り『黒曜石』を背中に背負いゆっくりと立ち上がり宿屋を後にする

雨は好きだ

自分が人間だと思っ^ていても俺はもう泣くことが出来ない
なんでそうなったのかそれは己だけが知っているが俺は知らない
けどこの降る滴が顔に当たる時

――何かを失った可愛そうな人間に見えるだろう

今日の依頼はワンコと虚像。

封印の遺跡の下層部にいる野犬を倒す簡単な依頼
古風が感じられる一人ダンジョンの中を歩く

「コケエエエエー!!」

鶏のようなモンスターコカトリスが三匹

紅夜を囲み襲う

前方とコカトリスが一番先に襲いかかるが

「ーーーー消える」

恐ろしい眩きと共にコカトリスは宙を舞いバラバラとなった

「コケエエエツエエエエー!!!」

仲間がやられたことに怒り同時に左右から襲いかかるコカトリス
紅夜は黒曜日を二つの柄を持ち

- - - 魔幻双天

一番先にやられたコカトリスと同じ末路を辿った

「・・・・・・・・」

屍を跨ぎ先へ進む

その手にはモンスターの体液を垂らす双剣

黒曜日は二つ柄がある。

普通の剣がある持ち手の部分と

刃の中にある後方部分に

その両方を持ち半分に分けることで黒曜日は双剣としても使える

リーンボックスの鍛冶屋に無理言って造ってもらった特注品だ

・・・・もちろんそれなり金は張ったが

「・・・いた」

「グルルルルウウ」

だらしなく涎が滴り獲物を見つけたように唸るモンスター

ターゲットの野犬だ

昔の一部を見てしまった紅夜はかなり機嫌が悪い

黒曜日を抜きその剣先を野犬に突きつける

「すぐに終わらせてやる」

「オオオオオオオ！」

咆哮と共に飛びかかる野犬

獲物を切り裂く役割を持つ爪と

獲物を捉え食いちぎる牙をむき出し

紅夜に飛びかかった

――魔神剣・斬刀

「グルウウウ!？」

先ほど自分の目の前にいた紅夜はいつのまにか野犬の背後を取っていた

そのことが分かっていながら野犬は動けない

自分が見ている世界の違和感

右と左で見えているものにズレている

そしてそれを理解する時には血飛沫をまきちらし絶命した

「はぁ・・・」

隠居生活をしているとは言え自分は何をやっているんだろう思う

勿論人を助けるのが一番だが

逆に言えばそれしかない

人を助けはするが自分はこのモンスターを殺していただくだけしかない

達成感も感じないこの虚無感に大きいため息を付き帰ろうと足を進めようとしたとき

「・・・さすが噂に聞く『黒閃』ね」

凜とした声がダンジョンに響き渡った

「・・・はは、これは、大物に出会ったもんだ」

本当に驚いた

腰まで伸びた綺麗な銀髪

黒いレオタードのような服装

不敵に笑う凜とした貌

手には巨大なショートソード

間違いない・・・

「ラステイションの守護女神^{ハート}ブラックハート・・・様かよ」

初めて合うがプラティーン（変身後）とよく似た格好にそれに空気が普通じゃない

「ご名答よ。自己紹介の必要がなくちゃったわね。『黒閃』」

「・・・黒閃の名は勝手に名付けられた通り名だ。俺は零崎 紅夜、紅夜が名だ」

「そうなの？まあいいか。あなた女神より強いらしいじゃない？」

「・・・噂でそう言われた程度だ。別に俺自身そうは思っていない」

大陸を背負うほどの人だ。

それなりの決意や修羅場を潜ってきているだろう

自分にはそれほどの剛毅な精神はない

「まあいいわ。コウヤ確か昨日問題になっていたモンスターを討伐してくれたみたいじゃないラステイションを代表して感謝するわ」

「・・・それだけか？」

彼女から溢れる闘気

感謝の意思是伝わるがそれ以上に彼女の空気は明らかに強者に合えた喜びに似た感情を読ませる

「……女神に勝つほどと噂された男がラスティションに来たと聞いたから調子に乗った奴ならその天狗鼻を叩き割ってやろうと思っていたんだけど私のイメージとはすごく違うのね貴方は」

そんな噂、恐らくギルドの過激派が適当に流した情報だろうし……そもそも女神と戦ったことすらないんだが……

「女神としてはやはり面子が立たないか？」

「それもあるわね。だけど

——純粹にあなたと戦ってみたいと思う気持ちの方が勝っているわ」

「そつか……」

戦闘マニアと言っべきことでもないけど好戦的という言葉が合うのかな

……早く帰って寝たいんだけど拒否権はなさそうだしベール以外の女神にも興味がある

「あとの話は・・・これでいくか」

「へえゝ意外に気が合いそうね。私もそう思っていたところよ」

力任せにフードを脱ぐ

本気を出す

けど全力だせないのが今の俺だが・・

今の自分がどこまでいけるかは試したいと思う

「・・・・・・・・／／／」

「ん？どうしたんだ??」

俺がフードを取った瞬間ブラックハート様は顔真っ赤にした

「な、なんでも、無いわよ！行くわよ『黒しえん』！」

・・・・・・・・

・・・・

・・

・・

・

噛んだ。

ネプティーンのように間違えることなく
愛称を付けられることもなく

「~~~~~!!!!!!」

口に手を置きものすごく痛そうにする

なんだろうものすごい戦闘意識が削られる

「その・・・大丈夫か？」

「ひゃ、いひゃい」

痛いね。そんな思いつきり噛んだのか

近付き回復魔法を掛けてやる

すると痛みが引いてのか先ほどと同じ表情に戻るかと思ったが

顔面それはもう噴火三秒前くらい顔を真っ赤にした

「えっと、やるか？」

黒曜石を肩に乗せ問う

正直言えばさっきのでなんだか戦う気力が失せた

「や、やるわよ!。はやく構えない!!!」

なんだがグダグダな雰囲気になってしまったがやるつもりならしかたがない

「ああ、いいぜただしその頃、あんたは八つ裂きになっているだろ

うけどな」

お互い剣を構える先ほどまでのセリフに挑発乗ったのか再び闘気を溢れだすブラックハート様

それでいい、じゃないともものすごいやりにくい

因みこのセリフなんか昔刀を使わない剣法を使っている誰かが言っていたような気がしたので言ってみた

「くっ、なによそのかつこいいセリフ。私も決め台詞決めるのにずつと悩んでいるのに・・・ブツブツ」

あれ？

たしかに挑発には乗ったみたいだけど違う方面で怒ってない？

最後までグダグダな雰囲気なままブラックハートVS零崎 紅夜の戦いは始った

まさかの出会い（後書き）

ちよつとねぷ子達には休憩してもらって女神の中でも一、二位を争うブラックハートことノワールに登場しました！

勝敗の結果は！？

それは次回をお楽しみください

では、技の説明（フォースシールドのこと忘れていた（汗）スタート

フォースシールド：守護と癒し、両方の特性がある結界魔法

雑魚程度なら破ることは不可能。中は多く回復するヒール状態になる

魔幻双天：居合を同じ原理でその速さのまま双剣に変換させ二体以上の敵を切り裂く技

魔神剣・斬刀：一瞬で相手に近付き一刀両断に敵を切り裂くあいてが弱ければ即死率があがるが一体限定技で同じ実力者ほどのなら簡単に避けられるのであまり多用は出来ない

以上になります

対決ブラックハート！（前書き）

今が季節の代わりごろなのか風邪をひいた。しんどい

対決ブラックハート！

古いダンジョンの中で剣が重なる金属音がなんとも鳴り響く
柱はあつというまに解体され

天井は決るような斬痕

地面はいくつものクレーター

戦いは人知を超えた戦闘となっていた

「このお！」

「つつ！！」

――魔衝天滅

黒曜日を地面に突き刺し横一閃になぞる

込められた魔力はそれに沿った斬撃の壁となる

それにブラックハートは一步足を引かした瞬間、斬撃の壁を貫き刃
が投擲される

「！！！！」

だが並はずれた身体能力を持つブラックハートにとってそれを弾く
ことは出来る

ガキンッ！！

天へと突き刺さる黒曜日の片割れ

「――！！！」

はじいた瞬間を狙い神速の突きが迫る！

「掛かったわね！」

それを予測してたブラックハートの手には銃が握ら迷わず引き金を引く

バン！バン！！

火のバレットが発射され

紅夜に着弾しコートを燃やし追撃を恐れ後ろに下がる

「それも読めていたわよ！」

大きく跳躍し紅夜が下がった位置に大きく振り下ろすブラックハートの一撃

紅夜はすぐさま黒曜日を地面に刺しその表面を蹴り無理な体勢から前へ飛ぶ！

「ふう、危ない・・・」

無事に地面に着地し

額に流れる汗を袖で拭く

戦って分かったんだがブラックハートもプラティーンと同じパワー系一撃一撃が凄まじく強い

もらえば一気に体力を持っていられる

それだけでも驚異的なのに銃や体術も上手い

「強いじゃない。私とこれだけ戦えるのは人材は中々いないわよ・
・でも今のあなたは丸腰ね」

ブラックハートの言うとおり今の紅夜には武器はない黒曜日の片割
れは天井にもう一つはブラックハートの近くに突き刺さっていた
あと実は紅夜、銃など遠距離の相手に対抗する武器は持ってなかつ
たりする

かなり無謀と思われがちだが紅夜それでも戦えるそれには理由があ
る。

「・・・さすが守護女神^{ハート}今まで戦ってきた中でトップに強いよ」

「ありがとう。でもそんなこと言っていていいの？」

「・・・正直、溜まらないな。武器を弾かれたのは初めてかもしれ
ない」

深くため息を付く

言ったことは本当だこの世界ではだが

実は紅夜かなり負けず嫌い（・・・・・・）だったりする

「念には念をだな・・・『来い』」

言霊を発言する

そしてそれに反応する黒曜曰

「なっ!?!」

ブラックハートは驚愕の表情を見せた

紅夜の黒曜日はまるで意思を持ったように地面から抜かれ持ち主の元へひとりでに戻ってきたのだ

「魔法の一種でな。まあ、こんな応用もあるんだ」

双剣を大剣に戻し再び構える紅夜

たとえ銃が使えなくても紅夜には魔法があった

いままで危ない時は決まってこれを使いピンチを乗り越えてきた

「なるほど、いくら弾いても持ち主のところに戻る武器なんて便利ね。でも――叩き壊したら問題ないわね」

「結構怖いこというんだなブラックハート様って」

冷や汗かきながらこの武器、結構高かったんだがなあ呟く紅夜

「次で最後にするわコウヤも全力で向かい打ちなさい」

「……………」

確かに彼女は強い

アレ（・・・）を使わないと勝率は半分あるかどうかだ

でも、使っているのか？これは相手が殺している奴だからこそ使える技だぞ

「…………あなた自分に枷リミッター掛けているんでしょ？」

「……………」

ブラックハートの問いに紅夜は瞳を大きく開いた

「なんかあなたと戦っているとむしゃくやするのよね。本気は出しているけど全力じゃない感じが」

「・・・・・・・・・・」

「あなた・・・私を舐めているの？」

「そんなこと・・・・・・・・ない」

ブラックハートの質問は紅夜の確信を全て打ちぬいたもので当紅夜は顔を下げ震えた声で拒否をすることしかできなかった

「・・・・・・・・まあいいわ。少し期待外れだったけどーこれでする」

力がブラックハートを中心に渦巻く

間違いない来る彼女の最大の一撃

自分はどうする今自分に出せる最大の一撃は絶対に彼女の敵にならない

ザザザザ・・・

意思の強さも

純粋な力も

全て彼女が勝っている

ザザザザ・・・

俺は負けるのか？

「————！！！」

黒い閃光となつてくるブラックハート

大気を切り裂きそれはまさに流星の如く

紅夜を自分の範囲に収め両手を使った最大な攻撃は

————偽神化

「えっ？」

そんな言葉しか言えなかった。許されなかった

気付けば自分は宙を舞っていた

見えるのは天井

自分の身体は痛さを超え全身が麻痺しているかのように

ドサッ

重力にしたがいブラックハートは落ちた

なんとか動かせる顔を少し動かせば見えた

紅夜じゃない紅夜が

身体も顔も確かに紅夜だった
だがそれだけだった

横顔だけしか見えないがそれはまるで自分が変身しているように髪と瞳の色は変化していた

なにより違うのは紅夜の身体から溢れだす魔のオーラ陽炎のようにゆらりゆらりと禍々しくそれは揺れ

それはまるでこの世全ての悪の形が具現化したようにブラックハートは感じた

「・・・・・・・・」

紅夜じゃない紅夜が振りむく

そしてその全貌が露わになり

ブラックハートは思わず息をのんだ

その瞳には死と絶望しか映らなかった。それだけしか感じられなかった

なぜそんな悲しい目をするのか

自分が負けた悔しさより

その思いが勝りゆつくりと震える声で

「な・・・なん、で。そん・・・な顔・する・・・の？」

自分でも消えそうな言葉だったのは分かった

だがその問いは紅夜じゃない紅夜に届いていたらしく

『・・・・・・・・』

その答えを理解できないままブラックハートの意識は暗黙に沈んでいた

倒れたブラックハートを見つめる影

『……ツカチャッタナ』

複数の人語と片言が混ざり合った声で呟く
ギリギリだった

もう少し歯止めが利かなかつたら間違いなく
本能的に彼女を殺していた(……)

顔に手を当てゆっくり目を閉じる

『カイジヨ』

その言葉と共に魔のオーラは一気に拡散し
変化していた髪と瞳は元通りになった

「……あああ」

負けたくないそんな軽く重い気持ちで彼女を傷つけてしまった
後悔が尽きない
自分への怒りが湧き上がる

「……気持ちわる」

気を失った彼女を背負い

彼はダンジョンを後にした
冷たい雨にうたれながら

なんと自分は愚か者だろうと心に刻みながら

対決ブラックハート！（後書き）

一応紅夜の勝利

紅夜が切り札的なものを出しました

この力が後々物語に深く関係していきます

魔衝天滅：魔力を込め横一線に地面を斬りその波動による壁の斬撃。
主に相殺や防御用

偽神化：女神化のように髪と瞳の色が変化し驚異的な力を発揮する
形態。

なぜ紅夜がこのようなことが出来るのかは不明（後々解説を入れて
いく予定）

キャラクター設定（前書き）

学校での投稿、あんまりネタバレは……ないはず
妄想CV追加

キャラクター設定

零崎 紅夜

この小説の主人公

本人曰く異世界からの逃亡者

いつもは漆黒のコートで身体を全体を隠すようにして顔を見た人は指で数えるほどしかない

ひとたび脱げば1000人中1000人は振りむく超絶美少年

だがとにかく鈍感そしてヘタレ↑これ重要

しかし頼りになりいざという時は身体を張って助けてくれる

家事完璧、戦闘強し、性格問題無しの絵で描いたような超人

全てのステータスが異常に高くとても人間とは思えない

武器は『黒曜日』と呼ばれる大剣、半分に分けて双剣にでも出来る過去に蓋を閉じることで擬似的な記憶喪失になっていたはずなのが最近徐々に思い出してきている

考え事困ったときや現実逃避に走ろうとすると決まって上を見る（もはや癖）

女性を慰める時は決まって頭を撫でる（これも癖）

女神達と互角に闘える程の実力を持つが殺す気でやれば楽勝

モンスター討伐の依頼を受けず誰ともパーティーを組もうとしない孤高の人物（勿論ともだち少ない）

遠距離用の武器を持っていないある意味バカ

だが魔法を使うことでその点をカバーしている

ボールに付き合わされた結果、ゲームの腕は中々のもの

外形は18歳くらいだが実年齢はそうとう老いてる

それなりに背が高い。

妄想CV：梶裕貴

友達（前書き）

この更新をもってストックが無くなったので毎日更新はかなり難しい
+ 受験勉強も……あれ？もしかしてツンだ？

友達

「・・・あれ？」

目を開けると知らない天井あった

自分はいつのまにかベットに寝かされていた

「私・・・何やっていたんだっけ？」

記憶を掘り出してみる

いつものように雑務をこなし

いつものように人々に危害を加えるモンスター退治

そして出会ったずっと前からこの大陸でも噂されていた謎のモンスターハンター

女神さえも倒すとも言われた強者

漆黒のコートで全身を隠し

神速の速さと暴力とも言える力で封印されるほどのモンスターを一人で討伐する

最強と呼ばれたその者は『黒閃』と呼ばれた

「私は・・・」

以前から興味があった

自分は己を高めるために強い者を探していた

とは言っても自分にも立場がありこの大陸から出ることは中々出来なかった

「『黒閃』に戦いを挑んで」

彼に逢えて嬉しかった自分と同じ者を見ているかもしれない彼なら自分を出しきって大丈夫だと思ったからだ
勿論口先だけの者なら問答無用に叩き潰すつもりでいたが

彼の戦いはなにかが欠けていた
彼本来の力じゃなくてまるで何かで固めた分厚い枷のようだった

「・・・負けたんだ」

今更ながら悔しさが込み上げてくる

シーツを握りしめ溢れそうな涙を我慢する

陰ながらずっと努力してきた

やっとそれを発揮できる人物に

自分は真正面から打ち破られた全力を出させることなく（……………
……………）

自分は弱いんだろうかずっと神界でライバルと決めていた女神にな
んど戦いを挑んで負けたのか
ずっと彼女を超えたいと願って誰にも見えないところでずっと努力
してきたこと

その全てが無駄だと押しつけられたようで彼女ブラックハート改め
ノワールはついに涙を流した

「ううう・・・」

呂律を零し

一粒一粒、シーツを汚していった

すると突然、自分は抱きしめられた

「えっ・・・」

とっさのことで全く反応できなく上から服を着ていても肌で感じる
ガツシリ鍛えられた堅い胸に顔が付く

「・・・なんで泣いているのか。俺には分からない
けど泣くときは思いつきり泣け。全部流してしまえばまた笑えるか
ら・・・」

そして全てを包む優しく温かい手が彼女の頭を撫でたとき
彼女の涙腺は崩壊した

「（やちゃったな）」

自分の胸には全てを流すような泣く
ブラックハート様

もう変身は解けて彼女に髪は黒曜石のような綺麗な黒色になり
服装もどこかのお嬢様を思わせる服へと変わっていた

彼女を泣かしたのは間違いなく自分だろう

だから泣いてほしくないのその一心で彼女を抱きしめ
自分でも言つて恥ずかしい言葉を口にした

「（まあ、結果オーライ・・・かな）」

彼女はベールと同じ大陸を統べる守護女神^{ハート}だ

きっと他人に相談できないようなことで悩んだり苦しんだりしたんだろう

「（防音結界張つてと・・・よし）」

彼女に意識を回しながら鳴き声が他の人に聴こえないようにする
迷惑掛かるといけないし。今俺の中で泣いているのはブラックハート様じゃなくてどこにでいそうな一人の少女なんだから

「（今日は悪い天気だな）」

霧雨が振る外を見上げながら

服にしがみつく泣く彼女の頭を優しく撫でながら

彼、零崎 紅夜は無慈悲にすぎる時を感じながらゆっくり瞳を閉じた

「こんなに泣いたのは初めてよ・・・」

「ははは、気がすんだらならよかった」

まだ涙痕が少し顔を真っ赤にするブラックハート様
その瞳は何かにつけて切れた様子だった

「最初にお礼は言っとくわ・・・ありがとう」

「どういたしましてブラックハート様」

面と向かってお礼をするのが恥ずかしいのか頬を紅潮させるブラックハート様

本心から言わせるととても可愛い

「ホント今思い出したらあなた全力を出さなかったわね」

先ほど一転鋭いまなざしが紅夜を刺す。
それに紅夜は冷汗をかきながら答える

「あのときは言うタイミングが無かったが俺実を言うとモンスター以外と戦ったことないんだよ」

いままで自分に出来ることはモンスター討伐しか出来ない
自分の実力は初めからあったし誰かと模擬戦など今の紅夜は経験が
ない

「・・・えっ？それじゃ、私と戦ったのがある意味初めてだったの
？」

意外な言葉にブラックハート様は哑然とした
確かに黒閃の噂の中に『黒閃はモンスター討伐しかない』と聞いた
こともある

「今までずっと殺す戦い（・・・・）をしてきたから倒す戦い（・・
・）になるとどうしても・・・ね」

手を合わし謝罪の意を込める紅夜に対してブラックハート様大きく
息を吐いた

「まあ、私も聞かなかったのはいけなかったし・・・だからコウヤ
は全力を出さなかったのね」

「そういうことです。ブラックハート様」

なんどもブラックハート様と呼ばれ少しブラックハートは眉を歪ま
した

「私の名前、ノワールだから」

「・・・・はっ？」

いきなりそう言われても適応できる紅夜ではない

さらに言えば紅夜は戦闘面ならともかく女心にはとにかく鈍い

「だから私の名前はノワールよ！」

「えつと、さすがに女神さまを名前で呼ぶには・・・」

「呼びなさい！」

え〜、と紅夜は思った

さつきまで背負いがちの彼女を癒しやつと泣きやんだかと思えばこれか本当に女という生き物は分からないなあと内心呟きとりあえず彼女の名前を言うことにした

「ノ、ノワール？」

「そ、そうよ／＼／」

あんだけ叫んでいたのにこんどは顔を赤くして縮んでいくノワール
紅夜の心はクエスチョンマークでいっぱいになっていた

「身体どこか痛くないか？一応回復魔法掛けたんだが」

「えつ、大丈夫よ。どこも痛くないわ」

「そっか、よかった」

安心のため息を付き
ゆっくり紅夜は微笑んだ

「／＼／＼／／／」

またノワールの顔は真っ赤になる彼女は赤面症なのかと思ってしまう
因み今の紅夜いつものコートは着ていない理由はノワールは放った
火のバレットによりとところどころ焼けてしまい今は修理をお願いし
ている

服の換えはあるもののさすがにコートの予備は持ってきてない

・
・
・
・

・
・
・

・
・
・

・
・

・

沈黙が二人を包む

紅夜は話のネタが尽きてしまい

ノワールは仕事上ここまで同世代の男と接したことがなくなにを言
えばいいか分からない

「「あの・・・」」

紅夜はとりあえずなにか話そうと口を開き

ノワールも紅夜と同じい理由で口を開き

「「どうぞ・・・」」

女々しく初々しいカップルのようなやりとりをする二人

・・・・・・・・・・

またしても沈黙が走る

これはもう無限ループだろとなんと他人から見たらイライラする
光景だった

キュッ

その沈黙を打ち破る可愛い音
その発音原はノワールだった

「!!!!」

「・・・クク、腹減ったか？」

おなかに手を当て俯くノワールに対し堪えながら笑い声を漏らす紅夜

「そっ、そんなこと・・・」

「自分に正直になれよ。どうせのことながら言っけど・・・友達い
ないだろ？」

ノワールが言い終わる前に追撃をする紅夜

「あ、あんたには関係ないことでしょ／＼」

「関係あるさ。俺はお前のこと友達だと思っているからな」

「え？」

紅夜の言葉に面白いほど目を丸くするノワール

「昔、俺の友達が言ってた気がするんだ

「――名前を交換することだけで絆は生まれるってな」

それを誰が言っていたのかは知らうとしないけど

この言葉をそいつが優しく語ったことだけは自分の耳に深く刻まれていた

「・・・いいの？」

「――私人間じゃないのよ」

それは精いっぱい反抗だった

今ならまだ戻れる。撤回できる

ホントは嬉しいけど自分は・・・

「はあ、友達になるには人間通しじゃないルールがあるのか？」

ベツトに腰を掛けていたが紅夜はゆっくり立ち上がりノワールに手を差し出した

「……そうね。さっきの言ったことは忘れて」

紅夜に言われた言葉がノワールを目覚めさせた
差し出された手を取り静かにベットから舞い降りた
それはまるで天使が降臨したように

「さっ、行きましょう。コウヤ」

いままでにはない彼女の美を証明させるような笑顔を見せる

「……………」

「えっ、コウヤ？」

彼女の笑顔に魅せられたように紅夜はノワールの顔を見つめふと笑った

「やっぱりノワールには笑顔が合うな。綺麗で可愛いぞ」

純粹に思ったことを紅夜は真正面から言う

「……………／／／」

この男は女心に対しては鈍いのに
なぜこうも女心を揺るがすことは上手いのか謎だった

―――気が付けば空は晴れていた

友達（後書き）

次は色々したいな
でもストーリーが中々進まない（汗）

デートにはトラブルは付き物（前書き）

遂にクリア！

・・・けどノーマルで統一するという夢は儚く散った・・・ゴッ

デートにはトラブルは付き物

午後1時

昼食には一足遅れの時間どきに街中を歩く二人の美少女男女のペアが歩いた

一人は艶やか黒の髪にツインテールをした美少女ノワール
一人は首まで伸びた綺麗な銀髪に世にも珍しいオッドアイの美少年コウヤ

だれが見ても思わず振り替えてしまう容姿をした二人は手を握り男からは嫉妬の眼光を
女からは羨ましい視線をお互いに受けなんと落ちつけない立場であつた

「・・・なあ、どこか近くレストランの場所知らない？」

「貴方、そんなこと・・・そうだったわね貴方リーンボックス出身だったわね」

元気よく外に出たのはいいが実は紅夜、あんまりラステーションが好みではないため街中を歩きまわることが少ない
なのでもちろん地理がない。

「えっと、ここなら・・・こっちょ。ついてきて」

ノワールに引つ張られコウヤも足を進める。男としたらなんとも情けないと思う紅夜だった

「いらっしゃいませ〜何名様ですか？」

星が出てきそうな営業顔を案内され紅夜達は涼しい室内へ入って行った

「二人よ」

いつもの凜とした表情で返すノワール

「分かりました。ではどうぞこちらへ・・・」

二人が案内された席は四人まで座れ丁度外の風景が見れる見通しいがよいところだった

「ノワールの好きな物を頼みな。今日は俺の奢りだ」

「いいわよ。コウやってモンスター狩りが本業なんですよ？おかねが必要な時っていっぱいあるでしょ？」

確かにアイテムもただじゃないし紅夜は大陸中を廻るので勿論、宿泊代もいっぱいいる

「その点は大丈夫だ。昨日たっぷり貰ったからな」

ポケットに収めている

昨日より重くなった財布を上からポンポン叩く。紅夜はかなり危ない任務をこなしているのだから必然的に多額の報酬金をもらっているこ

となり

紅夜自身もあまり娯楽用にお金を使うことが少ないので貯金が貯まる一方なのだ

「それに俺も友達少ないしなたまにはこうやって遊んでも罰は下らないだろう」

「コウヤが友達少ないのは以外ね」

「・・・・このまえ知り合いがいう限りは怪しい度ナンバーワンに輝いちゃったらしいからな・・・」

「・・・・・・ドンマイ」

確かにあんな黒色統一に合ったら私も怪しいと思うと考えるノワールだった

「なんでいつも顔見せないの？・・・カッコいいのに」

「まあ、色々。ところでカッコいいのか？俺」

「自覚なかったの！？」

顔見せない謎よりそっちに驚愕した

「まあ、顔より中身が大切だと思うぞ。どっかの本で見た気がするけど外形だけの付き合いは長続きしないって」

「確かにそうかもしれないけどそれを貴方が言う！？」

「????」

もはや呆れの領域まで達したノワールは深くため息をしメニューに目を通す。・・・おいしそうなばかりだったがその分カロリーがものすごく高そうだった

「おれはこれとこれにしようかな」

ノワールが悩んでいるのをしり目にいかにもカロリーが高そうな料理を頼んでいつている紅夜

「・・・・・・・・」

「あつ、やつぱ。色々悩むか？」

「・・・・・・・・なんで分かるの？」

まるで自分が悩んでいるものが分かっているように紅夜は目を通していたメニューを閉じて

「そういう知識があるからな。まあ、動いた分だけ動けばいいんだろっ？」

知り合いは食べても食べても太らない体質だし

「・・・・・・・・・・・・・・・・そんな単純なものじゃないのよ」

「そうなのか?・・・難しいんだな」

妙に鋭い所があるがやはり知識があるがだけで女心がつかめていない

ノワールは決まったみたいな顔すればまた難しい顔したり全然決まりそうにない

「（めんどくさいものなんだな・・・）」

ステンドガラスの間に挟んだ外の風景を見る
様々な人が忙しく流れそれは川が流れるように

『—————？』

「ん？」

珍しい姿をした人を見た
それは自分と逆の格好をしていた

今の自分はある漆黒コートを着てないが
そいつは漆黒とは逆の純白のコートを着ていた

「（・・・なんでだろう）」

なぜか自分はその人物から目を離せなかった
飾り気のないただ真っ白
描く前のキャンパスのような白さ

『――――？』

その人物はただ一人立っていた
ただ呆然と忙しく通り過ぎていく人々さえもそいつに目が入ってな
いように進む

その視線はまっすぐ狂わずただ紅夜に向いていた

『――――？』

また口元が動いた

まるでそいつは別の次元にいるようで
なぜかそいつのフードで隠しているはずなのに
その口元が軌跡を描きその言葉を理解できた

『ア
ン
ビ
ン
ノ
ヨ
オ
イ
ハ
デ』

『キ
『タ
『?
『

「つーー！」

全身に寒気が走った

例えるとしたらそれは狂気

狂い、狂喜、壊れた言霊

「・・・ねえ？コウヤ？」

彼女もなにか異常を感じたのか落ち着きがないように辺りを見渡す

「『来い。黒曜日』・・・ノワール、敵だ」

愛剣に刻ましている魔法を発動させ最大出力で呼ぶ

「モンスターなの？。でも・・・ここは街の中よ？」

それなりの技術を有するラストイションは街にモンスターが侵入した場合、絶対に警報がなるシステムがある。

それはありえない（・・・・・・・・・・）

「・・・・・・・・」

[
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ! : ! : ! : ! : ! : ! :]

耳がはち切れるほど咆哮

その外形は真紅の鱗に全長10mはある巨大なモンスター

手には先ほど奇襲を掛けてきた円状の槍、もう片方には丸く分厚い装甲をした盾

「ドラゴン……この種はみたことないな」

紅夜は呟いた

いままでしてきた依頼の中でそれなりにドラゴンとは戦ったがこの武器を持ったドラゴンは初めてだった

「そんなことは関係ないわ。ただ……叩き潰す！」

その手に握ったショートソードで構える

彼女の大地を穢すことそれは彼女の逆鱗に触れることと同じこと

「……そうだな。モンスター相手なら本気で全力で戦える……」

内心燃え上がる怒りを沈黙化させ地面から大剣を抜き剣先をドラゴンに向ける

[.....] ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

二つの銀髪を揺らしながら開始の合図と言わん限りの咆哮と共に謎のドラゴンVS紅夜&ブラックハートの戦いが始まった

「ひいひい」

そこは地獄だった

怯え腰を抜かし動けぬ者

震える足を懸命に動かし生を得ようとするもの
見失った大切な者を探し彷徨う者

――風皇絶空

「撃ち貫け！」

それらを弾き飛ばすような真空の衝撃破と巨大な炎弾がドラゴンが迫る

だが、その厚く硬い盾の前にはそれらは無と還してしまう

「逃げろ！」

紅夜の裂帛の声に身体の縛りが解かれたように散り散りに逃げていく

「■■■■■■■■■■！！！！」

それを逃がしはしないといわん限りの燃え盛る火炎を吐く

「・・・」

「・・・ノワール」

変身を解除しいつもの綺麗な黒髪を靡かせた
その目前には破壊された彼女の街

「私って弱いのかな・・・」

協会の人間が必死で怪我人を担架に乗せ次々運ばれている
惨劇、正にそれだった

「ごめん。俺がもう少し気付いていれば・・・」

拳が血から滴る。

もう少し早く気付いていればこんな事態を少しでも軽くできたかもしれないと

「うっんコウヤは悪くない・・・私ひとりならドラゴンの奇襲に気付かずやられていたかもしれないから・・・」

長い髪により顔を確認することは出来ないがきつと彼女は・・・

『紅夜だけならもつと被害は少なくなっていたかもしれないね』

「「!?!」」

それは突然のことだった忙しく動き呻き声する怪我人が消えたのだ
全ての風景は灰色に染まりまるで自分たちが世界から切り離された
感じだった

「だれ!?!」

辺りを見渡す

壊された建物だけが目に入り人の姿など確認ができない

『こっち、こっち』

摩訶不思議な声のする方へ向くそこにはドラゴンが出現する前に目撃した純白のコートを着ただれか（・・・）が瓦礫の死角からゆっくり姿を露わにした

『この程度、見つけれない程度まで堕ちたの紅夜？』

まるで落胆するようにため息を付きだれかは見えぬフードからこちらを見る

「知り合い？」

「・・・言つたろ。俺は友達少ない。あんな変人なんか見たことすらない」

自分で言つて悲しくなるが自分と似た服装するやつなんて初めて見た

『まあ、いいや。ごめんねデート（・・・）の邪魔しちゃって』

「デ、デ、デート！？。そんなことじゃないわよ！・・・私たちそんな関係じゃないし。でも、コウヤがいいなら私は・・・キヤー！」

横でなにやら叫び始めるノワールをスルーし純白コートのだれかをみる

『じゃあね紅夜。今度会う時はもっと自分を取り戻してね（・・・）
・・・』

「！？」

親しい友人を見つめるような眼差し
そのだれかは虚空に手を差し出すと空間が闇に包まれ扉のような形
なる

「おい！おまえは・・・」

『本名は今伏せるよ。でもこれだけは名乗っておこうかな

――僕の名前は『ゼロハート』』

その言葉を残しゼロハートと名乗っただれかは消えた

ぐらっ

「えっ？」

「！？」

世界が歪むまるで元々あった形に再構築されるようにそのいきなりの現象により抵抗も出来ず俺たちの目は真っ黒になった

「・・・なにが・・・あつたんだ？」

太陽の日差しに目を開ける

そこには先ほど自分が決めたメニューのページが開かれていた

自分たちが座っているのは少しおしゃれな椅子

そしてテーブルクロスが掛けられたテーブル

それは確かに自分たちの前で壊されたものだった（・・・・・・・・・・・・・）

「外は!？」

ステンドグラス越しに外の光景は見る

そこにはあのドラゴンが襲いかかるまえの日常だった

「コウヤ？あれ・・・私・・・？」

「・・・ノワール。覚えているか（・・・・・・・・・・・・・）？」

「覚えているってなに・・・」

ノワールの言葉が途中から止まった外の平凡な光景だがこの光景は

さきほど確かに自分たちの目の前で壊されたはずだった！

「もう一度聞くぞ覚えているか？」

「覚えているけどあれ？私が見たのは白昼夢？」

「さあな・・・でも二人揃って同じ内容の白昼夢だなんて・・・ありえるか？」

「・・・ないわね」

だとするとあの純白コートの仕業か？

時間操作をした？だとしたらいつたいなんのためにそもそもあれほど巨大なモンスターなんてどこからやってきたんだ？

「一体なんだったの・・・」

「分からん」

情報が少なすぎる。

一体なにが起こったのか今俺たちが見ているのが現実かそれとも夢なのか

「・・・なに自分の頬抓っているの？」

「ふうねにやらひやみしえめしやにやるかにや、ちよ」

通訳：『夢なら痛みで目が覚めるかな、と』

「通訳がないと一文字も理解できなかったわ・・・」

「痛みがするから現実だな」

抓った頬が痛むが感じる痛みは本物だ

「・・・コウやって以外に可愛いところもあるんだ」

「なにか言った？」

「う、ううんなにも／＼／」

なぜ顔を紅潮させるのか紅夜は意味不明だったがそのあと違和感を感じながら食事をし街にで遊び気付けばもう夕陽は落ちかけていた

「綺麗だな・・・」

「そうね・・・」

二人でとくに理由もなしに展望台で佇み沈む太陽を眺める

「・・・（これって、やっぱりデート？よね。う、うんこうみるとやつぱりコウやってかつこいい／＼。性格も優しいし強いし・・・）」

「・・・（夕陽をこんなにゆっくり見るのは久しぶりだな・・・この頃モンスターが異常に出てくるし忙しくなるのかなあ）」

二人全く違う考え方をしながら沈黙が走る
傍から見ればそれは何か大切なことを告白する前のカップルにも見え
えた

「ね、ねえ」

「ん？」

どこか落ちつきなくもじもじしながらノワールは紅夜によりそり重
たくなつた口を遂に動かした

「私のこと・・・その・・・どうおもっている？」

期待しているわけではないただ今日という不可解な現象を通して自
分はどんな風に思われたのかそれが知りたくなつた

「ノワールは友達だ。今日ずっと一緒にいたけど不器用なところも
あるけど誰よりもラステイションの事を気にかけて真摯に自分のす
るべきことを成し遂げようとする俺の・・・大切な友達だ」

まるで告白のように言う紅夜

ノワールは嬉しい気持ちと恥ずかしい気持ちで顔を真っ赤にし
けど、少しだけ寂しい気持ちを抱き

「・・・紅夜」

「ん？」

チュ・・・

ノワールに呼ばれ振り向こうとしたときに感じた頬に生温かくそして柔らかい感触

「これは・・・そう！今日のお礼よ！！それじゃまたね！」

疾風の如く逃走するノワール

紅夜はしばらく自分がなにをされたのか理解するためにそこで止まっていた

沈みかけた夕陽はそんな初々しい二人を見守るように静かに煌いていた

デートにはトラブルは付き物（後書き）

新キャラ登場！『ゼロハート』紅夜の知り合いらしいが後は謎だらけ！ラストエディション編はいつになったら終わるのかな・・・MK？いつになったら買えるのかな・・・

風皇絶空：大きく振りまわし鋭い真空破で敵を切り裂く技

水牙爆竜：魔力を水に変換させ竜を模り襲わせる技

魔殺双刃・極碎：莫大な魔力を双剣に集中させ一気に切り裂くパワー技

剛爆烈破：莫大な魔力を圧縮し硬度を高め一気に振りぬくこれもパワー技。こちらの方が威力はあるが避けられやすい

暴風襲嵐：魔力と剣圧による竜巻を生み出す技

アブソリュート・エクリプス：徐々に相手の身体を凍らしていき最終的には氷像とかす強力な魔法

偽りを名乗る神（前書き）

今日はレベルアップのため偽パープルハートを潰しまくっています
いい経験値してますね^^（今回はかなりの駄文が予想されますご
注意を）

偽りを名乗る神

あれから数日がたった

たまにネプテューヌ達がやってきては人助けの名目として強いモンスター討伐に付き合ったりそれなりに忠実した毎日を過ごしていたが、街で囁かれるラステイションー大きい会社アヴニールといったか他の工場の仕事を横取りしてすさまじい勢いで大きくなっていき他の企業は不景気になるばかりだとか

ネプテューヌ達曰く総合技術博覧会でアヴニールの不正を暴かせるとか協力したいがこつちも次々仕事が舞い込んで自由に動けなくなっていた。とはいえひそかに証拠集めやら協会側の人間と接触しているが・・

――魔神剣・斬刀

「ふう・・・これで終わりっ」と

一刀両断され崩れるモンスターの残骸を確認し黒曜日にこびり付いたモンスターの体液を振り落とす

「次の依頼は・・・」

今の時刻は大体朝の9時くらい早朝3時くらいから起床しずっとこの調子だ

眠気を抑えながら今日のスケジュールを確認

「うわぁ・・・」

今日もハードスケジュールだった

今日だけで恐らくあと100体以上のモンスターを狩らなければいけない

さらに転々とダンジョンを回らなければならないといけないという条件付き

「今日は何時に帰れるのか・・・？」

確か昨日は11時過ぎだった気がする。だがもう少しでリーンボックスがラストেশョンに急接近する日だこれを逃せば本当にベールが怖い

「愚痴ってもしかたないか・・・」

黒曜日を背中の鞘に収め紅夜は駆けだした

「生死は問わない？」

「ええ、我が社が開発している電子基板のプリント配線にモンスターの神経組織は必要なので神経組織を取り出したモンスターは死んでしまうので生死は問いません」

ある廃墟とかした工場の前で紅夜とアヴニールの社員が依頼の内容を話していた

「分かった。任せろ」

あまり機械のくわしく知らない紅夜は男性の言葉を信じ工場に入ろうとした

「あ、あの、」

「ん？」

どこかおどおどし額にはどっぴりに汗を掻く男性
紅夜はその態度に少し疑問を抱いた

「お気を付けて」

「ああ、ところでこの工場にはモンスターが本当に住み着いているのか？」

廃墟とかした工場を見渡し問う

・・・モンスターが住み着いていると聞いたが静かすぎる

「そ、そうです社長からの直接の依頼ですし・・・間違いないと思います」

怪しいと思ったがこれ以上言っても無駄だと思い紅夜は工場の中へ入った

「あ、そついえb・・・」

言い残したことがありふり向いた瞬間
その男性の手にはなんらかのスイッチのようなものが

ドゴオオオオン！！！！

爆音が響き渡る

落ちて来る凶器とかした機材

紅夜はすぐさま後ろに下がり直撃を免れるが

「ちい・・・」

迫りくる爆風に対処できず呑みこまれた

――自爆システム起動。従業員は速やかに退去してください残り
900秒――

「ねぶっ！？どういうこと！？」

静かな工場のなかで驚愕の声が響いた

「本当に爆発する気なのね・・・」

「やっぱり、私たち・・・助からないんですか？」

彼女たちネプティーン、アイエフ、コンパはガナッシュという男の策略にはまりこの工場に閉じ込められていた。

「大丈夫だよ！自爆する前に脱出してしまえばオールクリアだよ！」

そんな絶望感の中でもネプティーンは明るく迫りくる『何か』にも恐れず工場の中へ進もうとした

ドゴオオオオン！！！！

「爆発！？だれかいるの！」

「アヴニールの関係者・・・じゃないわね」

三人は走り始めた

いくつも爆音を聞きながら（・・・・・・・・・・）

ネプティーン達を妨害するように何体のロボットが襲いかかってきたがネプティーンはそれらを次々蹴散らしながら先へ進む

「ここは爆発されている完全に閉じ込めるつもりね」

目の前に広がるのは恐らく出口だったであろう残骸

「・・・・・・・・」

「ん？どうしたのコンパちゃ・・」

冷静に状況を判断するアイエフをしり目にコンパはある一点を見つめ動けなくなっていた

ネプテューヌもそれに気付きコンパと同じ方向を見る・・・そこには壁に寄り添った黒いコート

「こう・・・ちゃん？・・・こうちゃん！！」

間違いない。

焼け飛び露出する皮膚は惨く焼け爛れた
資材の破片は小さいながら飛び運悪くところどころに突き刺さり血溜りをつくり

フードは爆風により一部吹き飛んでいたので顔は確認ができた
それが自分が心を寄せる人、零崎 紅夜と分かった

「こうちゃん！！大丈夫！？こうちゃん！！！！」

すぐに駆けつける肩を揺らす反応がない

「コンパ！治療をお願い！！」

すぐに状況を掴んだアイエフはパーティの中で治療術が長けているコンパを呼ぶ。

あまりのことにフリーズしていたコンパはアイエフの叫びに再起動しすぐに治療にかかる

「・・・あっ・・・？」

アイテムスキルによる治療ですぐに紅夜の瞳がゆっくり空いた

「・・・お前、達・・・なん、でこい。に？」

「こうさん！大丈夫ですか！？」

「コン、パが・・・治療して、くれたのか？」

「コウヤ喋らないでネプティー又肩持つて一緒に脱出するわよ」

「アイアイサー！」

アイエフの指示によりネプティー又は紅夜の肩をすぐに持とうとするが紅夜はそれを振るえる手ではじいた

「・・・俺の、事はいい・・・！早く、行け！！」

「なっ、何言つてんのよ！！そんな身体じゃ動けないでしょ！！ここはもう自爆するの！はやく行かないとみんなまとめて死んでしまうわよ！！」

拒否する紅夜を無理やり手ごとつかんで引っ張ろうとするがいくらなんでも紅夜の重さを動かすことは出来なかった

「みんな助からないと意味がないですよ！」

「そうだよ！ほら肩持つよ！！」

「無理、だ！全部の出口、非常口は爆発された！」

「『えっ・・・』」

紅夜の言葉にネプテューヌ達は停まった

「俺は、アヴニールの不正を暴こうとして、裏で考察していた！。・ばれたがな。さつき所々に、爆発音が、聞こえた・・・！。やっかいな、俺を確実に、葬る気だ・・・！」

なぜ彼女たちが巻き込まれたのが謎だが
これは言える俺は罠にはめられたことだ！！

「そんな・・・打つ手なしなの？」

「ここで終わり・・・なのですか？」

絶望に染まるアイエフとコンパ
身体中を走る激痛を抑えようと口をきつく噛む

「・・・だめだよ！」

そんな中でネプテューヌが吠えた

「生きることを諦めたらその時点で死んじゃうよ！きっと道はあるよ！」

「『！！！』」

彼女の言葉に紅夜達は心を打たれた

「（・・・そうだな。生きることから逃げたら死んだと同じか

なんて

なんて

人間らしい答えだな・・・！！！！」

「！コウヤ！？」

「こうさんまだ動いちゃだめですよ！！」

震える手で

痙攣する足で

紅夜は足掻いた

はつきり言って自分ひとりで死ぬことはいいい自分は不生不死の存在
生きることも死ぬこともできない零者^{ゼロ}だが
まだ彼女たちには希望がある未来がある

——綺麗な花を咲かせるためには雑草を抜きとることがいいんだよ？

ああ、ならいまこそその雑草を狩り取ってやる……！

「『シン・クレアトル偽神化』……！」

命じた

世界に『神』として

力（絶望）を寄こせと

その全てを背負い

人間から超越した姿に紅夜は変革する

「こう……ちゃん？」

その姿にネプティー又達はただ見ることしかできなかった

綺麗な銀髪は黒く漆黒の空を想像させる暗黒に染まり

蒼と紅のオッドアイは闇を連想するさせるほどの濃い紫色に染まり

吸収された負の念は禍々しいオーラは鎧のように蠢き

ここに偽りながら『神』をも凌ぐ絶対的力を携えた

紅夜ではない紅夜が誕生した

「コウヤ……なの？」

その問いに紅夜ではない紅夜は静かに頷き

いくつもの資材が重なりあい強固となった壁の方向に身体を向かせ

『突破口を開く・離れてろ』

子供とも男とも女とも老人ともモンスターとも聴こえるその声は全てを自分の心臓を握りつぶすほどの不快感を与えた

「あつ・・・」

『治療ありがとなコンパ』

そんな姿で紅夜ではない紅夜は優しくコンパの頭を撫でた
こんな状況でも一瞬だけコンパの瞳にはいつものように頼りになり
異性として意識して大好きな零崎 紅夜が見えた

――残り100秒です――

いまからこのガラクタを破壊し離れるだけでは多分自分と同じように彼女達はまた爆風に巻き込まれるであろう

だが関係ない自分が破壊する対象はこの工場の存在そのもの・・・
・）だ！

バサッ・・・

黒曜日から生える四対の黒翼

傲慢、怠惰、憤怒、虚飾の念を込めた紅夜の剣術のなかで奥義とも呼べる技

「――消える！」

――魔神剣・殲光翼

その瞬間ゲームギョウ界の空の一部は黒く染まった

偽りを名乗る神（後書き）

今回はどうなのかな」と内心思っている燐です。いつきに飛びました。（ねぶねぶ達といちゃいちゃさせたい）

もうすぐでラストエディション編は終わるのかな？早く黒化ベール出したい（泣）

魔神剣・殲光翼：紅夜の奥義の一つ。負の感情の一部を世界から集め集約した恐ろしき一撃、対象を選ぶことができその対象は無条件で消滅させる逆にその対象になってなく攻撃範囲に入っている物体または人物は無害という便利な点もある

シン・クレアトル

偽神化：世界の負の念を身体に取り込み一時的超人的な力を得るだがその取り込んだ負の念を抑えられなければ暴走する危険性がある諸刃の剣ある程度の手順をしなければさらに暴走する可能性がありブラックハート戦はいきなり使ったため不安定な偽神化になっていた恐らく完全にコントロールできた偽神化が可能になれば紅夜はほぼ敵なしとなる

ラストেশヨンの危機（前書き）

よしMk?を^レ買えるだけのお金は集まった……が
時間がない！小説する時間があっても親の目^が……どうしよう出来
なくて買^っておこ^うかな………

ラストেশヨンの危機

そこにはなにもなかった

大地はなにかに削られたようになくなり

天空に大きな雲があつたが大穴を開けられていた

そしてその中心に立つのは闇そのものを纏つた青年

この世の全ての負を一時的に司り背負うことで唯一無二の力を手に
入れることができるその青年だけに許された禁術

このゲームギョウ界の全ての負を見ることが出来る青年の目にはな
にが映るのだろうか・・・

『・・・終わつたぞ』

外形は恐ろしくてもその声は慈悲に溢れしゃがみこんでいる三人に
優しく語りかけた

「・・・あれ？工場は」

『消した』

「消したって・・・コウヤあんた何者なの・・・」

『さあな、そのことに関する記憶がない』

実際には思い出さないようにしているだけだがそのことは紅夜自身
もあまりよく分かつてない

「ねぶねぶと同じなんですか？」

『記憶消失・・・に近いが。俺の場合は記憶が一部欠けているだけで全部は忘れてない記憶障害っていうのかな』

「なんだ・・・仲間が増えたと思ったのに・・・」

明らかな普通に会話が成立しているのに紅夜ではない紅夜は眉を細めた

『俺が言うのはおかしいが・・・怖くないのか？』

禍々しく揺れる負のオーラ

複数の人語が混ざった不可解な声

恐怖を感じるほど暗黒色に染まった髪

闇を連想させるほど濃い紫色の瞳

その全てがあまりにも異体で異常、畏怖そのものと言っても過言ではない

「確かにちよつと怖いですけどこうさんはこうさんはですから」

少し前に頭を撫でられた温かさは間違いなく自分が知っている零崎紅夜で間違いはない

『はは、前に言ったな似たようなこと』

「あつ！覚えてるよそれ私に言ったときでしょ」

『そうだな。変身したときのあのネプティー又は綺麗だったな』

「えっ、そう思う！？ならこうちゃんのためにいつでも変身してあ

げるよ！」

『別に無理はしなくていいぞ。今のネプティーヌは逆に可愛いしな』

「はう・・・」

たとえ変わろうとやはり紅夜は紅夜だった

「「むうっ」」

『???』

こいつに乙女心を一粒でも理解できる時はくるのやら

――辞めてくれ！俺の工場を壊さないでくれ！！

『・・・』

頭に流れ込んでくる哀しみの負

紅夜は一点を見つけていた

『なるほどな・・・』

「えっ？どうしたのなにか閃いたの？」

一人呟く紅夜にネプティーヌが問う

『これは時間稼ぎだろう。いまあっちの方角の工場が壊されている・俺は知らないがお前たちは関係しているだろう』

「あっちの方角・・・って！」

「確かシアンさんの工場のですう！」

『俺がいたから生き残ること前提に企ていたわけか』

悔しさが紅夜の心の中で渦巻き

見ぬこれを企てであろうアヴニールの代表アンジュに憎悪を抱いた

「それなら急がないと！」

一刻の猶予もない急いで行かないとお世話になった人が傷ついてしまふネプティー又達は走ろうとした

『さて』

「なに！？急がないといけないのに」

『走るより飛んで（・・・）行った方が速い』

「ということですか？」

ネプティー又達に疑問は生まれるが紅夜は気にせず口を開いた

『百聞は一見に如かず・・・どこでもいい俺の身体に掴まれ』

「掴まれ・・・って。そのえつと」

異性として意識している男性に掴まれと言われ頬を赤らめる一同

『急ぐんだろ？早く』

紅夜に急かさせ背中にネプティーン、右腕にアイエフ、左腕にコンパと掴んだ

『それじゃ、離すなよ（・・・）・・・！』

その瞬間ネプティーン達の目前が一気に上昇した

「ねぶっ！？浮かんでいる！？飛んでいる！？」

「ひゃあああゝゝ！！」

「すごいですうゝゝ！」

『離すなよ離したら大ケガするからな』

「ちょ、聞いてないわよ！！」

『聞かれてないからな』

びつくりが成功したように紅夜はほくそ笑んだ

彼女たちが飛んでいるのは上空30m付近でかなりのスピードで進みもう街の中へ入っていた

『見えてきた。一気に接近して叩き潰すのと上空から落ちて奇襲しかけるのどっちがいい？』

「『前者でお願い（するわ）（するですう）！！！！』」

即答である

飛ぶこと自体初体験と言ってもいい彼女たちにとって後者はシートベルト無し手すりだけの恐怖ジェットコースターに乗るようなものである

『そ、そうか・・・じゃ、行くぞ！！』

三人の気迫に驚きながら今まさにモーニングスターを振りかざそうとしているロボに突撃した

ドガアアアアン！！

予期せぬ攻撃にロボは倒れ連撃とばかりにネプティーヌ、アイエフ、紅夜の斬撃そしてコンパの零距离射撃が襲いかかった

『お前に怨みはないが・・・消えろ！！』

―――斬死煉獄殺

網のように組まれた斬撃は一瞬にしてロボをバラバラにした

「・・・私たちいらなかったじゃない？」

「それ私も思うわ」

「一人で瞬殺しちゃったですう・・・」

一撃しか与えてない三人の眩きあつたことはその三人しか知らない

ズキツ・・

『・・・時間切れか』

頭に響く鋭い痛み

それは限界を超えた警戒音

これ以上は身を滅ぼすことになる

辺りを見渡せばネプティーン達はこの工場の責任者達と話しているのが見えた

どつしりと腰を付く怪我は既に全治していた

不生死、紅夜の身体に刻まれている力。

生きること、死ぬことそんな機能が紅夜の身体には存在しない

まるで紅夜そのものの過ぎる時間がないように傷つけばなかったように塞がり身体の一部が吹き飛ばされば再生していく

人間ではない・・・しかし紅夜は自分のことを人間と信じている今もずっと・・・ずっと

『ネプティーン』

「あつ！こうちゃん。どうしたの？」

「おおあんたがかの有名な黒閃か中々だったな。あのロボ一発で倒しちまうとわな！」

ネプティーン達と一緒に来たのはちょうど紅夜と同じくらいの青年

だった

『・・・あなたは？』

「ぶっ壊されたこの工場の社長シアンっていうんだよろしくな」

今の紅夜には負を感じ読むことができるだからこそ分かったこいつがああ哀しみの負の元凶ということが心の中は少し落ち込み気味だったがなにかにふつきれ輝かしさも紅夜は感じてとった

『よろしく、ネプティー又話がある』

「なに？言っておくけど遺言とかはノーサンキューだからね！」

腕でばってんの形を造るネプティー又に少し笑い

『ははそんな話じゃない・・・ネプティー又頭貸せ』

正直今にでも深淵に意識が落ちそう紅夜とってシアンとの会話は時間が惜しい

「ねぶっ！？／＼／」

半ば強引に引きよせるいきなりのことにネプティー又は紅夜の胸に埋まった

それを見たシアンは「見せつけてくれるねえ」とオヤジ臭いこと言っていたが紅夜は完全スルーの方向だった

「ふわぁ・・・頭に流れ込んでいく・・・」

紅夜がいままで集めたアヴニールの情報と追いつかれてしまった教院の人達の居場所など喋ること出来ないほど衰弱していたのでネプティー又それらのことを送った

『俺が集めた情報だあととはなんとかやってくれ』

頭に響き蠢く怨嗟の声

負の念に身体を徐々に侵されていく感触

偽神化による肉体負担は不正不死である紅夜には関係ないことなのだが

その畏怖の念は紅夜の剛毅な精神力によりなんとか自我を保っている状況だ

正直いつ暴走してもおかしくない

『解除』

負による浸食が拡散していき紅夜の瞳と髪は元に戻るが身体に極限の脱力が襲う

「頼む、無責任かも知れないが・・・ラステーションの未来を守ってくれないか？」

なんとか頭を動かし彼女と顔を合わせる

「・・・任せて!!」

「はっ、・・・頼んだ」

ネプティー又は屈指のない太陽のような笑顔を向け紅夜は安心するように静かに瞳を落とした・・・

「こっちゃん・・・こっちゃん――！――！――！」

「あれ、気絶しただけだろ？」

「そうね・・・羨ましい」

「そうですね！ねぶねぶだけおいしすぎです！」

「あんたは頭撫でてもらったでしょ。私なんて会話しかないんだから・・・」

「・・・はあ」

「黒閃って罪な男なのか？」

影でそんな話があることは泣きつくネプティーンと疲労困憊で気絶する紅夜には届くことは無かった

ラストেশヨンの危機（後書き）

相変わらずの紅夜君でした

彼の鈍感とタラシは病気の域ですねもう少しでラストেশヨン編は終わるかな……

斬死煉獄殺：斬られたことすら気づかない程の刃の連撃

斬られたことに気づくその時は同時に命が散る瞬間でもある

紅い世界（前書き）

この紅夜のちよつとした話です。
見なくても大丈夫かな？

紅い世界

『やあ』

「お前は……」

目を開ける。

最初に見たのは白

数日前に突如現れ全てが謎な奴……名前は確か『ゼロハート』

「……………ここは？」

『病院だよ。紫っ子達が運んでいたよ』

紫……ネプテューヌ達が
辺りを見渡すと確かに白いカーテンや自分が寝ているベッド等を見れば病室と考えられる

『因みに黒曜日はここだから』

振り替えると純白コートの奴の手には最初から合ったように黒曜日が握られていた

『紅夜はまだ偽神化による精神的疲労が残っているからお預けだけだね』

手を伸ばすがススッと摺り足で下がり黒曜日を掴むことは出来なかった

「偽神化のことを何故知っている？」

偽神化

俺だけが使える切札とも呼べる技

デメリットが大きいがその分その力は強大にして絶大だがこの力のことは誰も知らないベールにもだ

『なんで？って顔してるけどそれはヒ・ミ・ツ』

……ム力つく。顔隠して意地汚い笑い声が氣に入らない

『知りたかったら思い出せばいいよ。出来るでしょ自分で蓋を閉じただから』

「……………」

自分で蓋をした記憶もあるけどそれは禁じられた鎖を解き放つこと中から何が飛び出してくるのかそれが……怖い

『真実つてものは自分が苦悩して努力してこそ知るべき価値がある。恐れるだけじゃ何も始まらない前を見ようとしないうの紅夜にそんな権利なんてないよ』

「っ———！」

確かにゼロハートのいうとおりだ俺はいままでなにもしてないのうのと生きてきた

だけど・・・その何が悪い！

「お前に俺の何が分かるんだ！？」

気付けば俺はゼロハートの胸ぐらを掴み引きよせた。
偉そうにべらべらと俺はお前のことなんて知らない

『知っているよ』

「えっ・・・」

『少なくとも今の紅夜より知っている自信がある』

こいつは何を言ってるんだ？

今の俺それじゃお前は・・・

『紅夜がこの世界・・・来る前からずっと君の事を知っている

ーーーーずっと一緒だったんだもん』

その言葉を聞いたとたん俺の理性が切れゼロハートの手にある黒曜
日を取り刃を振り下ろそうとした

『無叡智おいで』

『やれやれしかたがない少し荒く行くから覚悟してね?』

紅夜の顔を覆う影

その影が紅夜の顔と一体となったとき紅夜は意識を失った

「あ……れ?」

目が覚めると知らないところに立っていた

大地は一面は赤色の水が永遠と広がっていた

「赤い・・・」

空を見上げれば黒紅い夜だった
そして紅く煌き月

「ここは・・・どこなんだ？」

『知りたい？』

「！！！！」

後ろの向くそこには意地汚い声し空にたつゼロハートの姿だった

『知りたい？』

「・・・ああ」

俺が頷くまでこいつは動く気配を見せない
必死で頭に上った熱気を体中に回す

『その答えは君がここで偽神化すれば答えが出るよ』

「・・・・・・」

『嘘はついてないよ。あ！そうだそれじゃ優しい優しい僕から一つだけヒントを上げちゃう！ここは紅夜が偽神化という術を取得した場所だよ』

「偽神化を・・・」

ゼロハートのことばの真偽は分からないがどうやら俺はこいつに付き合わないと出れないかもしれない

「ふうゝ、はあゝ」

心を無にする

ありとあらゆる器官を停止させる

なにも考えない

世界の負を背負うことだけに集中する

今俺はここにいる)・・・・・・・・・・)。

「『シン・クレアトル
偽神化!』」

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・

・・

・
「あれ？」

なにも起こらない
なにも感じない

『あゝやっぱりか』

予測できたように頭を抱えるゼロハートに紅夜は飛んだ

「人をおちよくるのもいい加減にしろー！！！！」

例えば黒曜日がなくても紅夜にもある程度の格闘技は出来る
拳を握りただ立っているだけのゼロハートに向かう

ひよい

だがゼロハートはそれを予想していたように簡単に紅夜の身体を逸
らし赤色の水が浸った大地に突撃する

『言い忘れていた紅夜は最初から完全な偽神化が出来ていたよこ
こで』

「完全、な偽神化？・・・どういうことだよ」

顔から突っ込んでしまい赤色の水を手で拭く

『昔の紅夜もそうだったんだけど勘と頭がいいのに中々気付かない
よね』

「俺の偽神化は完全じゃないのか」

『そうだよ。まあ、記憶取り戻さなきゃ話にならないけどさっき言いかけたけど今の紅夜じゃ僕には絶対に勝てないそれはもう運命によつて縛られているぐらいに』

自信家というものじゃないこいつはまるでそれが当たり前のように喋っている

今まで俺の攻撃は全てカウンターか躲されている

『そう落ち込まないでいいよ紅夜が記憶取り戻せば僕と互角に戦えるんだから』

「記憶、記憶、記憶。そんなに俺に記憶を思い出せたいのか？」

『そうだよ。僕のこと思い出してほしいもん』

俺は奴の知り合いとのことは分かった

・・・ゼロハートと一緒にと言ったときは恐怖を感じた
こいつは本当に今の俺より俺を知っているのか

『ん？・・・そろそろだね』

「どうしたんだ？」

『君のお友達が戦っているよ。機械オタクのおっさんの自信作とね』

「…………ネプティー又なら大丈夫だ」

自己満足だがあいつらは希望を持っているきつと・・・大丈夫だ

『!!--!』

その呟いた直後奴が息を呑んだフードで隠したその表情は分からないがとても驚いた表情をしていることには間違いない

『・・・記憶を隠して少し変ったね』

「・・・なにがだ？」

『昔の紅夜は人に頼ることはあっても絶対に他人と手を組むことは無かった。自己犠牲の塊でね僕が何も言っても自分から傷ついて一人で抱え込んでボロボロなって・・・』

そこから聴こえないほど小さくぼそぼそと呟いた

どうやら昔の俺は自殺志願者並の命知らずだったらしい・・・確かにこの不生死の身体ちよつとやそつとの無理はなんとかなるな

「この空間はなんだ？いい加減に長いしたくないこんな気持ち悪い所に」

『気持ち悪いって・・・僕の知っている紅夜じゃない事は分かるんだけど複雑だな』

ここは全てが真っ赤で見るだけで胸やけしそうだゼロハートは腕を組みしばらくうねった

『まあいいや。紅夜出たかったらイメージがいいよ』

「イメージ？この擬似世界らしきものはお前が創ったんじゃないのか？」

なんだかこいつならどんなことでも出来そうな気がする元々初めて合った気がする感じじゃなかったしやっぱりこいつは俺と知り合いなのか？

『違うよ。イメージは自分の心を開いてそこから自分の意思をだすイメージかな？』

「・・・なんだよその曖昧な例は」

『出来なかつたら一生ここから出れないよだから頑張つて』

「なっ！？ちょ」

一生！？それは滅茶苦茶困るぞ！

『バイバイ』

「おい！まで！」

『どうしてもなら思い出せばいいかんたんだよ』

紅夜の言葉に少し止まったがゼロハートの正面に前にもみた闇による空間の歪みによって姿を消した

「・・・ちい」

ゼロハートの気配が途切れた時紅夜は忌々しく下打ちした

紅い世界（後書き）

思つように投降のスピードが上がらない

不完全だからこそ・・・（前書き）

このごろ毎日に更新に限界を感じてきた・・・難しいな小説は

不完全だからこそ・・

そこは紅い世界

見るもの全てが紅くただ赤色に照らす月、赤色の水が満ちた大地
それが永遠と続いていた……

「ちく、しょう……胸焼けがする」

そこに導かれるように連れてこられそして置いていかれた紅夜は
一人

一つの色に支配された世界を歩いていた

「ちっ……」

赤色の水を掻き分けながら一歩また一歩進んでいくが見える景
色は変わらない

服が赤水を吸い足が重くなっていく魔法を使えば空を飛ぶことが
出来るが何故かここでは魔法は使えず歩くことしか行動手段がない

「疲れた……」

もう何時間歩いたか分からないもしかしたら一日中歩いていたか
もしれない

「はぁ、はぁ……あっ」

突然だった赤水が満ちた大地に一つ佇む玉座

真紅の色を中心とした漆黒の装飾が飾られた一際美しい濁った王
たる者こそだけが許された聖域

「……………」

それがとてつもなく懐かしく感じた

この世界すら知らない紅夜だったがその玉座に魅入られ誘われる
よう腰を降ろした

「昔の……俺」

見上げれば魅了させ狂気を誘発させそうな恐ろしく美しい朱月

昔の自分はここに来ていたのか今の自分のように無限に続く天地
を見つめていただろうかそして何を思ったのか……

――思い出したらかんたんだよ

俺の過去に全ての答えがある時よりみる悪夢といってもいい夢の
中の俺

たしかに思い出していればあいつは自己犠牲の塊だったずっと無
理をしてボロボロになってそれでも誰かの笑顔を守りたくてまた気
付いて……そして昔の俺は誰かを守ろうとしたことただどれだけ
の意思で血反吐を吐くつほどの努力を続けた結果……真実を知
った

それだけの苦悩、

それだけの努力を

人間である俺はしてしまっただけで逃げた

知ってしまった真実はどんなものかそれは知らない
隠しているからだずっと奥に俺の心に

「はは、思えばこの世界にきてこんなに悩んだことなかったな・・・」

ベールが俺をダンジョンで倒れているのを偶然見つけて協会に運んでもらって戸籍調べてもらっても見つからなくてギルドのスパイかと思われ危うく殺させられたときにベールが助けてくれてそれから時間は掛かったけど少しずつ教院の人達に認められ始めてベールが守護するリーンボックスをみんなに恩返ししたくてモンスター狩り始めて他の大陸にもモンスターで苦しんでいるのを聞いて気付けば飛び出して助けて・・・前途多難な生活してきたな

「・・・・・・・・・・」

ゆっくり瞳を閉じる

時間はどれくらい掛かるかは分からないけどなんとかなりそうだ
それにあのゼロハートにやられっぱなしなのは気がおさまらない

・・・しかたがないか

ちょっと、ちょっとだけ俺は俺を知ろう

――暴力による殺戮それが夜を紅に染める俺だけに許された力

「あつ、・・・」

同じ場所で俺が言った言葉

そのときの俺は明らかに偽神化を使っていた
けど俺の偽神化とは全然違う

遥かに深い闇

次元を歪ます暗黒

世界そのものの負念

「ここは・・・俺の

――心理世界」

ゼロハートが造った世界じゃないここは俺の心
そしてこの大地を満たす赤色の水は

俺がいまま殺してきた生き物が流した血

「はは、殺戮者を名乗りながらも自分の善を突きとおした・・・バ
力か」

全部は思い出しではないけどこの俺は本当^{バカ}に本当に優しすぎだ

ネプテューヌはサンジユが造った兵器と戦っているはずだ嘘をつかないとかゼロハート言っていたけど嘘だな

ここは時間の概念もない世界

そして俺は多分ぶっ倒れて意識をこっちに持ってきた

多分あいつは俺が出て来る前提であんなことを言っていたのか

――つまり外の時間はまだ進んでない

「参戦行くか・・・」

俺の世界の血がまるで生きてるように蠢き一つのドアを造り出す
簡単だここは俺の世界だいちいちイメージしなくてもこの世界は
俺で俺がこの世界だから

満たしていた血の海は一瞬で固まり本当の大地とかしその上を一
歩づつ歩いていきゆつくりと開いた

「・・・ただいまといふべきか？」

『紅夜の好きなように・・・それにしても記憶は思い出した？』

目を開けるとそこには椅子に座りこっちを見つめるゼロハート

「おれがとんでもないバカだったことぐらいだ・・・お前のことは何も知らない」

『フッフ、ハハハハハ』

腹を抑えなんとも愉快そうに笑う

「なにがおかしい？」

『紅夜が紅夜に少し戻ってなあってそれが面白って。エヘッ』

隠しているそのフードの中では子供がいたずらにばれたような表情をしているだろう

「つまり俺はお前の策略にまんまと踊ったということだ」

『言い方が悪者ばいけどそう思っていていいよ』

「・・・・・・・・」

『はい、黒曜日』

相棒ともいえる愛剣を受け取る

ゼロハートは黒曜日と紅夜をなんども視線を行ききさせ口を開いた

『紅夜のほとんどの力は置いてきているけど自分の本当武器くらいなら僕が用意してあげるけど・・・いる？』

「昔の俺が使っていた武器か」

少し悩む俺が使いなれている武器はだいたい大剣と双剣なんだが
その他の武器も使っていたような気がするそれを使えば今より手札
が増えることにつながる・・・けど

「俺はお前の知っている紅夜じゃない」

『その答えは拒否ってことだね・・・まあいいか。紅夜僕はもう
行くけどいつか僕のこと思い出してね

――待ってるから』

その言葉を言い残しゼロハートは影になった

「・・・あいつのことは後回しだ。ネプテューヌ達の方が優先だ・
・・・」

ボロボロになったコートを羽織りその手に黒曜日を持ち窓から外
へ紅夜は飛び立った

「コウヤさん・・・お目覚めに・・・」

少し遅れてやって部屋に入ってきたのは看護師だったが既にいな
い紅夜を見ると先生を呼びにその部屋を後にした

「何故だ。あんな小娘が作った武器に。ラステイションの全てを集約した機体のハズだ！！！」

中年男性の声が広いホームに響く
天上に届きそうな巨大なロボは所々に煙を出しほぼすべての武装は潰させれもう勝敗はついていた

「どうして喧嘩になったのかは分からないけど、なんで私達が勝てたのかは分かるよ」

そのロボの前に立つ三人その瞳から感じられるのは勝利の二文字
その背景には様々なことがあり自分を超克する力を手にした

「シアンの作った武器はとっても暖かいの」

この勝利に導き職人としての魂が込められている武器に彼女、ネプティー又は頬を当てた

「当然だ。俺の造るモノにはお前が捨てた物、全部が詰まってる！！」

決め台詞と言わんかぎり胸をはる青年、
そしてこの事件の首謀者サンジユは地面に手を付けぶつぶつと呟

き始る

「……分かん。何が勝り、何が劣っていたのか」

「……アヴニールも、コレでおしまいね。結局、何もうまくいかず……貴方達に止められた形になってしまつみたい」

物陰から現れてきたのは紛れもないこの地の守護女神^{ハイド}ブラックハートだった

「あ！この前の新型、また出たな！！でも今ならシアンの武器もあつて百人力だぞ！やあつ！来るなら来い！！」

「戦いたかったら戦ってもいいけど。ボスの連戦は辛くない？もちろん手加減しないけ……！！」

その時ブラックハートの視線にはネプテューヌ達が倒したロボが倒れるところだった大きく巨大なロボの下には膝をつくサンジュの姿が

「逃げなさい！！！」

ブラックハートの叫びが木霊する

「……ひっ！」

人なら簡単に圧殺できるほどの質量がサンジュに襲いかかる
いくら悪人でも彼もラストイションの住民だそれを見殺しにすることは出来ない

ブラックハートは駆けようとするが一瞬で悟った間に合わない

「た、たす」

言い終わる間もなく無慈悲に口ボは崩れ落ちるそういう未来が見えた

――十字斬月破

黒い閃光が空を駆けた

同時に振り下ろさせる二つの斬撃

無残に切り裂かせ吹き飛ばされる口ボ

「ギリギリセーフ！」

くるりと一回転を決め地面に着地するのは紅夜だった

「……きつ、貴様は！？」

「会うこと自体は初めましてだなアヴニール代表サンジュ……」

その目は冷徹で口ボを切り裂いた双剣の黒曜日を持ちゆっくりサンジュへと近づくその足跡は死を予感させる冷たく鋭い音

「お前確かこの世には人間はいらないとほざいていたな」

「あ、当たり前だ！この世に不完全なものはいらないそのことを何故分らない！？」

「……予想していた以上に落ちぶれているようだなお前は」

「なに!？」

紅夜の言葉に声を上げるサンジユ

はぁ・・・とため息をする紅夜

「アホが不完全だからこそその人間だろうが!!!」

サンジユの襟を掴み一気に近付かせる

「お前は考えたことがあるか!？人はずっと不公平なんだよ

生まれついでの才能

生まれついで環境

生まれついで不幸

誰だつて得意不得意があつてそれが長所であつたり短所であつたりするんだよ

自分でも出来ないことは誰かに助けを呼んで初めて自分を生かすことも出来る

だからこそ不完全なんだよ人つて漢字書けるか!？

人は誰かに支えられてこそ人なんだよ!

機械もな人が自分では出来ないことするために協力しあつて出来た努力の結晶なんだよ!

機械そのものを造っているのはまちがい貴様が嫌いな人間だ!

全てを機械に変える?それはだれのためでもないただの自己満足だ!!!」

その迫力にその場の全員が言葉を失つた

「完璧を求めるのはいいそれも人類が歩む進化の道だ

だがな・・・自分のエゴだけで世界を好き勝手にする権利はお

前には無い！！！」

最後にそう言うと強引にサンジュを地面にたたきつける

「私は・・・間違っていたのか？」

「ああ、お前がどんな信念持ってここまで来たのかは知らないが俺はその全てを否定する」

地面にたたきつけられた格好のまま動かなくなったサンジュに容赦ない言葉を叩きつける

「私は・・・何をすればいいんだ」

「はあ、そんなこと自分で考える過去は変えなくてもお前には未来がある立って歩めよ

――お前には両親に貰った立派な足があるだろうが」

紅夜の言葉に自分がなにをしてきたにかそのことによつやく罪悪感が目覚めたのか静かに涙を流すサンジュ

「・・・柄にでもないこと言っちゃった」

頭を数回掻き

ネプテューヌ達の元に足を運ぶ

「」「」「」「・・・」「」「」「」

「・・・何ですか？その視線」

その場に五人の奇異なる視線に紅夜の頭にはクエスチョンマークが溢れた

「過去は変えなくても未来は変える・よし頑張ろう」

「こうちゃん！おかえり！！ものすごくかつこよかったよ！！」

「熱血少年漫画シーンみたいだったわ・・・そのかつこよかったわよ」

「かつこすぎです！胸がドキドキしますう」

「あのサンジユを言葉で改心させた・・・？」

五人それぞれのリアクションを展開させる

だが紅夜自身はただの説教ぐらいしか思っていないく自分がすごいことをしたことに全く気付いてないのであった

――こうしてこの事件は終結となった

不完全だからこそ・・・（後書き）

お説教タイム！

プレイしていた時にサンジュに言いたかったこと書いてみました（長すぎだろ）

次回で多分ラストエディション辺は終わるのかな？

頑張って書きたいです

気が向いたら感想とかくれるとうれしいかな・・・

十字残月破：黒曜日を双剣にして十字に切り裂く技でシンプル

修羅なる一日 前篇（前書き）

書いていたら長くなりそうだったので前篇と後篇に分けます。すいません

修羅なる一日 前篇

『死ねええええ！！！』

——冥皇墮罪月

「グギヤアアア……」

開口一番に大技を決める紅夜
その目は血走しつつた必死の表情でモンスターを切り裂いていく

『明暗に輝くのは鮮血に汚れ穢れし紅黒の剣、生命尽きるその刃に見えるのは屍の面影『斬光滅裂陣』……生と死の狭間に溺死しろ！』

「グギヤアアア……」

紅夜の前に一際デカイモンスターが立ち塞がるが瞬殺

「グオオオオオオオオ！！！！」

『大地を業火にて焼き尽くす炎獄
封印されしその鎖を溶解させ

この地を灰燼と化せ！——エクスプロージョン・インフェルノ
！！！！』

20体以上のモンスターが一気に紅夜を襲うが闇の炎によりあっという間に殲滅された

余裕ならば使うことが少ない偽神化をフルに使い蹂躪していく紅夜

何故、紅夜がこうなったのかは数日前の出来事が切っ掛けだった

サンジュを改心させたあとブラックハートはその場に残り俺達は来るであろう教院関係者に迷惑をかけないように展覧博物館を後にした。

そのあとネプチューヌたちとも別れ紅夜は自分が眠っていた病院に戻ったそして紅夜を探していた看護師に見つかりきっちりお説教を貰った怪我は全て完治していたが念のためにと一日入院することになった

紅夜としては依頼が溜まっているので出来れば断りたかったが紅夜に拒否権はなく大人しく入院生活を余儀なくされた

そして無事に退院しさあ仕事だと思いきや教院関係者が使者として紅夜の元を訪れ彼が言うにはブラックハート様がじきじきにお礼をしたいとのこと断ろうとしたがこの地の守護女神の誘いを断ることなぞ言語道断またしても拒否権などなくとぼとぼ付いていく紅夜

「ノワール・・・」

「コウヤ久しぶりそしてありがとう。ラステイションを救ってくれて」

「救ったのはネプチューヌ達さ・・・俺はなにもしていない」

「でも一人の命は確かに救ったのはあなたよ。それに心もね」

「・・・サンジュか、俺は俺の理念をぶつけたそれだけだ」

「でも、今のサンジュはホント心を入れ替えたようだわ。私には絶対で出来ないことよ」

「誰にでも出来ること出来ないことぐらいはあるさ。ノワールは今の自分に満足していないだろ？」

「そうね。フフ紅夜の話はほんと私よりずっと様々こと超えてきた年上みたいね」

「爺臭いだろ？」

「とても頼りになるわ。ねえ、コウヤ私の従者にならない？・・・私は貴方がほしいわ」

「それは魅力的な話だ・・・断るけどな」

「・・・そう」

「もう少し粘ると思ったんだけどな」

「貴方の意思を尊重したまでよ・・・でも、諦めないけどね」

「そっか、分かっていると思うけどもうすぐでリンボックスの大陸が来る・・・しばらくお別れになるな」

「……………そうね」

「だから……またなノワール」

「……ええ、またねコウヤ」

また会う約束を誓いお互いに仕事を行った
だが後になってノワールはプロポーズ紛いなことを言ったことに
気付き頭を抱えたことは余談だ

「ああゝ疲れた。明日、つかもう朝だけでもっとハードになるな・
・頑張るしかないけどな」

一人そう呟き身体を思いっきり伸ばし大きな欠伸を一つ
今までの疲労感が全て睡魔へと変わりベットに横になる

結局その日忙しく紅夜は早朝の6時頃ようやくベットにつけた
ここまでは良かったここまでは……

「ちょ、その体制は辞めなさいって／＼／」

「ええゝだつてこうした方が起こしやすいよ?」

「こうさんゝ朝ですよゝ?」

知人三人トリオの声がしてオッドアイのその瞳を開ける

「ネプテューヌ……?」

真っ先に視線に入っただのは等しき十字の髪飾りを付けたネプチューンだった

彼女は仰向けに寝る紅夜を跨るように乗っかっていて初めて見る人にはあきらかにムフフな行為をしていると勘違いされることが間違いなしの体制だった

「なん、だ？」

「朝だよ！討伐しに行こう！！」

昔8時から放送されていたコメディ番組みたいなノリで朝から超ハイテンションのネプテューヌ

「ごめん・・・マジで勘弁、して・・・」

その対極に超マイナステンションの紅夜

「顔色が悪いです。昨日はなにをしていたんですか？」

看護婦の卵でもあるコンパは紅夜の異常に気付き心配そうな声を上げる

「溜りに、溜まった、依頼の、消化・・・」

「本当に顔色悪いわね昨日何時に寝たのよ」

「昨日は、寝てない、早朝6時に、帰って、来れた」

もはや死にかけの呻き声しか出せない紅夜

「はあ！？6時！大丈夫なのそれ！？」

「正直、キツイ・・・今何時？」

「えっと、ちょうど9時になりますう」

「・・・後、・・・1時間」

「えっ、そこはあと5分とかじゃないの！？」

「ねぶ子アニメの見過ぎ3時間しか寝てないのよ。今日は静かにさせてあげましょう」

「えっ、だって我が辞書に不可能という文字はない！とかいった人も3時間しか寝てなくても大丈夫だったんでしょ？」

「俺は、俺だ、お願いだから、寝かせてくれ」

中々引き下らないネプテューヌに対してもう涙目をお願いする
紅夜

「ねぶねぶ今日は私達だけで行きましょう。さすがに可愛そうなのですよ」

「えっ、じゃ、こうちゃん。明日一日付き合ってくれる？」

そうこれが全ての始まりだった

「分かった、なんでも、付き合ってやるから、もう、寝かせてくれ」

「やったー！！約束だよーちゃん！！」

欲しかったおもちゃを買ってくれたように喜び立ち上がる体制上の関係で紅夜の瞳には青白のしましま模様した何かが映ったがそれを理解することなくすぐにまた睡魔に身をまかした

「……あ」

目が覚めると時刻は10時ちょうどだった。

自分の体内時計に感謝しつつゆっくりとベットから降りる

「ふあゝゝ、んん、ん・・はあ」

怠けた身体をほぐす様に身体を動かし今日のスケジュールを確認する

今日もたくさん仕事をこなさなければならない

「……アレ？」

予想ではあと3日ぐらいでリンボックスが来る

明日のスケジュールもいっぱいなのを確認すると冷汗が顔に流れた

「……明日一日付き合ってくれる？」

「……分かった、なんでも、付き合ってやるから」

1時間前に会話した記憶が鮮明に浮かぶ

「ハハ、アハハハハ」

神（作者）は言ってる・・・修羅になれと

「ちくしょうがあああーーーー！！！！！！」

とりあえず1時間前の自分をぶん殴りたいと思いしながら紅夜は壁に置いていた黒曜石といつものコートを持ち空を走った

『消えろ！』

――魔神剣・殲光翼

四対の黒き翼がダンジョンに生息するモンスターを一気に消滅させる

『つぎーーーー！』

呼吸する時間すら今の紅夜には惜しい

自分が言ってしまったんだ自分で責任を取るべきということではない
若干辺りの地形を変えるほどの大技連発。

手抜き無用

手加減無用

慈悲も無用

まさに修羅と化した紅夜は次々とモンスターを狩りつくしていった・・・

修羅なる一日 前篇（後書き）

今回修羅とかした紅夜登場なにふりかまっていられない大変なことになっていきます

この頃色々忙しい来週から更新スピードが下がると思います・・・
すいません

冥皇墮罪月：闇の魔力を剣に纏わせ地面に叩きつけその衝撃波で周囲の敵を払う技

斬光滅裂陣：黒曜日の双剣で神速の速さで滅多切りにする通常モードの紅夜の奥義、偽神化モードだと最後にX字の斬撃を放つ

エクスプロージョン・インフェルノ：闇の爆炎で一気に周辺を焦土とかす闇と火の混合魔法

修羅なる一日 後篇（前書き）

今回キャラ崩壊があります。自分の知っているキャラはこんなじゃないかと思えますので少しでも不快感を与えてしまつたらすいません

修羅なる一日 後篇

「ハハハハッハッハハ、やろうと思えばなんとかなるものなんだな」

キアラ崩壊ぎみの紅夜は最後のターゲットを仕留めその亡骸の上に達成感に浸っていた

時刻は8時もう太陽はあはようというように空を昇っていた

「あとは・・・報告して・・・終わりつと・・・腹減った」

飯食う暇もなく動き回った紅夜はまさに燃え尽きていた

黒曜日を杖代わりにしてなんとか動く

正直こんな体であいつらの相手できるだろうかと不安を抱きながら紅夜は歩んだ

「きゃ・・・」

「おっと」

ちょうど角を曲がろうとしたその時、だれかとぶつかった

背は紅夜の肩にも届かないほどの小さく頭には兎の形をした帽子をかぶっていた少女

その姿は紅夜には身に覚えがあった

「がすと？。がすとじゃないか」

「誰で・・・コウヤさんだったんですか久しぶりですの」

彼女はがすと自分で作ったアイテムを売ったりして世界中を回る人だ

紅夜も彼女の作ったアイテムにお世話になったことがある・・・
値段はそれなりにしたが

「一人で素材探しか？大丈夫なのか？」

「最初は怖かったですの。でも、コウヤがここにいるなら大丈夫ですの」

「俺・・・これから報告しにいかないと行けないんだけど・・・」

「がすとが欲しい素材はこれですの採れるモンスターはこの辺りに生息しているはずですよ」

「俺の話聞いたか・・・？」

「報告すること自体は今でもなくてもいいですよ。がすとの手伝いをするほうが優先事項なのですの」

聞いていたことにはよかったがもう付いていく前提ですか・・・

「ってこのモンスターさつき俺が倒したぞ」

「そうなんですの。それじゃ水先案内よろしくお願いしますの」

「ちょ・・・」

何無言わず紅夜の手を引き奥に進もうとするがすただが肉体的に疲労が溜まっている紅夜は引っ張られた手に従いそ

のままがすを押し倒すような形になった

「ふぁ!!!!!!／／／」

「あつ、すまん」

女性を押し倒すしたのにこのリアクション・・・一体彼の頭の中はどうなっているのだろうか

「なにをするのです!?」ウヤはTPOという言葉を知っているんです!?!」

「しってるけど・・・えと、ごめんなさい」

とりあえず謝るここでもなにを言っても無駄だと思ったので

「その・・・場所を考えてくればがすとは・・・」

「?????」

怒ったと思えばいきなり頬を赤らめちらちらとこっちを見るがすとその行為に紅夜は頭を抱えることしかできなかった

「あつ、そうだ。がすと疲労回復のアイテムないか?」

「うーんと・・・素材料と合成料が掛かりますですの」

「ははは、どれくらいだ?」

「強力で高級なのなら5万クレジットですよ」

「高！・・・でもしかたがないか・・・とほほほ」

腕は確かなものなのは分かっているるので疑わないがさすがに高額である

だが紅夜の身体も限界に近いので出来るならば強力な奴がいい重たくなった財布からちゃっかり5万クレジットを渡す紅夜・・・そんな現金を持ち歩いている紅夜も中々だと思っが

「まいどあります。顔色が悪いので頼むと思ったのですの」

「分かっていたのかい・・・まあいいや」

がすとに渡させた変な色のドリンクを一気に飲む干す紅夜それと同時に体中に稲妻が駆け巡ったような感じがする

「ん・・・かなり強力な奴だなこれ」

「コウヤ専用に作りましたのです。その分値段はあるのですがコウヤなら払ってくれると信じていたのですの」

「それはありがたいね・・・前みたいに実験とかじゃないだろうな」

「・・・・・・・・・・」

「おい、なぜ目をそらす」

「コウヤとがすとの仲ですよ」

「そんな問題じゃないだろう・・・もういいや、じゃがすと行くぞ俺から離れるなよ?」

「はいですの!」

なんだかんだがすとの薬は中々の効果で先ほど前から紅夜を襲っていた睡魔と疲労感は嘘のように吹き飛び身体が楽になったさすがに空腹感はどうしようにもないがそれはなんとかなる

「ありがとうございますのこれで全部なのですの」

「ふう、お疲れ様」

「こっちこそお疲れ様ですの」

倒したモンスターの素材を手入れついでにとダンジョンを回り色々採取した一同はようやく外に出た

「・・・それじゃ、がすとは一足に先に帰らせてもらうのですの。またですの」

「ああ、またな」

まるで逃げるように紅夜の元を去るがすと紅夜はその背中を見ながらあんなに素材集めたのによく一人で持つ・・・と考えていた

「・・・ん?」

今度会ったら一発拳骨かましてやると誓った瞬間だった

「どうすんだよ。おい」

とりあえず自分に肉体強化の魔法を全開に付けなんとか宿の戻った紅夜

長くなったコートはとりあえず所々結んで小さくしていた
紅夜はベツトの上で空を見ながら腕を組み悩んだ

「これで一生このままとかマジで洒落にならないぞ・・・」

冷や汗全開で悩む

一応魔法はいつものように使えるんだが黒曜日は肉体強化全開じゃないと黒曜日を振れないぐらいまで筋力が落ちている常時戦闘でそんなことしていたらすぐにガス欠起こしてモンスターの胃袋直行だ
また成長を待とうと思えばさすがに紅夜もそんな貯金はない
こんな外形じゃ依頼なんて絶対に受けられそうにないし・・・

「不幸だ・・・」

紅夜の呟きは狙ってきたかと思うほど強烈なドアの開く音により消えた

「グットモーニング！こうちゃん！約束覚えているよね！？今日は私達と一緒に・・・」

いつものように元氣120%で部屋に入ってくるネプテューヌだがベツトにちょこんと座っている紅夜を見ると固まった

「・・・こうちゃんの弟ちゃん？」

「本人だ！」

「・・・同じ格好をした人たちに薬呑まされた？」

ぐっ、ネタが分かったから心が痛い・・・ってか俺あれと同類と思われているの！？

「呑まされていない！」

自発的に呑んでしまったただけだ！
そしてこんな副作用があるなんて俺は知らなかったんだ！

「「どうしたの（ですか）ねぶ・・・」」

後から来たアイエフとコンパもミニ紅夜を見て固まった

「「こうさん（コウヤ）の息子？」」

「確かにこんな年離れの弟も少ないけど息子はもっとあり得ないだろっが！！！！」

ミニながらもかなりの迫力で紅夜の突っ込みが炸裂した

「ふん。知り合いの薬を買って飲んだらこのありさまと」

「うつ・・・」

ネプテューヌ達に事情を説明しなんとかその場を沈黙させることに成功させた紅夜

「可愛そなのですよ。ナデナデしてあげですよ」

「辞めてくれ」

言葉では否定するが手を払うことは出来ない

なぜなら今の状況ネプテューヌが紅夜を膝に座らせがっしりホルドしているからである

「なんか癒されるよ。こうちゃんって小さい時はこんなに可愛かったんだ」

いつものイケメン顔は小さくなったことで中性的な顔立ちになりどこか保護欲溢れる可愛らしい姿に変貌した

「ねぶねぶあとで私と交代するのです」

「えっ嫌だよ。こうちゃんカイロみたいで温かいし」

「むっ、こうさんはねぶねぶの物じゃないのです！共通財産です

」

「いや〜離したくない〜」

これがギャップ萌えというものが抱きしめるネプテューヌに自分も抱きしめたく引つ張るコンパその間に挟まれた紅夜は女性の胸部に挟まれなにも言えなくなっていた

「（誰か・・・助けてください）」

今一度不幸だ叫びたい紅夜だった

「ほら、何やっての二人ともコウヤの顔色が悪くなってきたわよ」

そこに天使（紅夜視点）が救いの手を差し伸べた
その天使は二人の悪魔（以下同文）を祓い紅夜の救助した

「コウヤ大丈夫？」

あまりの嬉しさかそれとも肉体が精神に引つ張られたのかアイエフの腰に手を回しがっしり離さないようにする紅夜
その反応にアイエフは思わずドキッとした

「あ、ありがとう・・・」

ぶっ・・・！

よほど苦しかったのか涙目になり

甘い保護欲を誘う小さくも強い適度の子供が抱きついてくる感触
とどめに上目使いという究極兵器を投入
そのあまりの破壊力にアイエフはとっさに鼻を押さえた

「（何この可愛い生き物・・・）」

ちらりと目線をずらせば同じ究極兵器リーサル・ウェポンを見てしまった仲間が自分
と同じように鼻を押さえグジョップのサイン

「「「（これはいい仕事しているわ（ね）（です）「「「

その時三人の心は以心伝心通じ合った

「さあ行くですよ！」

「「サーイエッサー！！」」

今日は数日前にブラックハートに教えてもらった自分達の目的『
鍵の欠片』らしきアイテムの場所を突き止めた一同はミニ紅夜（コ
ンパ持ち）をパーティーに加えダンジョンの中に入って行った

「コンパお姉ちゃんそろそろダメですよ。怪我しちゃ大変ですよ」
・・・」

やはり肉体が精神をひっぱりいつの間にか全員の呼び名にお姉ちゃんを追加せられ性格も徐々に大人しくなっていく紅夜そしていつの間にかネプテューヌパーティーの三人が修羅化しばさっと消し飛ばしていった

「えっと『大地に眠る古代の記憶、我が呼び声に答え隠されたその顎^{アギト}を解放せよ！――ジュラシック・キラー』！」

例え幼児化しようとも魔法だけはきっちり使え紅夜もモンスターを倒していく

「次は・・・」

「もう十分よ。コウヤ」

「ふえ？」

頭をネプテューヌ（変身時）に撫でられ詠唱しようとしたその口を止める

「お姉ちゃんに任せて・・・一瞬でケリを付けてあげるわ！！」

言い終わる間に魔導兵を一撃で両断させ

さらに群がるモンスターを華麗な太刀捌きは正に圧倒的

「ちょ、私にもいいとこ見せてよ・・・！」

「私もです・・・！」

アイエフとコンパも負けてはいられず

アイエフは速いスピードで相手の死角をとり巨大なモンスター切り
刻み

コンパは注射器による射撃そして近付いてくるモノには串刺しにする
という

正に無双状態だった

「お姉ちゃんたちすごい」

悪意なしの純粋な笑顔で彼女たちの活躍に笑顔で答える

その笑顔にブーストがされたように更に動きのキレがよくなる

・・・余談だが今の彼女たちならラスボス倒せるんじゃないかと思う
ほどとにかくすごい

「まちなさい！これ以上先には進まないわよ。・・・私を倒さない
限り！！」

鍵の欠片まであと一步と言ったところに突如現れる人影

紅夜とは一回戦いネプテューヌは四回ほど戦った相手にしたこの地の
守護女神ブラックハートが参上した

「はあ、また新型ね。あなたいい加減にしつこいわよ私達はあなた
に構っている暇はないの」

ブラックハートを見た瞬間呆れた呆れたため息つくネプテューヌ

「貴方達には無くても私にはあるの！勝負よネプテューヌ今日こそ
決着を・・・コウヤ？」

自分と戦うであろうメンバーを見渡すとコンパに抱き掛かっている

三二紅夜を発見

「あつ、ノワお姉ちゃん」

「・・・えっ？、ええっ？？」

「ノワお姉ちゃん？コウヤあの人と知り合いなの？」

「うん。大切な友達！」

あまりにも突破した状況についていけないブラックハートに対して
どどん話が進む

「一緒にご飯食べたりお買い物ものしたりしたんだよ！」

「・・・へえ」

「・・・それは」

「・・・聞き逃しの出来ない内容ね」

数日前にブラックハートと遊んだ時のことを喋る紅夜
話が進むごとに彼女たちの怒りのボルテージも上がっていく

「（・・・話から推測するにコウヤはなんらかの理由で幼児化した
？・・・これもしかして）」

ブラックハートもバカではないので紅夜の話から簡単に推測した
そこでブラックハートに一つの方程式が閃いた

ネプテューヌ達の手からコウヤを救出（奪取）する

←
幼児化しているので自分が世話を見て懐かせる

←
そして自分好みに紅夜を育てる

←
そして収穫（？）

「完璧ね・・・フフフ」

紅夜が自分誘いを断つたのは好きな人の意思を大切に思ったからだ
がこの作戦ならどちらにも不自由はない自分の獲物を掴むその手が強
くなるいや体中から力が溢れるそんな気がする・・・恋する乙女は
時に豹変するとはこのことだ

「ネプテューヌ勝負よ。もし私が勝ったら・・・コウヤをお持ち帰
りさせてもらっわ！！！」

「・・・なっ、なんだと！？」「」

ミニ紅夜の愛らしい会話すらを聞き流してしまうほどの条件
ネプテューヌ達はすぐに目と目で会話しコンパは名残ある表情で紅
夜を地面にはなした

「お姉ちゃん？」

「少し待っていてねコウヤ」

「私達の幸福を奪う愚かな敵が現れてね」

「危ないから少し離れているのです。大丈夫です・・・すぐに終わらせますから」

いまいち状況を掴めていない様子だったがコクリと小さくうなずきトテトと近くに合った柱に隠れるその行動に紅夜以外のその場にいた全員が萌えくと呟いたのは余談である

「私達のコウヤをお持ち帰り？ずいぶん舐めたこと言ってくれるわね？」

鷹のような鋭い眼光を光らせながら太刀を構えるネプテューヌ

「そうね貴方がいくらコウヤのお友達と言っても聞き逃せないわね」
まるでこれから調理でもするようにその手に握った双剣を弾かせそのたびに火花が散る

「そうです。今日は私達に慈悲はありませんです。・・・潰してあげます」

顔は笑っているが目は絶対零度の冷気を感じさせた

「いいわよ。全力で来なさい今日の私は

――阿修羅をも凌駕する存在よ！！！！」

その言葉が引き金となり四人の命を掛けた激闘（と書いて死闘）が始った

修羅なる一日 後篇（後書き）

どうでしたか？ミニ紅夜。個人的に面白くできたと思っています
もしこれをまたやってほしい！とご希望があればまたやってみたい
と思っています

。次回はいよいよリーンボックスが舞台（最初は少しラスティション）の予定です。
楽しみにしてくれると嬉しいです

ジュラシック・キラー：左右の地面が恐竜のような大口になり相手を噛み殺す魔法

。地面からの攻撃なので空中相手にはほぼ当たらない（ただし地面があればどこからでも出せる）

俺は帰って来た！（前書き）

今回は予告編？みたいになってしまったのでかなり短いです

俺は帰って来た！

「・・・なにこの状況」

目覚めると見覚えのない天井が目に入った

そんなことはどうでもいい今自分が感じる左右と上に誰がいる（・・・）？

「・・・・・・」

右を見る

自分の右手を枕にしてすやすやと眠るコンパ
左を見る

自分の左手を抱き枕のようにして眠るアイエフ
上を見る

涎をだらしなく流しながら幸せそうな顔で覆いかぶさるように眠るネプテューヌ

「昨日一体何があったんだ？」

昨日の事を思い出そうとすると黒いもやもやが出て思い出せない。
まるで思い出すなと言っているような

「ん？。んゝんん・・・はあっ！？」

一番先に起きたのはアイエフだった

俺と視線が合った瞬間、顔面を一瞬で真っ赤に染めベツトから飛び出した

「なっ、なっ、・・・戻っている」

状況を確認しようとしばらく狼狽していると落ちつを取り戻しな
んだか心底残念な顔になった・・・なぜに？

「・・・本当だ（です）」

いつの間にか起きた二人組こちらもすぐく残念そうな顔・・・お
れなにやっただ？

「つか、離れろ。そろそろ熱い」

はぐいとネプテューヌは拘束を解除した
寝ぼけているのかいつものテンションはなく普通だ

「なあ、昨日俺が何かしていたのか？どうも靄が掛かって思い
出せない」

「・・・ソレハタイヘンダネ」

「ソウネワタシタチガコウヤノヘヤニオジャマシタシタトキハ」

「コウサンハグッスリネムッテイタデス」

・・・怪しい

それも物凄く

とはいえ記憶がないんじゃないでしょうか

「まあ、いいや。俺はこれからリーンボックスに向かうがお前たち

はどうする？」

「えっ、こうちゃんもリンボックスに行くの？」

「あれ？言っていないかったか俺の家っていうか俺の出身地はリンボックスだ」

その言葉にアイエフが一瞬息を呑んだがその時の紅夜達は気が付くことはなかった

「知り合いに早く帰ってくるって言うておいたからな急がないと大目玉をくらう」

また一日中部屋に籠っていなければいいんだが・

「ねえ、こうさん念のために聞くけど・・・知り合いの人って女の子？」

ネプテューヌがいつもと違う雰囲気で紅夜に迫る
それに紅夜はいつもの破天荒なネプテューヌはどこに行ったと思
いながら口を開いた

「そうだけど・・・」

そう答えるとネプテューヌを含め一斉に黒いオーラがあふれ出る
「まだライバルがいるのか」とか「こんどはギャルゲー風な幼馴染
かもしれない」とかブツブツつぶやく三人を後ろめたさを感じなが
ら紅夜はネプテューヌ達の部屋を後にした

だが紅夜は気付かない彼女たちの荷物にカメラらしきものと写真

が零れ落ち

彼女達とくにコンパの話に矛盾点があったことなんて

「す〜う、は〜」

やってきました。っていうか帰ってきました

雄大なる自然に満ちたそこから生まれる緩やかで優しい風が紅夜の頬を撫で

森林が生い茂どこまでも見渡すことが出来る水平線の草原
いつもの漆黒のコートを靡かせ
今この時を独り占め

零崎 紅夜。

雄大なる緑の大地『リンボックス』に帰還

「さあ、行くぞ」

序曲はもう奏でることはないだが紅夜にとっての始りの大地とも

いえるここで彼はなにを見るのだろうか

そして場所を変わり

『クスススス』

不気味に笑う声

彼かそれとも彼女かそもそもその目的はなんなのか

そいつは鏡のようなアイテムからずっとずっと彼を紅夜を見ていた

『・・・・・・・・オオオオオオ』

そこは地獄という言葉がよく合う場所

暗黒の大地を埋め尽くすモンスター

そこはもはや人が住めるようなところではない

咆哮、断末魔、畏怖、煉獄

そんなことが日常な世界

モンスターの誕生地

ゲームギョウ界の裏の世界

その名は・・・

『冥獄界』

俺は帰って来た！（後書き）

みなさんは矛盾点に気が付きましたか？

因みにブラックハート戦はもちろん主人公補正があるネプテューヌの勝利です。・・・あの守護蜘蛛は巻き込まれて瞬殺、話に出るまでもありませんでした

次回からは本格的にリーンボックス編そして・・・また出てきたゼロハートそしてある一つの質問

『モンスターの存在意義ってなんだと思う？』

もうネタばれてきなこと書いてちゃってますがもうどうにでもなれですでは次回でまた会いましょう！

それは必要なのか？（前書き）

なんか誤字ありそう・・・あつたら報告お願いします

それは必要なのか？

「こんにちは」

紅夜が最初に向かったのは協会だったベールと会いたい気持ちもあつたが自分がない間に厄介なモンスターが現れたとかそんなことがあれば大変だ

「・・・おお、帰ってきたかコウヤ君」

そうまるで小父のように紅夜を招きれる中年の男性は『イヴオワール』といいこの協会の教院長
ベールと同じくとてもお世話になった一人だ

「久しぶりですイヴオワールさん。自分の不在になにか困ったことはありませんでしたか？」

「いや、とくに変ったこと無い。これもグリーンハート様の守護と君の活躍のおかげだよ」

最後のハハハと笑いながら紅夜の肩を数回たたく

「そうですか恐縮です。ベー・・・グリーンハート様はいますか？」

「グリーンハート様は部屋に居りますよお会いになりますか？」

「できれば」

「そうですか・・・宣教師殿はいますかな？」

「はい、・・・おや貴方は？」

イヴオワールの呼び声に一人の若い女性が出て来る

「おやこちらの方は？」

「零崎 紅夜。『黒閃』という名で呼ばれています」

「！そうですか貴方がかの有名な・・・」

「宣教師様申し訳ありませんが私はこれから会議に出席しなければならぬのでコウヤ君をグリーンハート様のお部屋に案内してください」

「わかりました」

「・・・コウヤ君、分かっていると思うが」

「・・・分かっています失礼のないようにですよね？」

「ああ、その通りだ」

短くイヴオワールと会話した後

彼は協会の中へ消えていった

「では、ご案内させていただきます」

「わかりました道中よろしくお願いします」

そして紅夜とコンベルサションも協会の中へ消えていった

「失礼していいか？」

とくにコンベルサションと会話することはなくベールの部屋に到着
コンベルサションは仕事があるとかないとかで先に帰って行った

いつものようにドアを三回ほど叩き返事を待つ結果は無視

耳を傾けばこれもまたいつものゲーム音

どうやら聴こえていないみたいだ

「はい、入ります」

とりあえず部屋に入る

返事は無かったが返事がなくて30秒は出て来なかったらゲーム
をやっているか寝ているかどうかこの協会では暗黙の法則が存在
する

「帰って来たぞベー・・・」

「や、辞めてくれ俺は男だ・・・」

「男だろつが関係ない。お前は俺の所要物だ・・・お仕置が必要
だな」

『う、うわあああ!!』

さて、俺が見たのを簡単に説明しよう息荒くテレビの場面にくぎ付けなのは間違いなくこの地の守護女神グリーンハート様だ

やっている内容は恐らく18禁のゲーム(多分BL&凌辱系)いろいろヤバアイCGが綺麗に表示させ禁断の交わりが今行われていた

「……部屋間違いました」

パシッ!

すぐに身体を反転させその場を離れようとすると袖を掴まれた

「……見ましたわね」

「……出来れば見たくなかったなあ……」

まるで昔ながらあるゾンビ殺戮ゲームのように俺の身体を離そうとしないベール

「なら仕方ありませんね……一緒にやりましょう」

「……………は
い?」

いまこの引きこもりはなんと言った?
一緒に?

この無理やり我がものしようとする主人公の行為を見届けると?
しかも異性ならともかく同姓の俺に?

「冗談ならやめてくれ・・・マジで」

「ばれちゃいました？さすがコウヤ私と付き合いお方ですね」

なんでだろう。状況が状況なのか全く嬉しくねえ

「まあ、9割本気でしたけど」

「帰らせていただきます」

チャツキ

ドアを開けようとすると頭部になにかを突きつけられる

「私の秘密を知ってそうやすやすと帰らせてもらえるとでも？」

「・・・ですね」

今度からはベールの部屋に男性注意と書いた紙でも貼ろうかと本気で思った紅夜だった

カー、カー、カー

不幸を呼ぶとされた鴉の鳴き声がある

鴉を呼ぶ原因があるとすれば今現在久しぶりに我が家に帰る一人の青年か

「・・・酷い目にあつた」

それは彼の目に出来た隈が語っていた

あの後、結局色々とゲームに付き合つて更にラステーションで何をやっていたのかお前は俺の母親か！と突っ込んでしまつほど入念に話された

特にノワールといった食事とかはもうそれはそれは恐ろしいものに豹変した

「はぁ・・・」

ようやく我が家が見えてきた読み残した本がそれなりに溜まつていた気がするが読む気力もない今日はてばやく食事を済ませとつと寝ようとドアに手を掛けた

キイイイ・・・

「!?!」

ドアノブを回したとき気付いた

自分は出かける際に鍵を閉めたはず・・・なのになぜ開いている？

「・・・どろぼう？」

とは言つてももう何日も空けた家だもつやられたらう

「今日はとことん最悪な日だな・・・」

失意に捕らわれ半開きのドアを完全に開ける
すると中からいい匂いが溢れだした

「・・・？」

自分は留守中に誰かに管理してほしいなどと頼んだ覚えも親しい
いないが友達を家に招き入れたこともない自分がここに住んでいるのはいる
ことを知っているのはこの近くの住民しか知らない

だとしたら一体誰が自分の厨房でまるで帰るタイミングが分かっ
ていたように料理する影を確認し念のためにと背中背負っている黒
曜日に手を掛けた

『やあ』

「！？・・・ゼロハート？」

純白のコートでその身を隠す

全てが謎に包まれた男なのか女も分からない存在

「俺の家でなにをやっている？何が目的だ」

『ん？一緒にご飯食べようっと思っただけね』

悪意も感じられない本当にただそれが目的のように呟くゼロハート

「本人の許可もなしにか？」

『だってその本人聞いたら断れる可能性高いもん』

隠したフード越しでも少し拗ねたような感情が伝わってくる

「・・・そうか」

これ以上話しても無駄だと悟った紅夜は漆黒のコートを壁に付けられた突起に掛け黒曜日を壁に置いた

『もうすぐで出来るよ。ちょっと待ってね』

「・・・ああ」

誰かに料理を作ってもらうなんて店で食う以外は初体験となるなんとも不思議な思いを抱きながら紅夜は椅子に腰を下ろした

『お待たせいっぱい食べてくれると嬉しいな』

「・・・作りすぎだろ」

数分も掛からずゼロハートの料理は完成した

穢れ一つもない野菜に

純粹で綺麗な魚料理に

ただ焼いてだけであろうけど虹色に輝く分厚いステーキ

なにもかも紅夜にとって見たこともない料理だらけだった

「つか、俺の家にこんな食材あったっけ？」

『持参だよ。さすがに人の家の食材を勝手に使うのは失礼でしょ？』

「確かに・・・」

間違いない一般論を突きつけられ紅夜は頭を抱えた

「・・・ところでお前は飯食う時も顔を隠しているのか？」

言ったと時紅夜はしまったと思った

自分はただ必要以上に関わりを持たないようにしているだけだが
ゼロハートの理由は知らないもしかした顔にとんでもない傷を負っ
てそれを隠すようにしているかもしれないそんな思いが渦巻いた

『ん？そうか確かにこれは失礼だね』

そついいゼロハートはフードを脱いだ

「.....」

露わになる精彩にして神々しい黄金の髪

開く光を拒絶し自らの力のみで輝く白銀の瞳

完璧そして究極に特化しこの世のものとは思えない整った貌

今ある森羅万象ですら無意味と思わせる

目に見えるゼロハート以外の物は全て穢れた物だと幻覚して見え
るほど反則的な美しさ

その存在を物に例えたとしたら

そこには『神』がいた

「見惚れちゃった？紅夜」

「……現実逃避したくなるほどな」

「そう、それは嬉しいな」

これがゼロハートの声なのかフードをとったそいつの声はまるで流れる水をイメージさせられる透き通った声だった

「それじゃ、いただくとしようか冷めちゃったら折角料理になってくれた生き物に悪いしね」

「あ、あああ」

完璧にゼロハートのペース乗せられたただ流されるだけの紅夜

「いただきます」

「い、いただきます」

全ての命に感謝の意を込め深く手を合わせゼロハートはまるでプログラムされたロボのように全く無駄のない動きでご飯を摘み口に運んだ

「~~~~~」

鼻歌を歌いながらまたひと口またひと口と含んで幸せそうに顔をっ

くる

「・・・・・・・・」

それに見習つように紅夜も口にご飯を含む

「・・・おいしい」

自然と口が動いた

美味しいそれ以外の言葉はいらないただ純粹においしい

「フフフ」

それを聞いたゼロハートはともうれしそうな表情をつくりじつと紅夜の顔を見つめたいた

「・・・何の肉だ虹色に輝く肉って聞いたこともない」

なんていつか色々なうまみがすべて凝縮された感じ？とにかく巧い

「それはジュエルミートって言ってまあ、マンモスの肉だよ」

「マンモス？聞いたことないなあ・・・」

「異世界の生き物だよ。一緒に挑んだことあったのになあ・・・忘れちゃった？」

「・・・・・・・・綺麗さっぱりな」

「それは残念だよ」

いつの間にか多すぎだろと突っ込んだ料理は俺の身体におさまっていた本当においしい料理は自然と身体の中に入っていくと聞いたことがあるがそれを身体で学んだよ・

「はい、１００年モノのコーラ水晶」

「コーラ水晶？なにそれ？」

どこからか取り出されたコルクに落とされるコーラだが見ただけに分かる一般に見るコーラとは違い
まるで自然に生まれたような感じがする

「まあ、飲んでみなつておいしいから」

「はあ・・・」

進められるがまま口に含んでみる
コーラというよりシャンパンそれかなり濃度の濃いだが味は確かにコーラの味だ・・・不思議すぎる・・・

「これも異世界から？」

「そうだよ幹見つけてそれを確保してずっと自然なままに僕が育てきたんだ」

「幹？。これ自然に出るものなのか？」

「まあね・・・ねえ紅夜そんな些細なことくらい思い出したら？」

「・・・・・・・・」

その問いに紅夜は押し黙る

「ふう、一つ質問いい？」

「・・・・なんだ？」

分かる。

確かにおれはこれを食べたことがあるかもしれないそれにこいつの顔を見たときに分かったんだ初めて見た顔じゃないとゼロハートと俺は確かに通じていたことがあると

「このゲームギョウ界に出現するモンスターの存在意義・・・・紅夜は考えたことある？」

「・・・・モンスターの、存在意義？」

考えたことがない・・・・と言えば嘘になるが疑問に思ったことなら何回もある

なぜモンスターは女神の・・・・人間の敵

倒してもどこからまた溢れだしたまた人の被害が及ぶ

「分からない。だけどモンスターがいれば誰かが傷つく」

「それはつまり存在意義はないと？」

「ああ、逆に災害に招くものに存在意義なんて必要なのか？」

「・・・・・・・・」

その言葉にゼロハートは黙った
何分、何時間経ったか分からない。

ただ外はもう闇色に染まっていることだけ

「人間的思考だね紅夜」

「・・・俺は人間だ」

突然息を吹きかえたようにゼロハートの口が動いた
人間的思考？そののなにが悪い

「それが自己暗示でも？」

「!？」

心臓を打ち抜けたような振動が迫る。

それは

それは

俺だけが知っていること

「ハッキリ言うけど僕と紅夜の付き合いはほんと長いんだよ紅夜の
考えていることぐらい・・・理解できるよ」

「やめろ・・・それ以上俺の中に入ってくるな！」

拒絶するように手を払うお前は俺を知っているかもしれないけど俺
はお前のことは何も知らない！

「僕は帰るよ今の紅夜じゃ分からないかもしれないけどもし余裕が

あれば偽神化か心理世界に行つてゆつくり考えてみるといいよヒントぐらいは得られるかもよ」

なにか言っているが今の俺は何も聞こえないなぜなら耳を塞いでいるから逃げているから

「・・・最後に紅夜はここ（ゲームギョウ界）に居ていい存在じゃない」

「!？」

前にも見た闇の扉が開かれる
それに足を踏む入れる

「お前は・・・」

「――一体何者なんだ!？」

俺の知らないこと全て知っている俺の知らない俺を知っている俺はただ・・・人助けしながらただ生きていただけなのに・・・なんでこんなにも俺の意思を乱すんだ!？

「何者か・・・まだ本名は言えないなあ・・・まあ、あえて言うならばこう改めて名乗らせてもらおうか

破壊神『ゼロハート』

それは必要なのか？（後書き）

今回も喋るだけで終わりました

うゝん只今ユーチューブでプレイを見て次回を組み立てるんですけど・・・なんでだろうラステーション編が原作で一番内容が濃いがする・・・次回どうしよう・・・これじゃ紅夜とゼロハートとの謎の関係しか書けなくなる・・・

一 欠けらのピース（前書き）

思い通りに物語が進まなくて困っています・・・どうしよう

一欠けらのピース

――紅夜はここ（ゲームギョウ界）に居ていい存在じゃない

「・・・・・・・・」

その日の目覚めは最悪だった

耳を塞いでいたはずなのにその言葉だけがいやに頭の中に残っていた

「俺が・・・なにかしたか？」

自らを問い詰めるように呟く

誰か人を殺したか？

誰か人を傷つけたか？

誰か人を困らしたか？

なにも俺はやってない俺はただ人を助けるためにモンスターを狩ったそれだけだ・・・それだけなのに

「破壊神・・・ゼロハート」

奴は最後にそう名乗った

神・・・この世界でその名が付くのは四人の守護女『神』

しゃくだがあいつの行ったことに偽りはほとんどないとしたら

あいつは俺達一般人が知らないだけの五人目の？

でも、その推測はおかしいそもそもこの世界には四つの大陸しかないそれぞれ女神たちが祀られているこの世界にそれはありえない

しそもそも本人自体が自分の事を破壊神と呼んだそれは守護とは全く異なる意味

・・・分らないどれだけ考えても答えが出ない

記憶を取り戻せばきつと・・・

「ダメだそれだけは・・・ダメだ！」

邪念を振り払う

それこそ奴の思うつぼだあいつの目的は分からないが俺が記憶を取り戻すことに願望している

それに・・・記憶を取り戻せばもう戻れない

俺が俺じゃなくなってしまうそんな確信ににたものが枷として俺の前に立ちふさがる

「俺は俺なんだ。俺のやっていることは・・・正義なんだ！」

いつものように自分に言い聞かせるそうだ俺は間違っていない

俺は正しいことをしている

誰にも咎められない

誰にも迷惑を掛けてない

誰もが笑顔であるために俺は俺の意思で道を切り開く！

「よし！行くか！！」

いつもの愛剣とコートを手に俺は外へ飛び出した

「とは、言ってもまずは朝礼だな」

気合いはあるがリンボックスでの習慣は守るため俺は協会に行きいつものように宣教師の言葉に耳を貸す

「・・・・・・・・」

とくに変った話はなく俺はこのあたりの地形・・・傭兵用の地図を開き強そうなモンスター討伐に向かう

「えっとここ「あー！！！」・・・・？」

協会の扉を開けた時、見覚えある声が聴こえた
地図から目を離してそちに目線を持っていくとそこにはネプテ
ューヌ達がこっちに指さした状態で固まっていた

「おはよう」

「あ、あはよう・じゃなくてこうちゃんもなんでここに？」

「そりゃ、故郷に帰ってきてまたモンスターが暴れてないか調べるためにさ」

「そう言えば前も言ってたわね」

「まあな、お前たちも鍵の欠片搜索か？」

「そうなんだよ！そうだこう「その質問前も言ったぞ心当たりはあるが多すぎだ」と・・・最後まで言わせてよ」

シヨボーンとなるネプテューヌをスルーしつつ俺はアイエフ達に身体を向ける

「ここはとくに自然が多しその分ダンジョンや古い塔が多くて強いモンスターがそれなりに居るから気を付けろよ」

「忠告感謝するわ。コウヤはいまからクエスト？」

「ああ、ホントこの頃モンスターが増えてきたからなきっちり退治しないと」

「こうさんは忙しいんです。でもまた良かったらまた私たちとパーティーを組んでくれませんか？」

「どうしても困った時は俺の家に来い基本に夕方頃に帰っているから。ほれ俺の家の地図だ」

この町の地図に自分の家にマークをしてコンパ達に渡す
そのさいコンパ達が頬を紅潮させたが何故だ？

「じゃ、俺は仕事があるから」

手を振りながらその場を後にする今日の依頼はルウィーのほうの年取った剣士からのクエストである遺跡に封印したモンスターが目覚めたとか聞いた限りはかなり強そうだな

―――モンスターの存在意義・・・紅夜は考えたことある？

・・・あるわけないただ災害を招くものにそんなものは必要ない
モンスターは俺たちの敵ただ・・・それだけだ

『本当にそう思っている？』

「!？」

振り向くとそこには誰もいなかった

「■■■■■■■■■■―――!!!!」

身の半分をしめるだろう巨大な口
鉤爪をはやしたいくつもの触手
赤い毒々しいうねった刃

――魔神劍

先手必勝と言わん限り地面にそつた斬撃を放つ
そのモンスター『アババイン』はそんな攻撃をものともせず無傷
だった

「様子見はなしってか・・・なら！」

腕を交差し意識を一気に無へと還す
望むのはこの世界の絶望（力）
それを吸収し自身は変革する

「『偽神k・・・』」

唱える口が止まった

また昨日言われたゼロハートの言葉が頭をよぎる

全ての答えは偽神化そして俺の心理世界にある

そんなことをゼロハートは言っていた

だとしたら無闇に使っていいのか？

この力を

シュ・・・ドン！

「ガハッ!？」

戦闘での一瞬の迷いそれは時に死をもたらす
振るわれたしなやかで頑丈な触手

まともな防御姿勢を出来ず紅夜は壁に激突する

「・・・はは、みつともねえ・・・」

心からの声だった

今朝決心を固めてハズなのに
なんて自分はだらしがないんだ

夜を紅に染める力なんて俺にはない

俺は・・・弱い

偽神化出来なければ俺はなにも出来ない

なんて無様だ

不気味に赤く光る尻尾の針見ながら俺はゆっくりと・・・

『だから記憶を取り戻しなよ』

――零旋

衝撃が走った

俺の目前まで迫ったアババインは俺が吹き飛ばされたように吹き飛ばされ壁に激突した

『相変わらずヘタレだね』

「・・・ゼロ、ハート・・・？」

閉じかけていた瞳を開けるそこには変わった大剣を持つゼロハートの姿が

『昔の紅夜は多少はましだったよ・・・まあ、女性関係は見てもらえなかったけど』

あれはすごかったよと付け足して俺と同じ視線まで腰を下げる

『見てられなくて手助けしたけど・・・もしかしてそんなに苦悩するのは僕の言葉のせい？』

「自覚、ないのかよ」

だとしたらこいつそうとうの曲者だぞ

『昔の紅夜にもそんなこと言われたなあ・・・真実は自らの道で斬

り開けっというのが僕のモットーなんだけどここの紅夜の場合はきっ
かけがないと待っても進みそうになそうだからもう特別だよ』

「————!!!」

ゼロハートが俺の頭に置こうとした瞬間背後で声にならない声が響く
ゼロハートの攻撃により顎が外れたアババインは激怒の負を込め
すさまじいスピードでこちらに迫ってくる

——魔鎌刃・斬刀

ゼロハートの大剣が瞬いた

その瞬間アババインは一刀両断させ断末魔すら響くことを許され
ず倒れた

『元々紅夜の魔神剣・斬刀は僕の魔鎌刃・斬刀をアレンジしたもの
なんだよ紅夜に武術教えたの僕だし』

・・・どうやら昔の俺はこいつにかなりお世話になっていたようだな

『代行者』

「・・・なに？」

『モンスターの意味だよ』

「・・・分からないな」

だよね」と愚図り始めるゼロハート
身体に受けたダメージはもう直った

「おまえは女神なのか？」

俺の推測が正しければ間違いなくこいつは女神かそれに準ずるものだ

「・・・紅夜は水面を鏡に使ったことがある？」

「質問の答えになってないぞ」

「まあまあ、紅夜なら解けるんじゃないかな」

「・・・あるがどうした？」

「答えはそこにある」

「・・・！！」

一つピースがハマった

水面の鏡は上から見ても自分しか映さないその奥はあまり見えない
けど逆に下から覗きこめば全てが見える

それをゲームギョウ界に当てはめば答えはもう出たも当然

「この世界にもう一つの世界が存在するのか」

『正解』さすが紅夜勘はいいね。ゲームギョウ界の裏の世界『冥獄
界』の管理をしているただ一人の神それが僕なんだよ』

「・・・」

言葉がでないゲームギョウ界にそんなものがあるなんて

『ほんとこれだけ遠回しに教えるのに苦労するよ。ネタバレは厳禁だからね』

「・・・そんなこと俺に教えてどうする？」

『ん〜駄目だ！じれったい！！僕はゲームをとっとクリアする派だからどんどんイライラしてくる！！』

頭を抱え始めるゼロハート
見た感じ自爆したっぽい

『まだ折り返し地点にも到着してないのに・・・！あの合法ロリも登場がまだだし・・・！あ〜〜！！イライラする〜！！！！』

遂には発狂し始めるゼロハートなんだかめんどくさそうな空気を感じるので黒曜日を回収ついでにインジェクトボタンを使用し脱出した

『もういいや！紅夜なら僕の名前を聞けば思い出してくれるはず！
！紅夜僕の本名は・・・？』

既に時は遅しそこには紅夜の姿は無かった

『・・・・・・バカーーーーー！！！！』

一人孤独で痛い声がダンジョンに響いた

一欠けらのピース（後書き）

やっと一つのピースがハマりました！ゲームギョウ界の裏の世界、冥獄界！そこはどんな場所でしょうか！？

そしてそこを管理するゼロハートの目的とは！？

更にモンスターの存在意義とは！？

まだまだ謎多く整理するのが大変だ〜と嘆いていますが絶対にやっ
てやる！

魔神剣：言わずと知れたテイルズ技の基本技

零旋：全体重を込めての回し蹴りかなり強力

魔鎌刃・斬刀：紅夜の魔神剣・斬刀の元になった技こっちの方が若
干速い

鳴動は突然に（前書き）

今日で二回目

近所の子供が遊びに来てM k？がやれなかった……

鳴動は突然に

「・・・・・・・・」

気付けばベットに横になっていた

冥獄界・・ゼロハートが守護している世界
なぜそんな奴が俺のことを知っている？

・・いくら自問自答しても埒が明かないなにか気晴らしにベール
にでも会いに行こうか・・

「はぁ・・・・・」

重くなった体を動かし協会の扉を開ける
ラストイションとは違う蒼天の青空の見る

自分もあれくらい一色になればならな・・・

「こんにちは」

「おお、コウヤくん。封印されたモンスターを倒したそうじゃない
かさすがだな」

協会に入ってまず会ったのは教院長アヴァールだった

まるで孫を見ているような慈悲で紅夜を褒めた

「…………倒したのは俺になっているのか」

誰にも聴こえない音量で呟いた

本当はゼロハートが倒したがそれ以外にだれもあのダンジョンに近付くものはいなかったまだ推測にしか過ぎないが多分ノールもベールもゼロハートという存在を知らないそもそも冥獄界という世界ですら初耳だ

「どうしたのかね？どこか怪我でもしたのかね？」

「いえ、大丈夫です。なにか依頼はありませんか？」

「ふむ……少し前に三人娘たちが来てね君の分の依頼も受けにいったよ」

三人……ネプテューヌ達だな十中八九

「おお、そういえばグリーンハート様がまたコウヤ君と合いたがっていたよ」

「…………そうですか。では、行かせてもらいます」

「…………本当に大丈夫かね？今日は休んだ方がよくないかね」

「グリーンハート様のお誘いを断ることこそ最悪な行為ですよ」

「…………ははは、確かに私としたものが一本とられたよ。コウヤくんの信仰心には目に余るものがあるこれからも期待しています」

「はい、ご期待にそえるようにこのリーンボックスを守ってみます」
自分でも何を言っているだろうと思う
まるで紙に書かれた言葉をそのまま読んでいるような自分に嫌悪感
を抱きながら俺は協会の奥へ入って行った

「ベール・・・いるか？」

「・・・コウヤ、どういたしましたの？」

色々ありすぎてなんだか疲れた聴こえるか分からないほどの声だった
がベールには聴こえいたらしくすぐに扉が開いた

「・・・記憶を取り戻したのですか？」

「・・・」

「ずっとそこにいても話ができせんわよ。さあ、」

導かれるままに紅夜はベールの部屋に入って行った

「冥獄界とそれを守護するゼロハートですか・・・聞いたことありませんね」

「ゲームギョウ界には女神は四人しかいないんだろ？」

「ええそれは間違いですわ」

不穏の空気が流れる

やはりベールは知らないと答えた

あいつが嘘をついているとは思えないだが・・・決定的な情報がない

「コウヤの記憶はどこまで戻りましたか？」

「・・・昔の俺は自殺志願者なみの自己犠牲だった・・・ぐらいかな」

その言葉にベールは黙った

ベールとは長い付き合いだが俺は記憶はいつでも思い出せること俺が異世界の人物だとは言ってない言っても信じてくれるか不安だったからだ

「そうですか・・・コウヤそろそろ私だけでもいいので話してくださいませんか？」

「・・・」

「正直コウヤの言うことは穴だらけですわ。・・・まだ隠しているそれとも初めから話していないことがあるんじゃないか？」

こいつはマジで心が読めるのか？いきなり核心を突いてきた

「・・・」

「少しは自分を曝け出しても罰はありませんわ。話してみなさい」

優しくそして包むように救いの手をのばされた紅夜はそこで全て話した

・自分は記憶障害ではなく自らの意思で記憶を封印したこと

・異世界から来たこと

・異世界では英雄として崇められた悪魔として恐れられて最後に殺されたこと

・ゼロハートとは親しい仲であったこと

・記憶を取り戻した場合自分が自分で居られるかとしての恐怖

・不生不死。生きることも死ぬことも許されない身体だということ

全て紅夜が悩んでいることをベールに打ち明けた

「・・・これが俺のすべてだ」

顔伏せる怖いから異体である『人間』ではない自分が

「・・・分かりました。少し驚いた内容もありましたが・・・信じますわ」

「!!--!」

ただあっさりとベールは頷いた

まるであらかじめ知っていたように

「コウヤはなんでも自分だけで背負うとする癖のようなものがある
と思っていましたわ・・・ほんとど真ん中、的中でしたわね」

ほんのりといつもの笑みを浮かべるベールに紅夜にただ黙ることしかできなかった

「でも・・・コウヤ顔を上げなさい」

その言葉に従いそつと紅夜が顔上げたとき

パンッ!!!

乾いた音が響いた

「・・・・・・・・」

自分の顔が右向き自分が叩かれたことをすぐに認識することは出来なかった

「・・・なんで自分が叩かれたことが分かりますか？」

いつものベールと違うこれは怒りの感情
なぜ彼女を怒らしたのかそれは・・・

「俺がきつと愚かだったから」

パンッ!!!

また叩かれたこんどは左に顔が向く

「わかるまで私はなんどでも叩きますわよ」

その手が震えるのが分かる

彼女の顔が今にでも泣きそうな表情になっている

「・・・いつまで自分を批判するつもりですか？」

「・・・」

批判？自分を？

・・・そうか俺は俺じゃなくてずっと俺を零にしていたのかだから
+や-のことが入ってらそれをなくそうと必死で足掻いていたんだ

「俺は・・・俺は・・・誰だ？」

「零崎 紅夜貴方の名前ですわ。この世にただひとりしかない貴方
だけの名前ですわ」

「そ・・・っか」

俺は俺だけなのか

「コウヤが誰かを幸せにしたいと思う気持ちと同じくらい私もあなたに幸せになってほしいのですわ」

俺が・・・幸せに・・・

「・・・それに知ろうと出来るのにそれをしようとなひのはただ逃げているだけですわ。コウヤには私がいますわ一人じゃないからもつと私に頼ってくださいっていいですよ私はこの雄大なる緑の大地、^{ハード}守護女神私を信仰してくれる人を守護する使命がありますわ」

「・・・いつも部屋に閉じこもってゲーム三昧の癖に・・・ハハ、ありがとうベール」

「お前みたいな奴が俺の傍にいたことが俺にとって幸せだよ」

「そうですね。それは良かったですわでは、ゲームしましょう」

「やっぱりそれか・・・」

最後が台無しになったけどありがとうベール

決心はついたまだ覚悟が足りないけどきつと前見て歩いて見せるから

その時まで待っていてくれ

パーティーの賑わいをBGMに俺達は二次元の世界へ入っていった

鳴動は突然に（後書き）

ま、正直紅夜の性格から誰かが渴を入れないと何時までもうじうじしてそうなのでベールに怒ってもらいました（キャラ崩壊してるよね（汗））

次回からは原作に混ぜていきたいな〜と思っています。ではでは

俺は正しい道を歩いているのか？（前書き）

少し少しぶります

・ ・ ・ そのですね面接やら勉強やらで手詰まり状況でして遅くなりました

休みの日はなんとかやっていきたいですが平日はもう無理かも ・ ・ ・
とりあえず頑張っていきたいと思います

俺は正しい道を歩いているのか？

真紅に支配された天空

流血が注がれた鮮血の大地

その中で一際その存在を煌かす^{あかつき}紅月

全ての生物がその世界に散り
全ての存在がこの地で消滅し
全ての生命がここで糧となる

なにもかもが血色に染まっていた

ただこの世界の主とその玉座だけが存在を許されていた

「^{チート}反則だ・・・」

ぺらぺらとページを捲る

そこには自らが経験した記憶の数々
そして自分が置いてきた力の数々が記されていた

反則には反則
力には力と

正直、昔の紅夜の戦いは今自分がしている戦いと比べれば次元が違う
たった一回の戦いで世界の命運が掛かっているレベルで今の自分なら
本当に指先一つで倒されるぐらいだ

「・・・異世界の逃亡者」

蓋を閉じた記憶から初めから分かっていたことこれほどの力を持ちながらなぜ逃げたのか世界すら変えられるほどの力を持ちながらなにかから逃げたのか

「・・・・・・・・」

昔（俺）と向きあう決心はついたけど今の俺にはそれを受け止めるだけの覚悟は無い

今見ている戦闘だけの知識の書これはまだ自分の力の詳細ぐらいしか書いてない

自分自身の記憶の書の１ページ目で紅夜は閉じてしまったその内容は『５歳、両親を殺されその濡れ衣を着らされ少年院に入居先輩の手荒い歓迎を受け左目失明、妹雪乃に全ての望むを託し脱獄実家に帰還親殺しの妹という汚名を背負わせれ雪乃は包丁による斬殺を企てたが■は生への渴望の結果返り討ち・・・』

そこまでが限界だった思い出すのは鮮血を纏った自分と血塗れにながらも憎悪を込め睨みつけて来るただ一人だけの最愛の妹・・・

「俺は・・・」

最初の１ページ目でこれだこの分厚い書のなかに一体どれだけの絶望と惨劇の歴史が込められているのだろうか

戦闘の書は黒く文字で塗りつぶされたところが数あったたぶんそこは本当の禁忌^{タブー}思い出してしまえば・・・もう戻れない

「……………」

頭痛がするこれ以上戦闘の書も見れば後戻りはできない昔使っていた大陸一つ滅ぼそうな魔法などは数々載っていた思い出せたが偽神化に関する詳細なことは後のページになるだろうだが

見れば見るほど

理解しようとすればするほど

頭痛がひどくなる

「……後戻りはない」

昔の俺はどんなに絶望があろうともどんなに苦悩しようとも絶対に諦めようとしなかった

こんなすごい奴なのかと感心してしまうほど今の自分と比べれば天のまたその先の存在だ

「それもいいか。俺は俺でいいんだ」

俺（今）で存在していいんだ

ぐるりと世界が回る裏から表に代わるように瞳は開けばいつもの
青空

「はあ、しんどい」

正直俺自身の記憶1ページめくっただけでかなり苦しい最初はその
ときの感触とか頭に身体に流れてその場で嘔吐したぐらいだ

・・・いきなり思い出す必要なんてないちよつとずつ覚悟を固めながら前に進んでいけばそれでいい

「ふぁ・・・」

いつもの天気・・・とはいかず今日は曇り
時間を確認する時刻は12時ごろ精神的疲労から休んだつもりだったがどうやら熟睡してしまったみたいだ

「今日の依頼つと」

今日は強いモンスター討伐じゃなくて雑魚の掃討だった
ちよつと新技試してみたかったところだこれはいい強敵なら多少注意しなければならぬから本来の戦いになってしまふ

外に出る光を遮断する灰色の空が広がっていた

「一雨来るのかな？」

そんなことを考えながら街中を歩く
中世の街がどこか懐かしさを抱かせ紅夜は街角を曲がった

ドンッ

「うわっ！」

「きゃっ！」

声からして女性の声がと思う声が上がる

すぐさま紅夜は手を伸ばし倒れかけた女性の手を掴む

「・・・あれ？アイエフじゃないか」

「コウヤ・・・」

そこにはどこか深刻な表情をするアイエフの姿だった

「一人で？いつものメンバーはどうした？」

「えっ・・・私は鍵の欠片の手がかりを探すために情報収集を、あの二人がいるとね・・・」

「・・・ああ、なるほど」

子守りの役は大変だと言うことだな

「コウヤはどうしたの？」

「俺はいつもの依頼だ」

「あんたも大変ね。いつも命がけでしょ？進んで危ないモンスターに挑むなんて・・・」

まあ確かに普通の人からしたら異常かただの自殺志願者かもしれないな。けど・・・

「でも倒したそのあとそれに脅かせていた人々の温かい感謝の言葉とかそれを聞くだけでも遣り甲斐がある」

「・・・あなたらしいわね」

呆れたようにため息をするアイエフ、これは今も昔も変えられない所謂お人好しだな（・・・）

「あんがと、それじゃ今日も困っている人のためにいっちょ狩ってきます」

「あ・・・」

無意識とは言え繋がれていたその手が離れた

アイエフは小さく寂しそうな声を零したが紅夜は既に街の出口へ歩んでいった

「そうだ、アイエフ」

「・・・なによ」

すぐに我を取り戻しいつものような姿勢を取り振り向くと紅夜は笑っていた

「俺の守りたい人の中にもアイエフは入っているからな・・・困った時はいつでも呼べよ」

その言葉を残し大きく跳躍する

アイエフはただその場で立ち尽くし

その数秒後小爆発するのは余談であろう

「『幸福を呼ぶは福音、不幸を呼ぶは禍音
生と死の狭間で死神は奏で続ける――』アタナシア・ゴスペル」

この世界ではない属性、光と闇の混合魔法
そして記憶によれば最高クラスの肉体強化魔法だった
偽神化モードとはいかないがパワースピード共に上昇率が高い

[.....]

はち切れるほどの剛音

それと同時に迫ってくる巨大な炎玉

「……遅い！」

肉体強化をした紅夜は電光石火の如く一気にモンスターの首元まで

の距離を殺した

「花よ散れ刹那の如く！」

——血咲満壊

その瞬きが煌いた時、花は散^{イソデ}った

「……………」

屍となったモンスターの残骸を見つめる
モンスター存在意義という言葉が頭から離れない

今倒したモンスターはそれなりの実力者であつた同業者を数人食つたほどだ

「……………まさか、な」

モンスター、人間、女神……この三つが存在するゲームギョウ界
その真理は一体どこにあるんだ？

俺は正しい道を歩いているのか？（後書き）

区切りのいいところでやめたらこんなに短くなりました・・・すいません。・・・タイトルは長い・・・

これから元々強かった紅夜君はチート化していきます

チートにならないとラスボス倒せそうにもないですし（ネタバレになるがマジコンヌではない）

MK？はブレイブ・ザ・ハートにボッコボッコにされて・・・

二人だけ

←

一方だけ攻撃される

←

どちらかが体力半分

←

回復＆攻撃

←

なぜか攻撃するのはネプギアのみ（ユニは火力が・・・）

←

死ぬ。蘇生間に合わずこれも死＆セーブしておらず

¥（＾０＾）／オワターになっています・・・かなりやり直さなきゃいけねえ・・・

アタナシア・ゴスペル：光と闇による肉体強化魔法

偽神化とまではいかないがかなり上がる。たとえばデスメガ

ネやら記憶喪失のお姫様がつかうぐらいの強化力

血咲満壊：昔の紅夜が使っていた技の一つ、その瞬きは血の花を創造しそれが散ると同時に命も散るといふかなり惨い技。人間に使ったらかなり惨いことになる

無の心の瞳（前書き）

遅れた分を取り戻そうと仕上げました
明日もいつごろになるか分かりませんが絶対更新します！

無の心の瞳

そこは牢屋だった

その中は闇が支配し自分の掌でさえ把握できないほど
その中で三人の息遣いが聞こえる

一人は沈んでよう

一人は徐々に弱っていつて

一人は後悔に頭を抱え

ただ暗黒の部屋でただ時間が過ぎるだけだった

「・・・暗いです。あれから何時間くらいたつたですか？」

疲労困憊とした声がいやに部屋のなかに響く

「今、丁度三日目くらい・・・ココまで携帯の液晶に救われたコト
はないね。こういつまでも真っ暗だと、おかしくなっちゃいそ」

携帯のライトで今の時刻を確認する

・・・この状況を作り出したのは自分のせいだ

自分を偽っていたこと

ただ自分は信仰していた女神に会いたけただったのに
どうしてどうしてこんな仲間を売るような結果になっているのだろ
うか

「ねぶねぶの体・・・毒もそのままです。体温がどんどん下がって
るです、このままじゃ・・・」

その先を伝えようとした彼女コンパの唇が閉まる

「……………ごめんなさい」

それは一体何に対して誰に対しての謝罪だったのか彼女アイエフはただ哀しい後悔の顔で頭を下げることしかできなかった

「生きてるか？……オイ」

「だ、誰です？助けてほしいです！！こ……こっ、こっ！！」

あまりの出来事の連発に精神的に限界が来ていたコンパが声をあげる

「待っている……今出してやる……！」

扉が開きそこから顔出す一人の青年

「あんたは……」

「話はあとだ。ついてこい脱出するぞ！」

青年は動けないネプテューヌを抱えアイエフ達と共に協会から出た

『……………ふん』

それを見る一つの白い影、隠されたその顔は一体どう歪んでいるのだろうか

「連れの女の子は別の部屋に寝かしておいた。医者にも診てもらっている。息もしてるから、一先ずは安心だろう」

場所は変わり青年に導かれるままに來たアイエフ達

豪華な部屋で所々には紋章やら高そうな絵などが飾られており貴族らしき高貴な雰囲気を読める

「なんで助けてくれたです？」

警戒心まるだしのコンパが青年に問う

「不信感たつぷりだな・・・それも仕方ないか。安心しろ、ちゃんと話す・・・そう可愛い顔で睨むな」

コホンと咳をつき青年は思い出すように口を開いた

「助けたのは、単純に可哀そうだったからだ。『弱気を助け強気を挫く』貴族の祖先は皆、誇り高い騎士だった」

「・・・・・・・・」

先ほど裏切られたばかりの二人は疑心暗鬼になり未だに警戒心を解こうとしなかった

「毒を盛られたり。ねぶねぶは倒れたり。急に暗い所に閉じ込められたり・・・もう自分でもよく分からないんですう！」

状況を鵜呑みにできないコンパはただ混乱の表情を見せていた

「私も今回は堪えたわ。もっと人間らしい理由を言って」

ハッキリ言えば相手は自分たちを助けることに對してなにもメリツトがない

そのことに疑問を抱いていたアイエフは青年を問い詰める

「・・・他意はない。強いて言うなら・・・協会絡みだったってトコだな。

現在、協会と貴族は仲が悪い。信仰を重んじる協会と誇りを重んじる貴族。

前々から摩擦はあったが、今回は違う」

青年ジャッドは近くあったソファに座りまた語りだす

「既に貴族は、協会……とくに教院に対して大規模な武装蜂起を計画している」

「そこに、偶然私達がいた、ってことね……」

なんとも気のいい話だが辻褄は合っているため彼女達は要約警戒心を解き腰を下ろした

「ねぶ子は？」

「意識は戻っていないですけど、脈は安定しています。ただ・・・やっぱり原因の毒ををなんとかしないことは・・・」

ネプテューヌの様子を見に行っていたコンパはアイエフが座っているソファの隣に座る

「その毒だが、もうだいぶ前のものだ。記憶を何年も遡ってやっと見つけたんだ」

ジャッドは何やら資料を取り出して二人の前に置く
二人はすぐさまその資料に目を通す

「でも、プラネテューヌの細胞兵器じゃないだけマシです。これなら材料が有れば、調査は簡単です！」

「じゃあ、材料があれば万事解決ってことね？」

二人の間に僅かだが希望が見えた・・・だが

「その言いにくいことなんだが・・・その材料が採れる森は・・・先日謎の放火によって・・・全焼した」

「・・・え」

「しかもその解毒剤の材料はその森しか採れない・・・！」

それはつまりネプテューヌはもう・・・助からない（・・・）

「そ、そんな！なんとかならないんです！？」

声を上げるコンパだがジャッドは首を左右に振った

「・・・行くわ」

だがアイエフの心は折れていなかった資料をポケットに収納し扉の前まで歩く

「ちよつと、待て人の「わかつているわよ!!!」・・・」

顔を向けずアイエフは吠えた
もしかしたら奥地のほうはまだ少しぐらい残っているかもしれない
こうなつたのは全部自分の性

「こんぱ・・・ねぶ子の看病してもしかしたらまだ残っているかもしれないから」

「・・・嫌です。専門的なことなので、私が行かないと分からないです！あいちゃんがねぶ子の傍にいてあげて欲しいです」

「・・・焼残りとかあるかもしれないな二人で行った方が見つけれ可能性があるだろうネプテューヌはこっちで看ているから」

二人のやり取りを見てジャッドが指示をだす

二人はしばらく見つめあつて一緒に扉を開けた

「本当に焼け野原ね」

肌を刺す寒さを我慢しながらやってきた

目の前には焦土と化した大地

元森だと思えないほどで本当にここは木一本の影すらない

「・・・・・・・・」

お互い何も喋らない

溢れ出そうな涙を我慢する

・・・どうしようもない絶望感が二人を襲う

『おゝゝい。こんなところで何やってんの？』

「「！？」」

突如自分たちの真上から声が聴こえた

「あんたは・・・」

アイエフ達の前にゆっくりと着陸する降る雪と変わらない色のコー
トし誰か

『子供二人がこんなところで何やってんの？危ないよ？食べられ
ちゃうよ？』

ガオーと言わん限りにポーズを決めるゼロハート

いきなりの乱入者にアイエフ達はただ呆然としていた

『なんてね♪まあ、大変だね。コンパにアイエフ』

「「!？」」

唐突に名前を呼ばれバックステップし構える二人

二人の記憶の中にこのような姿をした知り合いはいない

「あんただれ？もしかして協会からの関係者？だとしたらこんな遠方までお疲れさまね」

「敵さんでといたら私は戦いますう！」

既に戦闘態勢になった二人

だがその時ゼロハートは特にリアクションはなくアイエフ達が持っている資料を見ていた

「あ、あれ？、ない？・・・いつのまに盗ったの・・・」

『君たちがバックステップした直後だよ。よしこれならっ』と

資料を投げ捨て虚空に手を向けるゼロハート

するとその手先の空間が歪み穴らしき形に構築する

「なんですかそれ？貴方は敵なんですか？」

『ん？まあ違うよただあえて言うなら僕は世界の味方さ・・・あつたあつた』

その穴に手を突っ込みこそとなかを探し
ゼロハートが取りだしたものは自分たちが探す予定の薬草だった。
すべての種類が綺麗に入れられた袋

「!・・・それをどうするつもり?」

『どうするつもりって・・・あげるよ』

ゼロハートは袋をコンパに投げた

袋は曲線を描きながらコンパの手の中におさまった

「・・・いいんですか!？」

『まあね、ほらお友達が危ないんですよ』

いますぐでも帰りそうなコンパ
だがアイエフは眼光を鋭くした

「なんで、あんたはねぶ子が危ないこと知っているの?」

これを知っているのは協会側の人かジャッドぐらいだとしらこいつ
は何故ネプテューヌが危ないことどこで知ったのか

『そうだねまあ、分かりやすくいうならば僕は昔のネプテューヌを
知っていてそして死んでもらってはこまる・・・それだけだよ』

「!??それどういう・・・ぐっ!」

突然吹きあられる突風

あまりの風に視線を前が見えない二人

「・・・いないです」

風がおさまるとそこにはもうゼロハートの姿かたちはなかった

「・・・気になることはたくさんあるけど、今はねぶ子の回復が優先ね。行くわよコンパ」

「はいですう！」

すぐさま走り出す二人

そしてそれを上空から見守るゼロハート

「・・・ウウウウ」

「はいはい、まだだよ」

ゼロハートはポンポンとその生き物の頭を叩く

全身は約10mほどで強固な肉体に

深い緑色の鱗が輝き

その手には二つの刃

それはラステイションを襲ったドラゴンによく似ていた

「さて、いつごろ介入しようかな・・・まあ紅夜の行動によって色々変えるけどね」

突風により露わになったその瞳には一体どんな未来が見えているだ
ろつか・・・

「あれ？主人公の俺は？」

空気読めKY

無の心の瞳（後書き）

これいつごろ終わるかな・・・予定では11月頃には終わらしてM
K? やりたいな〜とか考えています

・・・なんで最終話だけはよすぐ思いつくだろうか・・・不思議だ

信じる道（前書き）

えっと・・・今回ちょっと色々やバアイところがありますがどうぞ、
はい

信じる道

「えっと・・・これがあれでこれがこれで・・・」

山のように積み重なった依頼書

こなした依頼には×のしるしを書き

こなしてない依頼書は分かるようにボックスに置いていく

「近いうちにルウィーとプラネテュー又行かないと・・・」

ルウィーは正直あまり協力性なさそうだしプラネテュー又は女神不在の性かモンスターの被害が一番多い

困った人からの悲痛の叫びが文章となりそれを読むだけで心が痛む

「また、ベールに睨まれちゃうな・・・」

あの目は全く笑っていないベールの笑顔を思い出すだけで身震いがする

「・・・それに」

気になる情報があるルウィー宛ての依頼書の中で『大剣を持った蒼色のドラゴンが夜な夜な姿を現す怖くて眠れない助けてくれ』という依頼

武器を持ったドラゴン（・・・）、ラストイションで突如襲ってきた槍を持つドラゴンを思い出すあれと同意種ならかなり危ない

「・・・これも魔王ユニミテスのせいなのか？」

一人呟き体重を椅子に掛ける

曰くモンスターの王とか

曰く全ての女神が一団と戦っても負けるとか

なにそのチートと訴えなくなるがまだそれに関しての決定的な情報がない

証拠と言えば全大陸に女神を戻って来たとかそれは魔王ユニミテスを恐れて逃げて来たとか

「いちいち悩んでも答えがなだれ込むとかないしな・俺は俺の出来ることやろう」

依頼書の中には魔王ユニミテスの信者からの警戒やらが書かれたとても正気ではない手紙の内容があったが紅夜はそれもゴミ箱に捨て黒曜日を背中に背負い外に出て行った

「「「.....」」」

路頭を暗黒オーラ全開で歩く三人

復活したネプテューヌも何故こんな風になっているのは訳がある

「黒閃は敵である可能性が極めて高い

これはジャッドとその親テュルコワーズが言った言葉だった

聞けば黒閃・紅夜は自分たちの最大の敵である教院長とは親子の

関係のように仲が良い

更に彼はこの大陸一と言ってもいいほどグリーンハートと接点がある
とどめに彼はあまり貴族側のことをあんまりよく思っていない

これだけあれば紅夜は自分たちの敵であることは否定できない所
まである

「こうちゃんと敵対しちゃうのかな・・・」

その呟きに二人はなにも言わなかった

自分達は一応中立的立場を選んだが協力することには変わらない

握られる困ったことがあったと渡された紅夜の家までの地図・・・
戦乱の事件まであと少し

「^{ハード}守護女神戦争？」

「そうです。コウヤ君」

場所は変わりそこは協会のある客室
そこには紅夜とイヴォワールだけがお互い顔を鉢合わせ
なにやら不穏の空気が漂う

「他の女神たちが仲を違えていることは知っているかね」

「ええ、まあ、・・・」

紅夜はいつものように依頼の報告をしにきたらこの途中イヴォワールに見つかり話があるとこの部屋まで連れて来られたのだ

「では、魔王ユニミテスの存在は？」

「・・・四大陸の女神が一団となっても敗れるほど恐ろしき存在・・・
ぐらいです」

「ふむ、中々知っている」

「あの・・・なんの用事ですか？」

「そうだな、コウヤ君単刀直入に言おう・・・始末してほしい者が
いる」

「始末？モンスターなら喜んでまいりますが」

「残念ながらモンスターではない相手は女神『パールハート』だ」
机に一枚の写真が置かれる

そこには間違いなく人違いではなくプラネュー又本人だった

「！！！」

「はやりその彼女とは知り合いだったか・・・」

紅夜の反応で知人であることが読めるイヴオワール

「どう・・・して？」

「わかっていてでしょう。彼女の敵国の女神だ殺せばその大陸に棲んでいた人々の守護は失われ新たな信仰者がこの大陸に流れ込んでくる」

意味が分からない

「コウヤ君の手を血で濡らすことになることは心が痛むだがコウヤ君の少しの頑張りがリーンボックスの繁栄の助けになります。・・・
・分かりますね？」

分かりたくない

「あの森が謎の放火によって燃えされた時は正直喜びましたがなんらかの誰かが手を貸したせいでネプテューヌは復活している・・・私は次期教院長はコウヤ君以外そう貴方しか居ないのです・・・とは言っても切り替える時間は必要でしょう・・・頼みましたよ」

「インボックスの聖騎士」

まるで洗脳でもするように語りかけるイヴォワール
紅夜はただ血が出るほどの力で拳を握りしめた

閉まる扉の音それと同時に窓が開く音がした

「・・・大変なこと言われたね『リンボックスの聖騎士』殿？」

窓からひよこり顔出すのは珍しくフードを脱ぎその美貌を曝け出す
ゼロハートだった

「・・・・・・・・」

たいする紅夜はなにも言わないただ下を向いていた

「何か話してもらわないと僕も困るんだけどな・・・」

紅夜が何も言わないことにゼロハートは頬を数回搔いていた

「なあ、ゼロハート・・・いや、俺の相棒だった『夜天 空』」

「!!--!--!--!」

突如前触れもなく紅夜はゼロハートの真の名を口にした

「・・・どこまで思い出した？」

「名前ぐらいだ・・・俺の戦闘に関しての記憶にお前の名前が々と載っているからな・・・」

こいつは自分で相棒とやら友達やら口にだした

自分の惨劇の歴史にそんな呼ばれる奴は限られる

つまり昔の俺とお前は一緒に闘ったりした更に言えば俺が使っている魔法は全てこいつが編み出したものだ

「・・・全部じゃないのが少し残念だな。けど一步前進！したね嬉しいよ紅夜！！」

大はしやぎする空をしり目に未だに紅夜は頭を下げたままだった

「俺の状況分かっているな？」

「うん」

ただそれだけ体で喜びを表現しようとした空は止まりただ紅夜を見つめた

「聞かせたほしいことがある」

「いいよ。紅夜が少しでも頑張ったんだから少しぐらいなら話してあげるよ」

「俺の事を一番分かっているお前なら答えられるはずだ・・・昔の俺ならどう動く」

今自分が見えるのはただ真っ黒
リンボックスが繁栄するそれはとてもうれしいことだ

だがそのためにあの笑顔を壊す？

そんなことは・・・出来るわけが・・・でも・・・

「そうだね。 ホント何万年前なら紅夜はあの教院長を選んでいたと思うでも、最近の紅夜ならあの話を持ちかけられた時点であの教院長を切り捨てていたよ」

「・・・ということだ？」

「大昔の紅夜は犠牲が少ない道を選ぶ形をとっていたその話は結局死ぬのはネプテューヌだけであってあとの人は少し窮屈を感じるけど最終的に考えれば幸せになる確率が高い」

「けど、最近の紅夜はそれを変えたまあ、大昔色々あつて自分のことなんてまったく気にしなかったんだけど要約自分自身のことを考え始めて自分のやり方はただの自己満足だとかで守りたいものだけを守り自分が正しいと決めた道をただ突っ走るそこにどんな犠牲があろうともね」

二回に分けた長文を言い切った

そして空はただ窓に手を掛け紅夜の返答をまった

「俺には・・・どっちも正解で間違いであると思っている」

犠牲が少ない方を選び皆を幸せにするか

犠牲が多くとも自分の助ける者を守り通すか

どちらも正解、不正解であるあんで自分には分からない

「でも、俺は・・・」

「……力が欲しいでしょ？」

先読みし空は口を開いた

「どっちの道にしても結局は力がないと何も守れないからね」

そうだ

誰かを守るためならどんな禁術にでも手を染めたのが昔の零崎
夜の共通点 紅

「顔を上げて紅夜」

左右の手で紅夜の頬を触る不思議な甘いにおいが誘惑する

「ん……」

「!？」

顔を上げたその時

空の顔が目の前にあった

唇から感じる柔らかくてしっとりとした感触

支配するように自分を包む黄金の髪

「~~~~~!!!!」

今自分の唇が空の唇が一体になっていること気付くことに紅夜は数
秒の時間を要した

「ん、くちゅ、うづ、ぴちゅ、くにゃ」

必死で突き離そうとする紅夜
だが自分たちの体制は一度として変わることはない

「!!!!」

熱い体中が熱い

まるで全身の血管が沸騰でもしているかと思うほどの熱が紅夜を襲う

「ぷはっ・・・」

要約離れた二人の唇

銀色の糸が二人の間に引く

「昔紅夜が使っていた力を一部返したよ。どう使つかは紅夜だし・・・
・おい聴こえている?」

ぺしぺしと紅夜の頬を叩くが無反応

顔を覗くとアニメでよくありそうな形で紅夜は目を回していた

「あれ?やりすぎた?・・・まあ久しぶりにおいしい物いだいた
からいいか、じゃね紅夜」

手を虚空に向け空間が歪むそれに空はそれに入っていき姿を消した

紅夜は一体どの道を選ぶのかそれはもしかしたら空だけが知っている
かもしれない

信じる道（後書き）

・・・これ18禁行ってないよね
書いててなんと頭を抱えたけど・・・大丈夫・・・だよな？

これが俺の道（前書き）

カッコいい紅夜をつくりだしたくて書きました後悔はしてません！

これが俺の道

「……俺の初めて……」

暗くなつた路頭にとぼとぼ歩く

一応俺も少しぐらいは恋愛小説のようにお互いの同意でお互いの意思で……のがよかったな……とか思っていた時期はあった

昔はどうかしらないがこの零崎 紅夜、ファーストキス奪われちゃいました

「うううう……空め今度会つたらボツコボツコしてやる……！」

唇にかすかに残る温かさにどうしようもない気持ち

今の自分の表情はさぞおかしい顔になっているだろう

我が家が見えて来る

とりあえず今日は寝よう

これ絶対優先事項なにかあろうとも俺はもう寝てやる！

不貞寝とはこの事かと思ひながら紅夜は寢床に飛び乗り静かに寝た

「・・・昨日はなににもなかった。昨日はなににもなかった」

大事なことなので二回呟きました

いつものように朝食を食べながら紅夜はこれからのことを考えていた

「まず断ろうか」

確かにネプテューヌ・・・『パールハート』亡きものにすればこのリンボックスに繁栄が起るかもしれないけどそれをしたところで自分は納得がいかないそんなことをして手に入れた栄光に意味ない

次期教院長とかリンボックスの聖騎士とかそんな富にも興味は無い

「・・・『来れ』」

ただ一言呟いた

それと同時に自分の手元に黒曜日が姿を現す

記憶が一部戻ったことで更に高位の魔法が使えるようになった紅夜は黒曜日に来るではなく転移の魔法を掛けることに成功したそうすることですぐに黒曜日が手元に召喚されるようになっている

「・・・『来たれ』」

もう一度言霊を唱える

それと同時に紅夜の周囲に昔紅夜が使っていた武器が召喚される

「・・・」

見るだけで分かるこの武器達には数えきれないほどの生命を斬ってきている

血色に染まった刃達は錆びることなくまるで殺すだけのためにこの武器そのものが生きてそして殺すことが存在意義のように鼓動しているそんな幻想すら浮かぶほどのこの武器達は恐ろしく禍々しい

「そうだよな・・・」

まるで自分に言い聞かせるように呟く

最初に一番最初に思い出した昔の紅夜が言った言葉

――暴力による殺戮それが夜を紅に染める俺だけに許された力

そう零崎 紅夜はただ殺すことしかできない
でもどんな力も扱いようによればそれは人々のためになる
それを自分は理解した

「さてつと、ネプテューヌ達に協力しますか」

どこいるかは分からない
けど・・・今の気持ちはとても清々しかった

「さて、ここは昔使われていた古い交易路だが。現在は新しい貿易路が出来てモンスターの徘徊する危険な道となっておる！！」

雪が降る山ので一人のおっさんの元気のいい声が響く

「我々は協会に対し、武装蜂起を企てている！　そしてそれには大量の武器が必要なのだ！」

「それらを協会に悟られずにこっそり運ぶにはこういった人が通らない道の方が都合がよい」

テンションの高いもしかしたらネプテューヌ以上じゃねえ？と思うアイエフとコンパ

「と言うことで。君たちにはこの辺りのモンスターを片っ端から倒しておいてもらいたい。頼んだぞ！」

ガツハツハ、ととても貴族とは思えない笑い声で帰っていくそのテュルコワーズの後ろ姿を見ながら息子もあなかなと思ったりしていた

「それじゃ行きましようか」

「うん・・・」

「はい・・・」

また三人だけにはなればまた重い雰囲気

好きな異性を相手にしないといけないとはなんと惨い現実だろうか

――いつもの元気はどうした？

「えっ？」

風に乗り一人の呟きが聞こえた

「どうしたのよねぷ子」

ネプテューヌの異常に気付きアイエフは足を止める

「・・・声が聴こえたの」

「声？いーすんさんですか？」

「うんん、こうちゃんの声」

複雑な思いだった今自分達は協会側の目からのがれるためにこんなところにいるのに

「・・・気にしてもしかたがないわね」

「もしかしたらこうさんとちゃんとお話したら味方についてくれるかもしれないです」

「・・・そうだね。きっと分かってくれるよね」

「話の内容によるかな」

・・・あれ？聞きなれたことがしたがそれはありえないこと

「番号、1」

「2」

「3」

「4」

ゆっくり4と言った方向に向くとそこには

「よっ
っ」

笑顔で手を上げる紅夜の姿だった

「「ええええー！?!?」「」」

三人の驚いた声が雪崩のように高い声だと思ったのは紅夜だけだった

「いろいろ、大変だったんだな」

四人はとりあえずそこから離れて落ちつける場所で腰を下ろしていた

「・・・知っているの？」

「毒殺の件だろ？・・・ごめんな気付いてやれなくて」

もし訳なそうに頭を下げる紅夜

「えっと、こうさんは味方・・・なのですか？」

「うゝんそこはまだうなずけないけどお前たちが心配でなこうして探しにきたわけだ」

「心配？」

「俺は教院長からネプテューヌを殺してこいと依頼されたのさ」

「「「!!!」」」

その言葉と共にネプテューヌ達は戦闘態勢にとる

「……敵対心をもたれるのは当たり前・・か」

対する紅夜なんも構えようとはしなかった
ただそのままの体勢でネプテューヌ達を見た

「……ごめんな困っている時助けにいけないくて」

「……こうさんはねぶねぶをどうするつもりですか？」

「どうしようもないよ」

そこでようやく重たい腰を上げた

「もしネプテューヌが俺にとって全くの他人だったら俺はもしかしたらネプテューヌをーっしていたかもしれないけど俺はお前たちを見てお前たちのいいところとか見てしまった」

「その笑顔を守りたいと思ったんだ。あっちからしたら俺は裏切り者扱いになっちゃうけど」

「……それでもいいや俺はお前たちを守りたいんだから」

富とか立場とか全てを紅夜は捨てた

もうあの家に戻るつもりはないもしかしたべールとももう会えないかもしれない

それでもそれでも……これが俺が決めた道だから

カランっ

三人の武器が手から離れる

そして無防備で紅夜に抱きついた

彼は零崎 紅夜は彼女たちのために帰る場所を捨てたのだ

泣く泣く彼女たちの頭を撫でながら紅夜は雪降る景色を見ながら微笑んだ

これが俺の道（後書き）

うん。これで完全完璧に三人のフラグは立ちました。

紅夜君の言ったことつてもうプロポーズと変わらないよねあなたに
添い遂げますみたいな感じだね

リーンボックス編はもうすこし続くとありますがよろしければ付き
合ってください。ではでは

謎のドラゴン（前書き）

タイトルのまんまです

謎のドラゴン

——紅夜ってさあ、後悔はしても絶対に懲りないよね？

そんなことを言われた記憶がある声からしておそらく空だろう

うつすらと見えるのは広大な自然の中でポツツリとあったロイヤル
な椅子と机

ただ二人は雄大な自然を感じながらカップに入れられた紅茶に一口
飲む

——もう決めてしまった道はただ歩くしかないのに俺は迷ってし
まう……それが俺の短所だな

——そう？後悔すればその分辺りを見ていい分かれ道を見つける
事が出来るかもしれないよ

また一口

神秘的な光景だった

片方は銀を

片方は金の

髪を靡かせ

微笑みながらただ会話する

人とは思えないほど美しさを持っている二人はそれだけで一つの芸
術と言ってもいい

——だといいな

——きつと見つかるよ紅夜ならなんだって僕の相棒だもん

——ははは、ありがとう相棒

それは昔の記憶

どれほど前の出来事かは分からない
けど一つだけ分かることがある二人は共に信じあっていたこと

——千葬華桜

一瞬にしてバラバラにされていくモンスター

「『黒曜日』『終死』」

持っていた武器が一瞬にして消え紅夜の手には二つの大剣が握られる

「紅蓮よ絢爛の如く舞え」

——絶炎翔・神楽

燃え盛る火炎の息吹がモンスターを焼き尽くす

「なにあのチート……」

「もはやモンスターに同情してしまうわね」

「こうさんがいれば百人力ですう！」

ゾロゾロと蟻の大群のように群がるモンスターの数
だが紅夜は顔色一つ変えず詠唱し始める

「『乱れよ世界の天理我が望む摂理は現実へとなる——グラビテ
イ・コマンド』」

唱えた直後

地面を思いつきり蹴るモンスターの下に大きな魔法陣が展開され一
気に天空へと飛ばされた
そして紅夜の周囲に七色の魔法陣が展開される

「『紅蓮、激流、疾風、雷電、土遁、暗黒、聖光、重なりあい真の
力を解き放て——エレメント・カタストロフィー』」

記憶の中で最も紅夜が使用していた七つの属性を組み合わせた砲撃
魔法

モンスター達は断末魔すら許されず消滅した

「ふう……こんなもんか？」

「十分すぎるわよ……………」

最初から『エレメント・カタストロフィー』を使えば終わりだったが
剣術により敵を乗せ一気に襲って来たところを天空に浮かばせ一気
に全滅させる完全に力任せだが理にかなっている戦術だった

「凄いですう！」

コンパの歓喜の声で紅茶の頬が緩む
少しだけ不安要素があった自分の力を彼女が怖がらないことを

「ねえ、ねえ、こうちゃんって職業ジョブってなんなの？」

「……難しい質問だなあ」

興味本意で聞かれた質問に頭を悩ます

バツサリ言えば紅夜は何でも出来るのだ昔の紅夜が使っていたのは
双剣、鎌、弓、大剣、刀だが更に昔の紅夜は槍や銃も使っていて魔
法もこの世界に存在する属性よりも多くの魔法を使え……自分でも
このスペックに驚いている

「まあ刀剣を使うことが多いから魔法剣士かな？」

「へえ〜ねえねえ私にも魔法教えて！」

まるで好きな玩具を見つけたように目をキラキラさせるネプテューヌ
その反応に少々困った顔をする紅夜

「まあその話は今度なネプテューヌ達にはやらないといけないこと
があるんだろう？」

そうだったと手をポンとするネプテューヌ又自分達はモンスターが徘徊する貿易ルールの道を確保する所だった……とは言え殆ど紅夜が倒したが

「それじゃ報告しに行きましょう何だか疲れたわ」

「私もなんだか疲れたですう……」

疲労の表情を見せるアイエフとコンパ、思い出してみればこの頃あんまり休んでなかった気がする

先ほど大泣きした性もあるのかうとうと眠たそうに目を擦る

「……そうか、ネプテューヌ。アイエフ達のこと頼んでいいか？」

「えっ？ いいけどこうちゃんはどつするの一緒に来てよ」

不安気に紅夜のコートを引っ張るネプテューヌに紅夜は優しく頭に置いた

「ちょっと強いモンスターがこっちに向かってきているんだ今のアイエフ達じゃ巻き込むかもしれない……」

大きな雲が流れる空を睨み付ける
紅夜の直感が訴える——来る、と

「これ俺の魔力を込めたカードだもし危なくなったらこれを破れ直ぐに向かうから」

複雑な術式が刻まれているカードをネプテューヌに渡す

「……行け、早く！」

「うっ、うん！」

背中を向ける紅夜の高い声にビクツと肩を鳴らすネプテューヌ彼女はアイエフ達の手を引っ張りその場から離脱した

「『天終』」

ネプテューヌ達を横目で見届け紅夜の手に双剣が召喚される

「——お待たせ、そう言っておいた方がいいか？」

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

天空から舞い降りて来るのは深緑色の鱗をしたドラゴン
その手には巨大な双剣

その他を覗けばラステーションで見たあの槍持ちドラゴンにそっくりだった

「今度は風……ということはルウィーにいるのは氷か？」

紅夜の真っ正面に降り立つドラゴンのその手には白く輝く二つの刃
普通の人なら目の前の驚異に腰を抜かすであるだが紅夜は無意識ながら笑っていた（……）

——気づけば風は止んでいた

「——!!!!!!」

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

二つの雄叫びにも聞こえる声と共に大地を揺らす程の金属音が響いた

——六双瞬迅

六つの斬撃が一斉に放たれドラゴンを襲う

ドラゴンはその巨体にして信じられないほどの早さでそれを躲す

「ちっ、」

「■■■■■■!!!!!!」

お返しとばかりに二つの刃が降り下ろされる

紅夜は大きく後ろに飛びそれを躲そうとするが
目前に巨大な尻尾が迫る

「ぐっ!?!」

反応が遅れ直撃

最低限の防御姿勢は取れたが勢いは止まらなく木々を薙ぎ倒しながら
地面に叩きつける

「いってっ、と!」

普通の人間ならば重症間違いないが紅夜にとってはその程度の攻撃だった

倒れている間に降り下ろされる刃を避ける為に横に飛ぶ

「■■■■■■■■■■！！！！！！！！！！」

咆哮と共に木々をも吹き飛ばす弩級の暴風が吹きあられ紅夜はまるで紙のように空へ吹き飛ばされる

「■■■■■■■■■■！！！！！！！！！！」

その瞬間を狙っていたのかドラゴンは大きく羽ばたき紅夜を目の前に捉える

そして降り下ろされる刃、今度こそ完璧に当たる……と思われた刃の軌道には既に紅夜の姿はない

「まずは……その鬱陶しい翼から切り落とさしてもらおうか！！」

——鬼導滅殺刃

黒い炎を宿した天終が降り下ろされる
無様に切られる翼

そして翼を失ったドラゴンは地へ堕ちていった

「取っておき見せてやるよ！」

紅夜はドラゴンと同じように地へ堕ちていく
その周辺には幾つもの武器が展開される

「『星影に沈む黒歴史』」

唱えるように展開された武器を掴み空気を蹴り一気にドラゴンとの
距離を殺し

「『死旋が吹き荒れる咎人達の末路』」

ドラゴンに連撃を決め最後に渾身の蹴りを叩き込み地面に突き落とす

「『鮮血に滴り勝利に酔う聖剣を手にも信じる道へ突き進む
！』」

地面に落とされたドラゴンは呻き声をあげながら空中で構えをとる
紅夜を視線に収める

紅夜の幾多の武器は闇色の光になりその手に掌握していき一つの剣
を創造する

「『エクスカリバー』！！！！！！！！」

闇の極光が轟音と共に響きその存在は飲み込まれる

「世界ですら斬るその極光に吞まれて消える！！！！」

紅夜が地面に着陸したその時には既に双剣を持ったドラゴンはゲイ
ムギョウ界からその存在ごと消滅していた

「……………さて、ネプテューヌ達を追うか」

持っていた武器を消し紅夜は静寂とかした大地を蹴り飛び立った

謎のドラゴン（後書き）

強い・・・完全紅夜無双だ

・・・読み返してふと思う自分のネーミングセンスってどうなんだろうかとテイルズをイメージして考えているんだが・・・微妙だな・

次回は・・・多分修羅場

千葬華桜：血咲満壊の改良版で多数用にコンセプトになっている

絶炎翔・神楽：大きく剣を振り上げ周囲に火炎を起こす剣術

六双瞬迅：双剣で一瞬の六連撃、躲すことは難しい・・・はず

鬼導滅殺刃：黒い炎を剣に宿し大きく切り裂く技
斬られた敵は炎による追加ダメージがある

エクスカリバー：紅夜の持つ様々な武器による連撃を喰らわしたあと武器を光に変え莫大なエネルギーで敵を消滅させる紅夜の必殺技
（他にもあるよ）

強すぎる力（前書き）

どうも二日ぶりです

体育祭の準備やら面接で大急ぎです

次回の更新はいつになるのかな・・・

強すぎる力

「・・・しまった」

街に帰った紅夜が呟いた最初の言葉だった

路地裏の壁に背中を預ける

自分はネプテューヌがどこにいるのか知らない宿屋の線は低いと思
つたいいだろう

「・・・なんてね」

一人でなんとも痛いこと言っているが実はネプテューヌに渡したカ
ードは通信機能付きで大陸が違っても届くはず・・・まで試したこ
とないから微妙だけど

『おい。ネプテューヌ聞こえるか？』

『ねぶっ！？こうちゃんの声がする！？まさかこうちゃんの身にな
にかあったの！？』

あつ、そう言えばこの機能のこと喋ってなかった

『さっき、渡したカードを額に置いて念じてみる』

その後しばらくの沈黙

これ相手の声は聞くことは出来るが周囲の音を拾うことは出来ない
おそらくいまあつちは色々とこちゃになっているだろう

『えっと・・・こうかな？』

『そうそう、ちゃんとネプテューヌの声は届いているよ』

『う、うん・・・』

何故そこで吃るただ優しく語りかけたのに・・・

紅夜は自覚してないが先ほどの言葉はまるで恋人に語りかけるような甘い声であって好意を持つ男性の声ならそりやなおさらだが無自覚・・・紅夜、夜中は背中に気を付けて

『その後、ドラゴンと交戦になったけど問題なく倒せたよ。そっちの状況はどうだ？』

『ドラゴン！？大丈夫？怪我しなかった？』

人の話を聞けと思ったが心配する彼女の声に一つため息を付く

『だから大丈夫だって・・・それよりそっちはなにか困ったことあったか？』

『えっと・・・協会から謝罪パーティーの招待状が来て・・・』

『・・・だからだ？』

『グリーンハート様のからだよ。直々の署名書かれていたよ！』

『分かった。ハッキリ言えば罨の線はかぎりなく零だ』

すみでこそそやる奴じゃないからだあいつは・・・しかし他の奴

が仕掛けるなら話は別だが

『そうなんだ！分かったそれじゃ、アイちゃん達にも言ってみるよ
！！』

その後少し雑談をし連絡を切った

「・・・怒るだろうな」

暗い路地裏で苦悩が混じった声が呟かれた

その次の日あの宣教師から鍵の欠片らしきものがあるダンジョンを
案内させてもらうことになった
あれはもちろんあれは遠くでこっそり尾行だ
彼女もルウィーから来たとはいえ協会の関係者だ見つかったらネプ
テュー又達にも迷惑がかかる

それなりに距離は離れているため会話の内容は聞こえない
あの宣教師が居なくなったら合流するって感じの話になっている

「おっ・・・」

そんな思考をしていると会話が終わりコンベルサシオンはネプテューヌ達に背中を向け歩いていく

そして横目でネプテューヌが少し歩いてその時袖からスイッチのようなものを取り出した

「ちっ！」

――風皇絶空

手に持っていた黒曜日を大きく降り高速に飛ぶ真空破を生み出す放った直後に足に力を込め動く

コンベルサシオンはまるで俺がいたことが知っていたように簡単に躲しそのスイッチを押す
その瞬間ネプテューヌ達のいた頭上が崩れ轟音をとどろかしながら出口が埋まる

「危なかったじゃないか『黒閃』殿。いやリーンボックスの裏切り者と言った方がいいか？」

「裏切り者か・・・まあそう呼べる覚悟はしていたな、でっお前は何者だ？」

さっきの一撃あの手ごと切り落とす気で放ったからなただの宣教師に避けれるほどの攻撃じゃない

「仲間が生き埋めになったかもしれないのに冷静だな」

「あいつらなら生きてるよ」

なんの根拠もないただ俺はあいつらを信じているだけ

だから・・・

――魔神剣・斬刀

俺は俺のやるべきことを出来るのさ

ガキンっ！

どこからだしたのか四つの宙に浮かぶ刃があ杖でガードされた
魔神剣・斬刀が見切られた事ってことは・・・それなりに強いとい
ことだ

「さて・・・お前は何者だ？」

「フフフ・・・私は魔王『ユニミテス』の使者だ」

その言葉と共に弾き飛ばさせれる空中で体制を整えようとしたとき
いくつもの光弾が襲ってくる

「『天壤喰影』！」

紅夜の言霊と共に鎖が全ての光弾を弾くその手には自分の身体くら
いはある巨大な刃をした大鎌

「さすが黒閃この程度では無傷か」

その言葉とともにベールを脱いだコンベルサシオン

露出度が激しく黒い服装し被っている帽子には薔薇の花が付いていて体の至るところに薔薇の棘の付いたリングがある

彼女の一言で言うならばそれは『魔女』

「・・・お前が世にモンスターを解き放っているのか？」

「そうだ全ては魔王『ユニミテス』のご意思の元！黒閃・・・いや、零崎 紅夜は貴様ここ・・・で!？」

あり得ない光景が目に入っていた
喋っている魔王『ユニミテス』の使者の胸から一本の剣が生えた（・・・）

「きつ、ぎざば、はあ！」

振り向く彼女が最後に見たのは真白の存在

「邪魔だよ。死にな」

――天地乖離す開闢の星 エヌマ・エリシュ

紅い莫大なエネルギーは螺旋を描き天地そのものを切り裂いた
その射線上にいたもう彼女は消滅していた

「なっ・・・」

そして露わになる存在

黄金の装飾がされ円柱状の刀身を持つ突撃槍のような、剣のような

妙な形状をした武器をその手に掴んでいるゼロハート『夜天空』が

「討伐成功つと・・・」

その黄金剣を空間の歪みに入れ空は何事もなかったようにこちらを向いた

「どのくらい記憶戻った？」

「・・・進行率は最後にお前に出会って零だ。ちよつと事件があつてな・・・自分の事まで手が回らない」

空の瞳に感じられるのは呆れ、またかと言うように手を俺の方へ向けた

「でも、あの時よりは強くなったよね？」

「ああ、それなり・・・ならな」

「それじゃ、偽神化を使おうもつと強くなれるよ」

「あれは俺の最後の切り札だそうポンポンつか「うるさいなア」・・・空？」

変化いや豹変と言った方がいいだろう

先ほどまでの空気が死に再構築されていく

「レンタル時間には限りがあるんだだよ。でもねでもね・・・少しだけフライングしてもいいよねいいよね？」

なんだコイツ・・・俺の知っている空じゃない

「はやくはやく偽神化しなよ。今の紅夜じゃー死んじゃうよ~~~~????????????」

背筋が凍る反射的に大きく後ろに跳ぶ

空の背後にはいくつもの空間の歪みが生じそこからは先ほども見た黄金の剣や螺旋状の剣等、数十の武器が展開され空は傍にある一本の剣に手を置いた

「（ヤバイ!!!）」

自分の本能が語るあれは防御しろとさもなくば・・・死

「一・斉・解・放」

全ての武器に魔力が注がれそれぞれの武器が光に包まれる

「『偽神化（シン・クレアートル）!!!!』」

闇を纏った紅夜は負のオーラを前面に全ての武器を前に重ねた

「くっ、・・・」

紅夜の目の前は真っ白になった

「あつ・・・やりすぎた」

口をポカーンと開き空は目の前にある惨劇をただ見ていた
紅夜の力を試すつもりが近くにあったダンジョンこそ抹消してしま
った

いや正しくはリーンボックスの大陸の四割が消し飛んだ

「さすがに一斉解放はやりすぎたか。失敗失敗」

巨大な深淵が作られたその光景を前にただ空は手で頭を数回掻き小
さく舌を出す

「この場にいた不幸な女神も人間も殺しちゃった。ヤバいやババこ
れじゃ僕の計画が崩れちゃうよ」

天に向かい手を向け空はただ一言呟いた

「その時間を破壊する」

世界そのものが歪むそして全てが元に戻る
その光景は紅夜とノワールが見たあの崩壊寸前だった街は元通りに
なる時とよく似ていた

「――オオオ」

「おっ。来た来た」

空の飲み込む四つの影

ラストイション紅夜達が倒したで土遁の狂戦士『ミクトル』

同じ地で紅夜とノワールが倒した炎熱の竜騎士『ランス・ドラゴニス』

リーンボックスで紅夜が倒した疾風の竜騎士『ブレイド・ドラゴニス』

そしてルウィーに姿を隠している氷結の竜騎士『クレイモア・ドラゴニス』

全てがここに降臨した

「クレイモアはルウィーで待機していて他の奴は一時帰ろうか」

虚空へと手を向けその穴が開いた

その奥には中世が感じられる城の建物

「あ、そうだ。紅夜またね（・・・）」

その言葉を残し空とモンスターは消え蒼色のドラゴンは空中へ飛んで行った

壊されたすべての者は世界にとっての一瞬の瞬きは無かったことになった

「・・・あれ？」

いつまでたつても衝撃は来ない恐る恐る目を開けるとそこには誰もいなかった

「・・・???」

確かに自分は空の攻撃を受けたはず・・・だがその肝心な空はどこにもいない

「あれ?・・・んんん・・・」

妙に納得のいかないままだったがとりあえず偽神化を解除させ辺りを見渡す全て見たことがあるどこもおかしなものはなんも違和感は・・・ない

「えっと・・・!」

状況を整理しようとしたとき突然自分の身体のなかで何かが破れた音がした

「ちっ、こっちが優先か!」

それはネプテューヌがカードを破いたこと天壤喰影を消し新たに黒曜日をその手に持ち紅夜は埋められた出口に向かってその剣を降り下ろした・・・

強すぎる力（後書き）

ええ・・・書いていたらこんな感じになってしまいました
ちよい壊れの空がちよい本気出してしまいました

恐ろしや恐ろしや〜

あのドラゴン達の名前は少し前に決めましたがどうすつか？それなりに考えたんですが・・・

空の計画とは？まだまだ謎が多いっすね

あ、でも正直空の戦い方は金ぴか王にアレンジが加わった感じです・
・空がなぜ宝具やら使えたのか・・近々設定表を投稿しようと思えますネタバレがあるかもしれないかもしれませんがもしよければ・・・では

エヌマ・エリシユ

天地乖離す開闢の星：慢心王の宝具の真名解放で出される究極の斬撃、零距离で放つようなものじゃない

一斉解放：莫大な魔力を使つての複数同時、真名解放これは女神でさえも不可能、空だけしかできない反則技。

威力は出している宝具によって差はあるがそれでもだいたい当たれば終わり

キャラクター設定・・・その2（前書き）

一応書いてみました。どうぞ……ネタバレあるかも

キャラクター設定・・・その2

破壊神『ゼロハート』（本名は夜天 空）

全てが謎のキャラ

分かることと言えば紅夜に対してかなり溺愛していること

冥獄界と呼ばれる裏の世界を管理している

実はゲームギョウ界の正式な女神ではなく途中から冥獄界を作りパ
ラレルワールドを含めたゲームギョウ界をひっそりと傍観していた
……のだが紅夜が来てから頻繁に行き来するようになった

その正体は世界全てを司り神の中で最上位である世界神の三柱の一
つ（創造・次元・破壊）破壊神であり本人曰く他の神の名前程度な
ら全員言えるとのこと

ある特定のモンスターなら会話も出来る

マジコンネより先代・・・と言うより最初の女神とメルトモであ
りゲームギョウ界の最終進化の形について相談された時、人間の進
化そのものを操ろうと空が冥獄界を設立し裏で色々やった

だが、とある理由で先代の女神が少人間に倒されその女神は空とま
た相談しあった結果、世界をそのものをコントロール出来るものも
作っておこうかという話になった

面倒見がよく気が利き自分が友達と決めた人（神も含めて）にはと
てもくつつき甘えん坊な所を出す反面

自分が敵だと認識した者には一切の容赦はない

実はアイエフ達に向かった森を焼き払ったのは空で理由はユニミテ
スの使者がそこに逃げ込んだから

空の力は『破壊』で物質的な破壊は勿論、空間的な破壊も行える

例えばとある戦闘で街に尋常ではない被害が出たとしてもその戦闘
をした時間を破壊することで戦闘そのものが無かったことに出来る
反則技など

破壊できる物じゃなくても破壊できる空だけが使用を許された究極絶対の力

だが、これを戦闘で使うことは殆どない（理由：つまらないから）
普段使うのは武器は大剣の剣先が鎌のような曲線を描いた武器『無叡智』だが世界を司り様々な世界を回った空はパレルワールドでくくという人物が居なかった世界等から宝具を譲ってもらい使用できようになっている（好きな宝具は乖離剣エア）

厄介なことに空は自分の実力に対して一回も慢心したことがなくそれ故意外に努力派であるため最早自分で見つけた弱点は全て克服している更に長く戦い培ってきた戦闘経験も凄まじいものがある
その容姿は美しすぎて万人に綺麗と聞けば万人が一斉に頷くほど

妄想CV中原麻衣

キャラクター設定・・・その2（後書き）

チート……いや、ただの壊れキャラか。
パワーバランス可笑しいよな……これ

ごめんな(前書き)

体育祭は無事に終了！

今日は頑張って更新していきたいな・・・

今回と次回はベールファン見ない方がいいかも・・・

ごめんな

突如崩れた洞窟の天井

ネプテューヌ達はその異常事態に生存反射でぎりぎり前に飛び
なんとか九死に一生を得た

「いたたた、みんな大丈夫？」

服についた砂埃を払いアイエフは全員の安否を確認する

「なんとか〜」

「危なかったです〜」

所々すり傷はあるものの目立った負傷はなく立ち上がる三人

「・・・ダメ。がつちり埋まっちゃっている」

先ほどまで出口だった場所が岩が積み重なり自分達にはとてもじゃないがここから外に出ることは不可能だ

「どうするです。生き埋めですか？生殺しですか？生き地獄ですか？」

思わず涙目になるコンパに対照的にネプテューヌは自分の服の中から何かを取り出す

「パッパカーン！こんな時こそお助けキャラの出番だよ！」

「・・・ねぶ子なにそれ？」

ネプテューヌが取りだしたのは一枚の特に特徴がないただのカード
「これ破るところちゅんが救助に来てくれるいわばお助けカードな
んだよ！！」

「「はぁ・・・」」

詳細は知っているがネプテューヌの説明がいまいちで未だに理解薄
いアイエフ達だった

ピカッ！

「きゃっ・・・あれ？」

ネプテューヌがカードを破ろうと手を掛けたその時、白い光が一瞬
目の前に広がる

その光はすぐに消えなにもなかったようにいつもの自分達が見てい
た風景が映る

「もしかしてこうちゃんと宣教師の間になにかあったのかな？」

「・・・その可能性は高いわね。あの宣教師どこか怪しかったし」

あの宣教師ここに来る途中二三度変な方向見ていたしまるで紅夜が
居ることが分かっていて自分達から紅夜を引き離すのが目的という

可能性がある

「とにかく早くここを脱出しましょう。ねぶ子そのお助けカード？はまだ使わないようにね」

「はーい」

まだ紅夜が戦闘しているかもしれないことネプテューヌも分かっているのか不服そうにカードをポケットに押し込んだそして一同はダンジョン脱出のために足を進めようとしたその時だった

「見つけましたわよ。ネプテューヌ」

薄暗いダンジョンの中から一人の女性が歩いてきた
エメラルド色のポニーテールに宙を浮かぶ緑色のプロセッサユニット
整った貌は怒りに震えその手にはその人物である得物である大型ラ
ンス

今、彼女の姿を現す言葉があるとすればそれは阿修羅

「またねぶ子ご指名のお客よ・・・」

「ものすごく怒っているです・・・」

その迫力にアイエフ達は一步足を後ろに下げる

「えゝゝ私心当たりないよ摘み食いもあれいらいしてないよ!」

毒殺されかけてから多少ながら気を付けたしなにか誰かに怒られるようなこともしてない

「彼は・・・コウヤはどこですか?」

言葉は丁寧語だが怒りが込められ今にでも襲ってきそうな雰囲気だった

「こうちゃんの知り合い・・・?」

「ええ、私のとても大切な友達ですわ。コンベルさんが言っていた毒殺の件・・・すべて貴方達の自作自宴ですわね?協会の人に毒殺されそうになった。そう騒いで協会の権威を失墜させるのが目的・・・そしてどんな手を使ったのかは存じませんがこの地でもっとも強いとされるコウヤを自分の手先にしていずれは協会に戦争を申し込む気ですか?」

「そつ、そんなことないよ!こうちゃんは私達が危ない時助けてくれたただけだもん!」

「あんたが誰だが知らないけどコウヤから聞いたわよあの教院長にねぶ子を殺せって言われたってもう付いていけないって!」

「あいちゃんまでそんな嘘を言うのですか？確かに教院長が独断で動いたとは聞きましたがあの人がコウヤを使ってそんなことをするわけありませんわ」

「（ダメねこつちの話は全く通じないわ）」

「（協会の人だと思います。でもこうさんのことはあんまり知らないと思います）」

「（悪いのは全部あの教院長と宣教師だよ！どうしよう・・・）」

と上からアイエフ、コンパ、ネプテューヌと目で会話しこの状況をどう突破するか考える

「（やっぱり一番いいのはコウヤ自身に合わすことね）」

「（私もそれが一番だと思いますです）」

「（私も賛成！）」

解決策を決めネプテューヌはポケットに先ほど仕舞ったカードを干切った

「あいちゃんとその一般人にはそこそこですが・・・ネプテューヌ私は貴方を許さない！」

大型ランスを構え一気に突進してくる謎の女性
武器を三人も武器を構え迎撃しようとしたその時

――剛爆烈破

塞いでいた岩石が一斉に砕け散ったそこから現れたのは漆黒のコートを靡かせる一人の青年

「……コウヤ」

「ベール……か」

恐れていた再会がいまここに起きた

「……コンベルさんから聞きました……貴方が協会を……裏切った。と嘘ですよね？」

その場で急ストップし紅夜と正面を向いて口を開く

「本当だ」

地面に叩きつけた黒曜石を肩に乗せゆっくりベールに近付いていく

「何故です！？コウヤはだれよりも平和が好きなのは私が知っていまわ！なのにどうして！？」

「平和……か、なあ、ベール。平和を維持するのに犠牲はいると思うか？」

「要りませんわ私の守護する大地の平和に犠牲が必要になったことなんてありませんわ！」

「・・・知らないのか」

ただ足を進ませる

昔、まだ紅夜もこの世界に来てない時に国政院が権力を我がものとする為今のギルドの元になる異教徒集団が協会へ襲撃企てたその時、貴族と協会は結束しそれらを討伐することができた・・・っでその時何人もの人が肅正ということで殺されたのだろっ何にも人の人が巻き込まれたんだろっ

いかないとは言え結局無関係な人も犠牲になった。
そうこの平和も犠牲の上で成り立っているのだ

「コウヤ今ならまだ私が掛けあつてあげますわ。だから考え直して・・・」

「もう俺は、決めたんだもっここは俺の帰る場所じゃない俺も裏切り者いう汚名を背負う覚悟で協会から出たんだ」

紅夜は無情にもベールの訴えに耳を貸さず彼女を横切り少し距離を置きそこで立ち止った

「・・・ベールお前は俺に関わるな俺とおまえを繋いでいた物はもう無くなったんだ。いままでありがとう、そしてさようなら」

その先にはネプテューヌ達がいて紅夜は彼女たちに手を差しのばした

「行くぞ、ここは外れそうだからな」

「うっ、うん。あの、こうちゃん」

ベールは全身の力は抜けたように腰を付いたその表情は髪が邪魔を

し確認することはできない

「・・・今は何も言わないでくれ」

強引にネプテューヌ達をひっぱり紅夜が吹き飛ばし綺麗に開いた出口へ向かう

シュ・・・！

バキン・・・！

風を切り裂く音と何かを弾く音が響いた

「・・・どうして、どうして、ネプテューヌがそこに居るのです？
そこは私が・・・私が・・・！」

またボールを横切ろうとした瞬間
鋭い突きがネプテューヌを襲っただが紅夜はすぐさまそのことに気付き黒曜目でそれを弾いた

「・・・ネプテューヌ、残念ながらここまでだ。行け」

「その、こうちゃん・・・」

罪悪感に似た物がネプテューヌの中に渦巻くきつと彼女が紅夜がラストイションで言っていた帰るのを待っていてくれる人と言っのは恐らくこの人なのだろう

そして今この人と紅夜が悲しい表情をさせているのは自分の性だと

「・・・お前は悪くない」

「えっ・・・」

「誰だつて喧嘩一つや二つするさ、これは俺とベールだけの問題だ。お前は関係ないだから、ごめん。二人つきりしてくれないか？」

その言葉に少しもどかしさを感じたが自分の服を掴む二人の仲間その瞳は二人つきりと言っていてネプテューヌは小さくうなずきその場を後にした

「コウヤはネプテューヌに一体何をされたんですか？私はコウヤに幸せになってほしいんです！その為なら私はいくらでも協力しますわ！！」

「・・・お前の気持ちは嬉しい。なんだかんだ俺のこと知っているのお前だけだしな」

自分が人間ではないこと化け物と呼ばれてもおかしくないほどのレベルだということ

「・・・どう誑かされたは分かりませんが、コウヤ付いてきてもらいますわ・・・無理矢理でも！」

「じゃ俺は全力にそれに抵抗する。来い――グリーンハート！！」

そして哀しき二人は閃光となってぶつかった

ごめんな(後書き)

ごめんねベール

悪気はないんだよいつか紅夜とラブラブさせるからかんべ『レイニ
ートナピュラ!』ちよ、まっ・・・いやーーーー!!!

対決グリーンハート！（前書き）

更新！とは言ったものグリーンハートとの闘いだけなので正直短い
ですそして前話と似たような内容です
見る時はお気を付けを・・・

対決グリーンハート！

いくつも響く金属音

振るわれる大剣

受け流すランス

空中を舞い

地を駆け

二人は戦っていた

一人は自分の決めた道へ進むために

一人は自分の大切な人を取り戻すために

それはなんて悲しい戦いであろうか

「・・・・・・・・」

「はああああ！！！」

大型のランスが動く

壁を思わせるほどの連撃が紅夜を襲うがそれを全て受け流し懐を取る

体を回しその遠心力でボールに切りつけるだがすぐにその場からジャンプし躲す

「そこですわ！」

懐から銃を取り出し発砲する土の属性弾で大きな岩石となり降り注ぐが黒曜日を前に構え防御する

「――！！」

弾雨を防御した後すぐにその場から横に飛ぶそれと同時にランスが大地を貫く

「は、引きこもりでも守護女神であることは変わらない・・・か」

黒曜日を半分に分け双剣にし攪乱させるように動き回る
残像が残るほどの速さでベールの隙を窺うが

「タービュランスキャンディ！」

銃を指で回し竜巻が出るほどの超回転で連射する
全周囲攻撃に紅夜の足が一瞬・・・止まる

その瞬間をベールは逃さなかった
一気に紅夜の懷に飛び込み一撃を与える

「くっ・・・」

ギリギリとところでなんとか躲そうとしたが直撃とはいかずとも空中に放り投げられる

「これで・・・！！」

左右から高速で迫るランス、紅夜それを弾き躲し受け流すが徐々に生傷が増えていく

そして後ろに下がり勢いを付けた一撃に紅夜は壁に激突する

「う・・・ぐっ・・・」

口から中から鉄の味がする

ベールの得物はランス直撃すればそのまま防御を貫いてくる
なんとか直撃は避けたがかなり辛い

「・・・まだ、終わりではありません」

ランスの矛先を紅夜に向けベールは引き金を引いた

放たれる黄緑の極光

螺旋を描き大気を貫きその魔砲は

圧倒的なその威力を持つて紅夜を呑みこんだ

「・・・・・・・・」

ふわりと地面に降り立つベール

砂煙が立ち上る中一步また一步

進んでいき遂にその場所へと到着した

「・・・っ」

息を飲んだ

壁には巨大なクレーターがあり

その中心には大切な人がめり込んでいた

不生死と自称していた彼は死んではないけど

これは自分がやった

それがベールの頭の中を支配する

「・・・そうですね」

めり込んだ紅夜をひっぱり抱きしめる
彼の温かさを感じる

自分はこの人が・・・好きだ
ずっと、ずっと・・・傍に居てほしい

「私の部屋に紅夜を引越させましょう」

狂気にも似た笑顔で彼女は更に力を込める

・・・紅夜の力なくだれていた指が動いた気がした

「あなたはいままで十分に戦いましたわ。だからもういいんです。
私と一緒に幸せになりましょう」

この場から離れようと動くベールのその手の中には紅夜は眠っている
と思われていた。

だが紅夜の口が小さく動いた

「・・・ごめん」

―――烈破掌

気を込めた掌底をベールの腹部に叩き込めれ爆発した

「俺にはまだ、やることあるんだ・・・!」

先ほどとは立場が逆になった

満身創痍ながらも立ち上がる紅夜に対してベールは壁まで激突し呻き声を上げていた

「痛い、痛いですわ、コウヤなんで？なんで？」

「もう・・・お前は部屋に閉じこもって一生ゲームでもしてろ！！」

シン・クレアートル
「――偽神化

発動する世界の負を吸収することで莫大な力を得る禁術
その髪と瞳の色は変化し禍々しいオーラをその身に纏う

「負念魔斬刀！！！！」

悪しき者達の意味が刃を形成し振るわれる

――今にでも泣きそうな表情がベールの見た最後の光景だった

「んん・・・あれ？」

目覚めるとそこは自分の部屋だった
いつもと変わらない日常の世界だった

「私は・・・」

記憶を探すいままでも何をやってたか確か自分は

「・・・」

負けた

自分の大切な人に刃を向けあつちも刃を向けてたたかった

自分の意思は彼に届かなかった

自分の願いは彼に届かなかった

自分はもう嫌われた・・・

不思議と自分の見ているものがおぼろげになってきた

「ふぁ、ああああ」

ただ一つ開いた窓

その日の夜風は女神を癒そうとしたが

女神は自分に降りかかった現実にただすすり泣いていた

対決グリーンハート！（後書き）

結局紅夜は勝ちましたが中々苦い勝利でした

でも、負けていたら絶対物語的に終わっていたし・・・闇ベールと
いうよりヤンベール？

とりあえず次回もお楽しみに？

烈破掌：テイルズに親しい技、自分アビスは神作だったと思います。
・

負念魔斬刀：負を凝縮し刃を形成し斬る技。ベール対しては峰打ち
だったので気絶程度ですんだが・・・

カオスだ・・・（前書き）

タイトルそのまんまです。

ギャグ入れようと書いていたらこんなになってしまった・・・今回もキャラ崩壊がすごいです。どうぞ

カオスだ・・・

「あの宣教師はゼロハートが殺した」

気絶させたベールをひっそり協会にある彼女の部屋に送り紅夜はネプパーティーと例の貴族の部屋に座り状況を説明していた

「いきなり結論を言ってもらっても困るわね・・・そのゼロハートって何者？」

「・・・冥獄界・・・知っているか？」

手を組み大きくため息を付く。最初は自分だけの問題と思っていたがこれはゲームギョウ界の問題になる巻き込むことになるかもしれないが隠すよりましかもしれない

「冥獄界？ラスボスが潜伏していそうな名前の場所ね。私は知らないわ」

恐らくこのパーティーで一番知識があるアイエフも頭を傾げる。予想していたようにネプテューヌ達も知らないと言う

「あいつはそこの守護女神だ^{ハド}」

「え？女神様は四人じゃないんですか？」

当然なる疑問が返ってくる。確かに自分も最近までは女神は四人い

ると思われた

「あいつが言っていたがゲームギョウ界には裏の世界が存在しているんだ」

「うわあ、なんかラスボスじゃなくて裏ボスみたいな設定・・・」

その表現ある意味ぴたりだなあいつの実力は計り知れないし。まあ、まだ敵としてはまだ確定してないけどな

「俺も詳しいことは知らない。ただモンスターとなんらかの関係がある・・・ってぐらいだな」

よくよく考えればいつもモンスターが近くに居たからなしかも襲われずにモンスターはまるであいつを敵として認識してないように・・・

「その女神様とこうさんはどんな関係なのですか？」

「前にも言ったと思うがおれは記憶が断片的に抜けている。とりあえずあいつとは親しい仲だった・・・ぐらいしか覚えていない」

「」「親しい・・・へえ・・・」「」

ぶるっ

なんだ親しいって言ったところからネプテューヌ達の空気が変わったぞ。なんなんだこのプレッシャーは！？

「一つ質問いいですかあ？」

「ど、どうぞ、コンパさん」

拳手したコンパにへっぴり腰で構える紅夜。内心もう逃げたかったがアイエフ達の眼光が鋭く逃げるのは不可能と思ってもいい

「そのゼロハート様とこうさんってどんな関係なんですかあ？」

「すみません！全く記憶にございません！！」

その場で立ち上がり直角90度に腰を曲げる

「それじゃ、もう一つ最近、その女神様に会った？。あつ、宣教師の話は除外で」

「会いました。まだ裏切ってない時色々助言してもらいました！」

明らかに俺こいつらより年上なのになんでこんな尋問されているんだ？

「それじゃ次、なにかその女神と会った？」

・・・合ったよ。けどさだけどさ！この状況下で言えるようなこと出来ねえよ！！

「……は・や・く・」

こ、こええ、ボールでさえもあまりプレイしなかった夕闇なんとかぐらいに……

「その・・・えつと・・・ファーストキス、奪われました・・・は、ははは」

・・・・・・・・・・

バキッ

サンド側にいたコンパがなにか手で潰した。ネプテューヌがどこから刀取り出して素振り始めた。アイエフは「遂に古の封印を解く時が来たわね」とかいいいながらリボンに手を伸ばした。ヤバいほんとヤバい混沌だ^{カオス}

「「「ねえ？コウヤ」」」

「は、はいいい！！！」

「「「なんとかゼロハート様に合うこと出来ない？ちよつとOHANASIしたいの」」」

「あつちから来ないと・・・無理です。はい」

あいつ神出鬼没だからそもそも冥獄界の行き方知らないし！

「「「分かった。嘘、ついてないよね？よね？」」」

「我が命を賭けて、そのようなことは絶対にありません！！！」

だれか・・・助けてください！！！！

その頃、冥獄界では・・・

「ふう、別の世界もそうだけど雑務仕事は大変だな」

羽つきペンを置き天井にまで伸びた幾つもの書類の山を片付けなま
った体を伸ばす

「紅夜が居てくれたらもっと早く終わるのにな。まっ、仕方がない
よね」

黄金髪を揺らしながら机の引き出しを調べるゼロハート改め夜天
空は一息つく為に机に仕舞っていたお気に入りのティーカップを取
り出す

「えっと、葉っぱと水は、っと」

空間を歪ませそこに手を突っ込み探る空。その数秒後、袋に詰めた
物と丁度いいぐらいに沸騰した水を取り出す

ピコーン

「ん？また紅夜だれかにフラグ立てたのか？全くだれか重度のヤンデレに覚醒させないか不安でしかたがないよ。やっぱり紅夜には僕がついていなきゃ駄目なんだよ。色々な意味で」

パカッ

自分しかない空間の中で一人呟き、ティーカップに注ごうとしたときそれなりに丈夫なはずのティーカップは綺麗に半分に割れた

「・・・マジか。お気に入りだったのに」

しばらく空は割れたティーカップにうっくと悲しみ指を鳴らす。すると半分に割れたティーカップは元に戻った

「力使って治しても込められた思いは治せなよ・・・はあ」

今日の自分は運が悪いらしい今日はとっとと寝ようと出していた袋と水を歪む空間に押し込みティーカップを机の引き出しにしまい空はその部屋を後にした・・・

カオスだ・・・（後書き）

逃げてゼロハート！そして紅夜乙
次回から話を進めていきたいと思います。早くリールボックスを終
わらせたいなあ・・・

和解（前書き）

なんだかキャラが壊れてばっかな気がする・・・どうぞ

和解

あの子供が見たら絶対にトラウマになりそうなネプテューヌ達が止まるのを精神ライフがマイナスになるまで待ちその後解散となった。やることないし街に行こうとしたが協会側に見つかると面倒だということで攪乱魔法の一つで一般人含め誰にも俺の姿を見えないようにする正直ここまでするか他の人は思うかもしれないがいまだにいい笑顔のあの三人に関わるより少しでも無理した方がいいだろう普通……

「いい天気だな……」

なんだかんだ俺とベールと間には深淵が出来ている。誰かに相談しようかなんて思うが生憎そんな都合のいい友人はいない

「ネプテューヌもなんだか空元気しているみたいだし、はあ、辛いな」

思わず弱音を吐いてしまう自分。世の中上手くいかないものだ

「……！」

その時だった彼女が居たのはなぜこんなところにいるのか俺には分からない。けど、彼女は……まるで別人のようだった

「……………」

泣いた後のような隈が目下に黒く残り、蜂蜜色の髪はぼさぼさで、彼女からベールから生気が感じられなかった

ベールの周囲には人は避けるように歩き。いまにでも自殺しそうな虚ろの瞳でぼそぼそと彼女は呟いていた

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「っ!!」

自分を本気で殴りたかった。ネプテューヌを助ける為にそれなりの犠牲は払ったつもりだった彼女の笑顔を守ると決めたとつもりだったけど・・・俺には最初に守りたいと思った奴がいただろう・・・!

その時、俺が留めていた理性は木端微塵に砕け散り。俺はベールを無理やり捕らえ空に飛んだ

「・・・コウヤ?」

抱きしめたさい攪乱魔法を切りベールは俺の腕の中にいた虚ろな瞳には紅夜のみが映る

「ごめんな、お前のこと分かってやれなくて」

「・・・・・・・・」

状況が分かっていないのかただ紅夜を見つめる。ただベールの瞳には一つ一つ雫が落ちていく

「ーいや」

「嫌われたくないよ・・・」

紅夜は見たこの雄大なる緑の大地の守護女神ハイドでもなく、大型ランスを巧みに使いモンスターを圧倒させるグリーンハートでもなく、自分の胸の中で泣いているのはただのどこにでもいそうな一人の少女だった

「・・・・・・・・」

今の自分に彼女を和ませる権利があるのだろうか彼女をこんなにしてしまったのは自分なのに

「バカ野郎・・・！」

そうだ例え権利があるかなろうがこいつは俺の大切な人なんだ！

「う、うううう」

「・・・・・・・・」

ごめんな。俺が無熟でずっと俺を心配してくれたのにずっと俺の帰りを待っていてくれたのに俺は勝手に走って勝手に遠ざけてだけど、俺は・・・お前のことが・・・

徐々に近づく紅夜の貌、涙組むベールの貌もしっかり紅夜を見つめ・・・

そして、離れていた影が一つになった

「コウヤ・・・／＼／」

進路は普段一般人が来ることがない静かな森、魔法で風をコントロールしゆつくり着地する

「俺の決めた道が間違っているかもしれないけど俺はこの道をいくと決めたんだ。だから許せなんて言うつもりはないまた待っていてくれないかどんなことがあるうとも絶対にベールの場所に戻る」

この雄大なる緑の大地で・・・

「・・・はい」

ベールも静かに頷き紅夜の手の中からゆつくり下りる。その顔はもう先ほどと違い生き生きとしていた

「そうかよか・・・って！ベール！？なに服に手を掛けているの！？」

「安心してください。紅夜、ゲームで習いましたわこの先のイベントはもう予習済みですわ」

「ちょ、ええ！！。いや、リアルとゲームを一緒にすんな！やめてお互い大事な一線って奴があるだろう！？」

「初めてが外とは予想外でしたけど、紅夜ならどんなプレイを喜んで受け入れますわ／＼」

「人の話を聞けー！ー！！！」

はっちゃか、めっちゃか色々な物を守るため数十分の猛格闘の末、ようやくお互い落ち着きを取り戻した

「ハア、ハア、ハア・・・なんか俺、この頃、とんでもないことの連発デンプシーロールだ・・・」

このままでは絶対にリングからぶっ飛ぶぞ負けたら・・・うん、ものすごく大事なものを失う気がする・・・

「いけずですわ。私では満足できませんの？」

「いや、そういう意味じゃないんですよボールさん。もっとそう！TPOですよ！ー！！」

「守れたら私を受け入れてくれますか？」

「この小説は15禁です！限度は守りましょう！ー！！」

「・・・ちっ、今度は作者に会ったらスパイラルブレイクを決めてあげますわ・・・」

あのボールが下打ち！？なんかとんでもないこと言っているけど・・・ま、いいか（↑いいのかよオイ）

「ところでベール、協会はなにか変わったことないか？宣教師がいなくて混乱していると思うけど・・・」

「なにを言っているんですか？コンベルさんはいますよわよ」

「・・・はっ？」

今、ベールは何を言った？コンベルが生きているそんなことはありえないあいつは確かに俺の目の前で・・・消滅された

「・・・ちょうどいいベールお互いに情報交換しないか」

「・・・分かりました」

尋常じゃない俺の表情を見てベールも真剣な貌になり俺が知っているだけの貴族の情報、ベールは今の協会の情報を交換しあった

「・・・」

お互いの口は動くことはもうなかった色々な誤解が混ざったり隠ぺいされたりしてこれから起きること予想しているように

「・・・すぐに協会に帰りますわ！」

今にでも走りだしそうなベールに付いて行くように紅夜の周囲に突風が巻き起こる

「ああ、分かった俺はネプテューヌにも話しかけてみる・・・無理すんなよ」

すぐにもネプテューヌが居る貴族の家に飛ばうとする

「フフ、私を誰だと思って？」

そこには既に変身時のベール緊急時だからな。なりふり構ってられない

「・・・すまん。戯言だったな」

あの日のように自分がラストেশョンに旅立ったようにお互いは別の方向見ていた。しかし見えぬなにかに結ばれていてお互い同じ大切な物を守るため飛び立った

和解（後書き）

途中砂糖吐きそうだった。未だに恋愛経験ゼロの自分にはこの文を書くのに苦労した
次回からいよいよリーンボックス編のは大きく動く！と思うではでは！

ガシッ

ベール「どこに行こうしているのですか？」

作者「……誰にも見つからない果てしない大地さ……」

ベール「そうですか。なら手伝ってあげます」

作者「は、ハハッハハ。拒否権は？」

ベール「あるわけないでしょう」

¥ピチューーンノ

作者はログアウトしました

表と裏（前書き）

どうもこんばんわ。少し更新が遅れちゃいましたすいません
さて、ここでちょっと重要なお知らせがあります

実はいうと昨日テスト発表期間に入りまして次の週はテスト一筋なんです。更にテストが終わったらその次の週の週末は受験なんです。
・・詰んだ

なのでホント気が抜いた時とかぐらいにしか更新は難しくなってます
まいりましたちょっと人生を左右するものなんで頑張りたいと思っています

落ちつける時は10月終わりになってしまいますがそれまで待っていてくれると嬉しいです。ではでは

表と裏

「コンベルが生きているって本当!？」

協会に向かう道を疾走する四人

「世界樹の葉っぱでも持っていたの？」

「ねぶねぶ、目を開けるのです!危ないです!」

休んでいたのか目を擦るネプテューヌに後ろで注意するコンパ

「ああ、ベー……グリーンハート様にいただいた確かな情報だ」

「そうなのそれなら信頼性が……ちょっと待ってコウヤ、グリーンハート様と知りあいなのか？」

納得がいき腕を組みアイエフだったが耳を疑いたくなるような話が飛び込み紅夜を見る

その問いに紅夜は前を向き思い出す様に呟き始めた

「……昔な、俺はダンジョンに倒れていたらしいんだ。そこを偶然、通り過ぎたグリーンハート様に助けてもらってそれから右も左も分からなかった俺にずっと付き合ってくれたんだ……俺の命の恩人と言ってもいい」

「そうなの・・・所でコウヤ、ダンジョンで倒れていたって?」

「さあな、その記憶はまだ分らない」

「こうちゃんも色々苦労しているんだね」

「なに他人事のように言っているんですか、ねぶねぶも記憶がないんですよ」

・革新する紫の大地、プラネテューヌの守護女神『パープルハー
ト』それがネプテューヌの正体、はたしてそれを言うべきだろうか
教えるべきだろうか・・・俺は一部であるが記憶を取り戻している
が正直、思い出して良かったと聞かれれば間違いなく横に首を振る。
誰にも思い出したいくない記憶は一つや二つはあるならネプテューヌ
も何か合ったかもしれないその古傷を抉るようなことは出来ないこ
こは俺がやったように自分の力で思い出すのが一番・・・なのかも
しれない

「こうちゃんは記憶取り戻したの?」

「・・・一部だけならな」

「ええゝいいな。なんかコツとかある?」

「・・・自分を受け入れる・・・かな」

「コウヤ、ねぶ子、話は後よ。協会が見えてきたわ」

アイエフとの介入に口を閉める。協会の出口にはベールが手を振っているのが目に見えた

「どうだ!？」

「少し前に出かけてしまったらしいですね。場所は分かっています!」

「うし。急ぐぞ!」

「わかりましわ。さっ・・・ちょ、コウヤ」

「こっちの方が早いだろ!」

俺はすぐさまベールの腰に手を回し担ぐ所謂、お姫様だっこだ。

・・・ベールは顔を真つ赤にし口をパクパクさせるがさっきもこれしたるうなに動揺してんだ?

「ま、また走るんですか?」

「緊急事態よもしかした黒幕の姿を拝めれるかもしれないし」

「・・・いいな」

「・・・・・コウヤノノ」

おいベールさんよ。その熱い視線ちょいきついから辞めて。つか場所言つて

「――シュ！」

「■■■■オオオ・・・」

断末魔が高鳴るそれと同時に崩れていくモンスター

「相変わらず反則気味に強いわねコウヤ」

「強くなくちゃ守れないものがあるからな」

逆手に黒曜日を回し辺りを警戒するコウヤ

「「」■■■■！！！！」」

招かれたようにわんさか湧いてくるモンスターの群れに既に変身したネプテューヌ達も応戦に入る

――魔神剣・斬刀

手当たり次第にモンスターを切り裂いていく俺の後ろにはベールが居る彼女には誰にも手を出させねえよ

「エクス・・・カリバー！！！」

真闇の極光が道を一気に切り開くその先には塵芥も許さない

「■■■■■■■■オオオ！！！」

「しつこい・・・！」

一体どこから湧いてくるのか呆れるほどの数その先には他のモンスターとは違う一回りでかい狼のモンスター

「・・・私も加勢しますわ！」

「そんな、危ないですグリーンハート様。下がっててください！」

アイエフの訴えを無視し俺の隣に来るベール

「コウヤ、久しぶりにあれ（・・・）やりますわよ！」

「・・・あゝ、了解！」

「・・・アレって言うのは・・・まあ、協力技だ。ゲームやっていたベールが実戦してみたいとのことで俺が協力したんだが・・・結構恥ずかしい、てか厨二病くさい

「ネプテューヌは雑魚お願い！ベール行くぞ！！」

彼女の腕をひっぱり思いっきり飛ぶ空中で手を離し狼のモンスターの狙い構えを取る

「全力で行きますわよコウヤ！」

「出し惜しみは無しだ！」

「闇を一閃する。燐光の瞬き！」

お互いの武器に光が灯り狼モンスターは雄たけびを上げながらジャンプしてくる

「双牙烈光刃!!!」

だが俺らの方が速い既に地面に着地、そして狼モンスターには風穴が二つ形成されそのまま絶命した

「やっぱり私とコウヤのコンビネーションは世界一ですわ」

「考えた本人が言わせてもらえば・・・恥ずかしい」

とりあえずこれを真剣に考えた昔の自分をぶん殴りたかった

「――!!!」

倒したモンスターがこのリーダー格だったらしく散り散りと逃げていく・・・追い打ちはしないそんな時間は勿体ないからだ

「・・・」

「あれ？どうしたんだ三人とも」

なにか物欲しそうな目でこちらを見る三人

ガシッ

「えっ？」

疑問を抱いていると手を掴まれた三人同時にそして

「私との協力技も欲しい（です）！！！！」

羨ましいのかそれとも憧れか目をキラキラする彼女たちに少し冷や汗・・・だが、紅夜は知らない近くそう遠くない未来で協力技がブレイクすること・・・

「いた・・・」

小さく声を漏らす。岩陰に五人がひっそりと顔を出しその先の人物を睨む

「・・・」

確かに自分の目の前で殺されたはずのコンベルサシオンは腕時計と睨めっこをしていた。そしてその視線は自分達と逆方向を向いていた

「・・・コウヤの話で思わず飛び出しちゃったけどまさか倒したっていうゼロハートがグルとかありえないわよね？」

コンベルサシオンを監視していたアイエフが唐突に口を開いた

「その可能性は・・・ないだろう」

あんな何考えているか分からないような奴がそんな回りくどいことしそつにないし確かに来るタイミングはおかしいかったけどどちらかと言えば見つけたから殺しにきた（・・・・・・・・・・）そんな感じがする

「それにしてもこんな物騒なところで待ち人ですか・・・」

確かにこんな滅茶苦茶な数が襲ってくるこのダンジョンに来るなんておかしい・・・あれ？

「・・・ということだ？」

「どうしたんですか？」

「よく見てみるコンベルサシオンの服装・・・」

「！・・・なるほど」

「なるほど、異常ね」

「普通では考えられませんね」

「???」

コンパの頭の上に幾つものクエスチエンマークが浮かんでいるので紅夜はコート中に手を突っ込みメモ帳のような物を取りだした

「ここの確かダンジョンは出口、入口が二つずつしかないそして先ほどのモンスター群れ・・・なのに俺達が入ったときに戦闘の後は

一切は無かったあの数相手にただの宣教師が逃げれるわけない……
あった」

メモ帳には自分が今まで自分が行ったことがある大陸中のダンジョンの詳細情報、そしてこのダンジョンは紅夜が来たことがあるそしてそこにはこのダンジョンに生息していたモンスターが書かれていた

「このダンジョンに元々居たモンスターはさっきの戦闘では一切見れなかった……つまりいきなり環境がばつさり変わりこのモンスターが変わったか……あの宣教師がなにかしたかそのどちらかだ」

「どちらもあり得ないけど……かすかに後者が勝るわね」

まだ噂の領域だモンスターを召喚できるディスクという情報もあるしな

「！みんな、誰か来たわ」

ネプティーヌが逆方向から来る影を察知し紅夜達は身体をさらに小さくぎゅうぎゅうに詰みながらあちらの光景を見る

「……こちらの準備は整った。そちらの準備が良ければ、すぐにも決行しようと思うのだが、協会側は応戦するだろうか」

影の中から出てきたのは一人の男性だった。一般人とは思えない綺麗な服装から貴族側の人間と確信するのに時間は掛からなかった

「グリーンハート様の不在は気になるところですが、好都合かもしれませんね……あの教院長ならば、勝手に動き出してくれること

でしょう・・・」

コンベルサシオンは手を口にまで持っていていき少し考え事をする姿勢を取る

「ジョッド・・・!」

正確に彼の姿を映したネプティーンが瞳孔が大きく開く

「知り合いか？」

「私達を匿ってくれた貴族さんです・・・」

「っ・・・」

消えそうな声から呟かれる言葉に紅夜を思わず舌打ちをする

「アヴニールからの武装の輸入も完了したし、問題がなければそっちが予定通りに邸宅を襲え。協会の仕業だと分かれば貴族の方も黙ってはいないだろう」

「まあ、貴族側にはラステーションの武装がありますし、負けることはないでしょう……」

「全くだな。あっちのギルドには借りが出来た」

・・・アヴニールは他国に武装を売っていたのか？ちっ・・・あい
つの尻を拭く役目が増えた
今度会ったらもう少し説教してやる

「アイツ、ワザと貴族の家を襲わして火種を作る気か．．！」

「騙しただね．．．貴族長も私達も．．！」

唸るようにネプティーンが呟く。今の平和を．．．ぶち壊す根源がここに居る．．！！

「待ちなさい。コウヤ」

黒曜日を掴み今まさに飛び込もうとする紅夜をベールが静止させる

「あの人たちをとらえても今の状況が全て良くなるとは限りませんわここは退いて．．対策を考えましょう」

．．．．．

「あいちゃん、私は協会を押さえますわ。貴族達はそっちに任せていいですか？」

「．．．分かりました。ねぶ子、コンパ．．．コウヤ行くわよ！」

「．．．分かった（わ）（です）」

重々しく動こうとする紅夜にベールは一つ呟いた

「あなたはあなたの道を進んでください」

「つつ．．．分かった！」

地面を思いつきり蹴りネプティーンの背中を追いかける・・・ここから戦いの始まり

表と裏（後書き）

後書きです。前書きは元々後書きそれなりに書くことがあったので長文になってしまいました・・・すいません。

さて、今回出ました協力技・・・ノリです。なんかしたくなってやってしまいました（もう、ねぶパーティー全員分もう考えていたり・・・）

前書きでもありましたがこれからの更新がかなり難しくなってしまうと思います。

落ちるとヤバい度Maxなのでそっちに集中していきたいです。では

双牙烈光刃：紅夜とベールの協力技。光を纏い瞬時に交差する突進技で避けることは事実上不可能と言ってもいいほど

誰だってどこにでも行ける（前書き）

昨日偶然立ち寄った公式サイト^{ねぷ}のねぷMK^{ねぷ}?で公開されていたねぷ姉妹のダンス・・・思わず10回ぐらい連続で見てしまったぜ・・・アレは恐ろしいものだ・・・

誰だってどこにでも行ける

「なあ、アイエフ」

「……なによ」

「なんで俺達飯食ってんだ？」

「私に聞かないでよ……」

お互いに頭を抱える。コンパとネプテューヌは貴族長の自作の飯をパクついている……一応リーンボックスの危機なのになにこのゆるゆる感……

「まさか、嬢ちゃんが連れてきた人物が『黒閃』とはな。世間は狭いものなの……」

「……初めまして貴族長『テュルコワーズ』様。ネプテューヌを助けて更に匿っていたと彼女から聞きました。ありがとうございます」

紅夜自身多分初めてとなる貴族長との出会い相手は自分より年上更に位も高いため敬語で話す

「ハハハッハ、中々行儀がいい優青年じゃないか。私はもっと荒々しいイメージがあったんだが。やはり元協会側か」

「……最低限のマナーは教えられています」

テュルコワーズの言葉に一瞬眉を細めるさと受け流す

「なるほど、その目断固たる決意が宿っているの・・・気に入ったぞ、名前は・・・」

この貴族長それなりに修羅場を潜ってきていると紅夜は内心読んだ

「零崎 紅夜です」

「コウヤ君か。敬語はもういいぞどうも背中がかゆい」

「はぁ・・・」

この人、大物だなと思った紅夜だった

「そういえば貴方の息子さまであるジヨッドだがどこにいるか貴族長は知っているか？」

「あいつなら夕時に帰ると言っておったな・・・なにか合ったのか？」

紅夜の尋常ではない空気に貴族長は気付き目を細める

「実は・・・」

「ジャッドさんは裏切り者だったです！」

ゴンっ！

いきなりのコンパの発言に紅夜は頭をテーブルに叩きつけてしまった

「いきなり本題っすか！？オブラートに包んで話さないのか！？」

「諦めない・・・これが私達のパーティーよ」

大丈夫かよ。おい、元々が先行き不安だらけになったんだが・・・

「・・・どういう冗談だ？さすがに聞き受け流すことはできぬぞ・・・

」

それからコンパは全て話した自分達は騙されていたともうすぐでここが襲われることそれをきっかけに協会との戦争を引き起こそうとしていることなど・・・

「・・・中々込み入った話だがソレには大きなものが抜けておるぞ。私の息子だ誰よりもあいつを理解している・・・ジャッドがそんなことをするわけがない」

「・・・ジャッドはギルドの過激派の一員よ。過激派ギルドの目的は協会に取って変わるコト、それだけで十分理由にならない？」

アイエフも説明に介入し口を開く。その問いにしばらく貴族長はしばらく唸ることしかできなかった

ドオオオオンン！！！！

思考を中断させる爆発音が響くそれと同時に焦げ臭い匂いが鼻を刺

激する

それを見計らったようにドタバタと誰かが走る音がし力強く扉を開けて入ってくるこれを仕組んだ犯人ジャッド

「協会の襲撃だ！」

.....

館を離れ近くの森を身を隠した一同、紅夜が周囲を警戒し誰も居ないことを確認するネプテューヌ達の元に帰った

「まさか……本当に？」

「これで私達が嘘をついてないって分かったでしょー？」

コンパとアイエフが説明している間ずっと飯食っていたネプテューヌが要約口を開いた

「……いったい何の話だ？」

「聞いてたよ。宣教師の人とグルなもの、貴族を利用して協会を襲撃しようとしたことも！」

ネプテューヌの言葉に驚愕の表情を見せるジャッド

「あの場にいたというのか……！　ならもう隠すことはない、か……」

「何でこんな事を？協会を倒すただけに貴族を利用していたのか？」

「女神様に仕える協会が憎いっていうのは分かるけど、だからって他人を利用して良いと思っているの？」

「それは、貴族とて同じ事だ。――俺は十年前に協会の肅正に会い、ルウィーに逃げ延びた。貴族に追われ、命からがらルウィーへと逃げ延びたんだ」

憎悪が感じられるその瞳に紅夜は見覚えがあつた

「どういう事？　十年前の事件は国政府の反乱でしょ？　なんで肅清なんて話になるの？」

「全くだ。我々は確かに十年前に国政府とそれに組する異端者を討伐したが、決して肅清ではないぞ！女神様の仇成す国政府を撃つたまでだ、棚津に加担した覚えはない！」

話が進んでいくその中で紅夜はただその場に立ち尽くしていた

「国政府は協会の弾圧に苦しむ異端者の一団をルウィーへ逃がすために戦った！

真実は隠蔽され、貴族は国政府の反乱を抑えたとして勲章を貰い、教院は絶対的な地位を得た……」

「つまり、教院長がそこまでして事実を隠したのは――」

「自らが招いた反乱の鎮圧に貴族を利用したことを知られたくなかったから——って事ね」

バキッ！！！

「……………それが、真実か」

それは紅夜がちかくの木に拳が叩きつけ折れた音だった

「コウヤ……………」

「は、多少は覚悟していたのにまさかあの人がそんなことをするんてな……………」

吐き捨てるように呟く

「お前はまさか『黒閃』！？なんでこんな所に……………」

「裏切った……………それだけだ」

ジャッドの顔が絶望の色に染まる。まさか最強と言われる彼がこんなところに要るだなんて逃げ切る自信はない

「ジャッド、経験者からはつきり言わせてもらおう——復讐なんてやめとけ」

自らの怒りを静めるもし今この憤怒を解放してしまえば協会ごと焼き払ってしまいそうだ

「貴様に何が分かる！？両親を殺されせその理由が粛清という殺戮によって裁かれたことなぞ！」

「……………」

徐に天を見る太陽を覆い隠す灰色が広がっていた

「俺は探究心で殺された」

「……………なに？」

「ほら、酷いゲームとかでたまにさ。実際はどんなものか見たくないだろ？——それが両親が殺されたわけさ」

「ちょ、コウヤ、記憶が……………！」

「まだ完全じゃない。ジャッド確かに悲しいし憎いよな たったそれだけなんだそれだけで人は何でもできる」

ただ自分の意思さえあればなんでも…………

「今のお前は俺のやったことの一步手前だ。憎しみをもって殺すならばお前はもう人間じゃない。ただの獣だ」

「お説教か？だがな誰がなんと言おうが俺には動機がある…………だが、俺の計画は終りだ——好きにしろ」

紅夜の言葉に耳を傾けず膝を地面に付けるジャッドそれはもう殺せ

と言っているようなものだった

「……お前は自分の復讐の為に何人巻き込むつもりだった？」

「……………」

「確かに俺が復讐を果たしたときはそれはとても気持ちよかった涙が流れるほどだがなそこでやっと俺の思考は正常に戻った俺が殺すと決めた奴以外の人間も俺は無意識のうちに殺していた」

そいつの両親やら

偶然そこにいた罪の無い人

無邪気に遊んでいた子供

俺はその全てに手をだした

「……お前は自分の復讐に他人を何人巻き込むつもりだ？」

「……………ぐっ！」

歯を食いしばるジャッド自分の心が揺れた

「経験者が言うのは可笑しいがな……悲しみをただぶつけるだけじゃだめなんだ。怒りに身を任したらだめなんだ。それは人間を現実を捨てることだ」

ネプテューヌ達が一体どんな表情で自分を見ているかは分からない分からなくてもいいただ俺が進んだ闇の道はもう誰も進ませたくない

「復讐によって現実から逃げ人間を捨てることは最悪最低の行為だお前一人が復讐を決め執行するならまだしも。無関係な人間を巻き

込んでいい権利はどの誰にもありはしない!!」

「……それじゃ、俺は何をしたらいい？俺は復讐の為に今まで生きてきた。それ以外なら全てを捨てる覚悟をしてきた……！」

生きる目的を失いただジャッドは頭を抱え叫ぶことしかできなかった

「旅を……してみる」

「……………」

「この世界を見て回るんだ。綺麗な所、汚い所、それを見て仲間を探してお互い困ったことを抱えてそして一緒に乗り越える——そして笑うんだそれだけで人は生きていける」

復讐も目的とした生きた青年は前を見た手を差し伸ばされていたその後ろには光が見えた

「……………何も根拠がない夢の話だな」

「俺は光を見せてもらっただから俺は今を生きている……俺が成功例だ。夢の話じゃない」

ジャッドは服の中に手をつ込み地図を差し伸ばされた紅夜の手に置いた

「目印があるダンジョンにコンベルサシオンはいる……行けよ」

「ありがとう」

その言葉と同時に後ろに振り向く彼の目の前には光があった

「貴族長、ジャッドをよろしくお願いします」

「分かった……」

貴族長に差し伸ばされた手をジャッドは一瞬躊躇したが握りそして立ち上がった

「ネプテューヌ、アイエフ、コンパ……俺と来るか？」

それは一種の警告、自分は殺人者、だが彼女達は普通の人

「話がすごくドロドロだったけど今のこうちゃんは悪者じゃないでしょ。私は一緒に行くよ」

「……ねぶ子の言う通りだわ昔はどうとあれコウヤは改心して私達を守ってくれた信じる価値は十分にあるわ。私も付いていくわ」

「こうさんと離れるのもいやです。仲間外れのもいやです。私はこうさんを信じるです。私も一緒に行くですう！」

「そつか、じゃあ……いっちょ、コンベルサシオンの鼻でも叩き折りに行きますか！」

ネプテューヌ達は一斉に頷き深く森の中を歩いていった……

誰だってどこにでも行ける（後書き）

よしジャッド改心（？）成功！これで死亡フラグを根元から叩き割ってやったぜ！

あのキャラ髪が面白かったぐらいしか覚えてないんですけどもう一回見たら結構哀しい人だな・・・と思いました

今回はコンベルサシオンとの再戦闘、そして・・・ねぶ子と紅夜の協力技が牙を剥く！更新はいつになるか分かりませんが楽しみにしていただくと嬉しいです！

闇光の双牙（前書き）

マジュコンヌ戦。戦闘って難しい・

闇光の双牙

――十字斬月破

飛びかかってくるモンスターをただ切り捨てていく。一歩間違えば大ケガに繋がるその行為を紅夜は涼しい顔で執行していく

「コウヤ・・・」

あたりのモンスターを殲滅しモンスターの体液を掃う紅夜にアイエフが口を開いた

「今更怖くなっただっていうのも有だぞ？」

「そうじゃないわよ・・・その紅夜に光を見せた人ってだれかなっ
と疑問に思っただけよ！」

紅夜のマイナスな返事に少し怒りがこもったアイエフの声が響く

「・・・さあな」

その問いに紅夜は上を見ていて

――行こう■。過去ばかり見ても未来は見えないよ

誰かがそう言ってくれた。その言葉が残りそいつの声や顔も霧が掛かり見えないようになっていくけどとてもいい気分だ

「そうだ、お前らはこれからどうする？」

「え？」

「俺は多分お前らのパーティーに入って様な感じになっているけどリーンボックスの次はどこに行くかなと思ってな」

「えっと・・・あいちゃん次はどこにいくの？」

地理が無いネプテューヌは頭を抱えアイエフに聞く

「はぁ・・・夢見る白の大地『ルウィー』よ。そこで最後だわ」

それは都合がいいちょうどその大陸に用事がある。あの謎でつまれたドラゴンが居るはずだ

「私達の旅もゴールが見えてきたです！」

「そうだね・・・でも今はあの黒幕宣教師と一緒に倒そう！！」

おうー！と女々しく拳を掲げる彼女達を頬笑みながら眺めていた

「あ、ネプテューヌちょっと・・・」

「なにこうちゃん？」

「じつによしによ．．．出来るか？」

「ふんふん．．このネプテューヌに不可能はないよ！」

．．．．．

「お前達が来たということはあの貴族は失敗したか」

そこには居たのは間違いなく空が殺した魔女の姿をした宣教師の真の姿をした奴だった

「あれ？宣教師は？」

「宣教師の真の姿があいつだ」

ネプテューヌの疑問に間髪答える紅夜

「なるほどね姿を変化して宣教師になって影からずっと操ってきたのね」

「その通りだ．．しかしそれも黒閃の裏切りによって崩れていったがな」

クククと小汚くそいつに紅夜は黒曜目を向ける

「確かお前は魔王ユニミテスの使者だったな．．．なんで生きている？」

自分の目の前で確実に殺されたのに何故生きているそれがとても疑問に抱いていた

「ふっ・・・あの時は油断したかな・・・私は魔王ユニミテス様がいるかぎり何度でも蘇るのだ・・・ハッハハハ！！！！」

・・・ああ、なるほど

「ベタだな」

「ベタだね」

「ベタね」

「ベタです」

四人順番ずつ発音された。あまりにもベタすぎてその考えはなかった・・・うん

「五月蠅い！グリーンハートは捕らえた今の協会は教院長が動かししている！後は争いよって大陸が荒むのを待つばかりお前たちには退場してもらおうか！」

奴が持っている杖が光るそこから生み出されるいくつもの光弾が紅夜達に迫る

「ふざけんなよ・・・お前の目的がどうかしらないが。これだけは分かった・・・お前は俺の――敵だああ！！！！」

――『シン・クレアトール
偽神化』

負のオーラが光弾をかき消し紅夜はその場から消え失せる

「（速い・・・！）」

「エクスカリバー！！！！」

漆黒の光刃が形成され斬りかかるがその動きを読んでいたように避ける

「はあああ！！」

避けた場所には既に変身したネプテューヌが待機して追い込みをかけるが奴はふわりと空中に浮かんだ

「ちっ、お前魔法タイプか」

「そうだ我が力その目に焼き付けるがいい！！！！」

彼女の背後にいくつもの魔法陣が展開されそこから様々な色の魔弾が降り注ぐ

紅夜とネプテューヌはすぐに後ろに回り驟雨の如く落ちて来る魔弾を避けたり切ったり防戦一方となった

「てえええい！！」

紅夜達が奴の気を引いているうちにコンパとアイエフが奇襲を掛ける。

壁を蹴り大きく跳躍したアイエフはカタールで奴に斬り裂こうとするがすれすれで避けられ零距离で魔弾を受けてしまい地面に落そうになるが紅夜が受け止め更に二段攻撃のコンパの射撃が奴に辺り背後で展開されていた魔法陣が消える

「あ、あり「お礼は後だ！」・・・」

お礼を言おうとするアイエフに紅夜は先に吠え妨害する。両手が塞がっている紅夜に対して奴は杖に真空の刃を纏わせ突っ込んでくる

「ネプテューヌ頼む！」

「え、きゃあああ！！！」

いまだ空中に浮かんでいるため自分の思い通りに動けない反撃も出来ないのもので紅夜はそのままアイエフを後ろに投げその手に黒曜石を持ち応戦する

「確か貴様も魔法タイプだったか？」

「俺は混合だ・・・！」

偽神化によるブーストで無理な体勢から裏拳を叩きこみ地面に落とす

その近くにはネプテューヌとアイエフのコンビが待ち構えていた

「ちっ・・・」

――鬼導滅殺刃

また魔法を使いその場で緊急停止するが右は鬼炎の刃、左は息を合わせ突っ込んでくる二人
奴は左右に大きな魔法陣を展開し防御するが三人の勢いは止まることをしらない

「コンパ！」「」

「はいです！」

完全に動きを封じ込められた奴に真正面からの射撃、土の属性が込められ溶液は鉄のように固まり奴を吹き飛ばした。そして着地する三人今がチャンスとネプテューヌと紅夜は息を合わせた

「ネプテューヌ飛べ！」

肩を合わせて特攻すすぐに射程内に入れ二人は別れ奴を囲み紅夜は黒曜日で切り裂き掌底で空中に吹き飛ばす

「これが私とコウヤの奥義・・・！」

キャッチするようにネプテューヌも連撃を叩きこみまた紅夜の方角に吹き飛ばすそして彼女自身も後ろの壁を蹴り一気に近付く

「闇より剥け出せ、魔獣の牙！！」「」

紅夜もその場を跳躍し奴を挟むようになる。お互いに闇の力が剣先に集中する

「虎牙破斬・顎！！！！」「」

一分の隙もない同時の突進による斬撃、防御も間に合わず奴は杖ごと体を大きく切り裂かれた

「本番ぶつつけで成功するとは思わなかった・・・」

「フッフ、これで私と紅夜の相性が完璧なのが証明されたわね」

何を思ったのか紅夜の腕に抱きつくネプテューヌ、彼女の露出されていた胸が形を形を変えていく

「うっ、ちょ、ネプテューヌ・・・？」

「何かしらコウヤ」

晴天の青空をイメージさせる蒼の双眸が紅夜を魅了させ飲み込もうとする

元気百倍のいつもの彼女と違い冷徹でクールさが目立つその空気に紅夜は頬を紅潮させる

徐々に近づいてくる彼女の顔、埋まっていく自分の腕、全身の血液が顔に集中していく

「「なにやっていんのよ！（です！）」」

あとちょっとというところで二人の介入により二人の距離は離れた

「あ、危なかった・・・ギャップ恐ろしや・・・」

あの三人の戦闘音が聞こえ出すがそんなことはどうでもいい

「ぐっ・・・覚えていろいろ第二、第三の私が・・・」ガクッ

こちらにもまたベタ発言しているし・・・

「なによ！あともう少しだったのに！！」

「それを黙って見届けるほど私は天使じゃないわよ！！」

「そうです！ギャップ萌えなんて卑怯です！！」

あーだこーだとけんかする三人をとりあえず俺は体育座りで傍観していた・・・終わったな

闇光の双牙（後書き）

協力技・・そのですね。ねぶ子のボスの時に追加される突進攻撃みていたら以外に合うんじゃないかねえ？とか思ってた作りでした・・・もうリーンボックス編は終わりに近いです。また見てくれると嬉しいです。ではでは

虎牙破斬・顎：紅夜とネプテューヌの協力技。お互いの連撃を喰らわした後挟むように斬撃を与える技、物理攻撃の中ではトップの威力

怖い怖いよペールさん（前書き）

今回で多分リーンボックス編終了。次回はルウィーに入ってきて来た
と思っています

怖い怖いよペールさん

あの魔女を倒した後、なぜか喧嘩し始めたネプテューヌそれを眺めその数分後お互いボロボロになって戻ってきた。

とりえあず、紅夜はみんなに回復魔法で全快まで癒し一同はダンジョンから出て協会に向かった。

「・・・ウォー・・・」

思わず圧巻するしかできなかった。

そこは協会だ。だが石片やら人やらが転がっていたいてそして先に進みと協会側と貴族側の人々が全員綺麗（体はボロボロ）な平行線を作り正座していた

「分かりましたかしら？一旦話しあいの場を設けましょう。もし争いをするのならば、この雄大なる緑の大地の守護女神グリーンハートが善悪関係なしに裁断を下します・・・よろしいですね？」

「・・・イエス！ハード！！！！」

軍隊顔負けの息があった敬礼を決める人々に思わず口が引き攣る

「あの・・・グリーンハート？」

「あら、紅夜・・・それにネプテューヌ達、思ったより速かったです

わね」

こちらに万遍ない笑顔で返してくるベールだが全員が思わず一步下がる。原因と言えば彼女の持っている血の滴る槍と顔に数滴こびり付いている血痕

「あははは・・・この惨劇はなんなんだ？」

「惨劇？まあ・・・結界に封じ込まれていたんですけどなぜか途中で私を差し置いて！誰かがコウヤと！いい雰囲気になつたような感じがしましてそう思ったら力が溢れて結界を壊すことに成功したのですわ。皆さんに訴えかけて争いを止めようにも誰も耳を貸してくださらなかったので力づくで屈服させたのですわ」

「そ、そうですか・・・」

言っていることが物凄く怖いと思うのは俺だけだろうか・・・ってベールってこんな奴だっけ？

「ここでは何ですし応接室に来ませんか？そこで教員長も呼びますのできつと楽しいお話になると思いますわよ」

あのベールさんその笑顔は素敵なんですけど全く目が笑ってないですけど！？その暗黒オーラでみんな震えているんですけど！？

「素敵だなんて・・・もう、コウヤったら」

俺の知っているベールはどこに行った！？つか心読まれた！？

「私とコウヤの間に不可能はありませんわ。ではあのウザイ教院長

とOHANASIしよう」

・・・壊れている。もう色々疲れたよパト。ツシュ

手を掴まれ引きずられるように協会の中に入っていく紅夜+オマケ：
ねぶパーティー

「「「オマケってなに（よ）（です）！？」「」」

・・・・・・

協会の応接室の扉を開ければ、そこには教院長のイヴォワールが・

・簀巻きにされていた

空いている席に一同座り教院長と顔を合わしネプテューヌ達の姿を
見て教院長は声を上げる

「なぜ彼女らがココに！？　ネプテューヌは女神様の宿敵ではない
のですか！？」

「皆さんも当事者ですわ。異論が有ろうとも、私は認めません」

ベールの言葉に黙る教院長だがその視線はネプテューヌではなく紅
夜の方へ向く

「そもそも、今回の事変は協会の事実隠蔽が発端と聞きましたわ。なぜそのような……？」

「国政府の反乱は協会の恥、なので私はそれを隠蔽しようと考えました……」

そんな教院長の言葉にネプテューヌは異議がありと立ち上がる。

「嘘！ ジャッドは言ってたよ、隠そうとしたのは反乱の理由が教院の弾圧から異端者を逃がすためだって知られなくなかったからだって！」

うつ、顔を歪ます教院長に紅夜は口を開く

「その反応は、肯定だな・・・イヴォワールさん」

「答えなさい、イヴォワール」

紅夜とベールの言葉にイヴォワールは息を呑んだ後、喉を震わせ訴えるように叫んだ

「……否定はしません。異端を取り締まるのは協会の務め、女神様の風聞を汚さぬのも協会の務め！ 私は女神様のために最善を尽くした……これだけは、本当です！」

「・・・くだらねえ」

その言葉に奈落のような低い声で紅夜は呟いた

「なんだとこの裏切り者が！！！」

「くだらねって言うてんだよ！ふざけんなよ・・・お前は面子の問題だけで何人の人を殺したんだ！！！」

「ただ少し考えた方が違う者でなんも害がなくただ普通に生きていた人達を・・・！」

「グリーンハート様を信仰しない者にこの大地の者は異端者だ同じ大地に立っていることすら嘆かわしい！」

「誰にだって生きる権利はある！なのに・・・お前は！！！」

今にでも殴りかかろうとする紅夜にベールは紅夜のコートを掴む

「もういいですわコウヤこんな者の為に手を汚す必要はありませんわ」

「グリーンハート様！こんな異端者と一緒に居るのです！？こんな化物と一緒にいては・・・！」

それ以上の口を開けようとする教院長に閃光が走る。その閃光は教院長の首元ぎりぎりですまる

「・・・それ以上言うてみなさいイヴォワール・・・その時はあなたの命は私直々が裁きますわ・・・！」

烈火の如き怒りをその瞳に揺らしながら槍を突きだすベールに教院長は腰が抜けたように黙った

「今回のことは私の責任でもあるかもしれませんがね。教院長の処罰についてはまた、貴族長や協会上層部と話し合って決めましょう。」

それが最善だとネプテューヌ達は頷きその場は一時解散となった

・・・

「結局、女神とは名ばかり・・・今回のことも未然に防ごうと思えば防げたはずなのに・・・」

紅夜は教院長を連行するため一緒に退室し四人だけになった時、後悔の念を抱きながら深くため息を付くべール

思い出せば紅夜よく自分に少しでも仕事しろと言っていたことを思い出す。もしあの時大人しく聞いていたらもつと違う結末になっていたかもしれない

「後悔は先に立てないって言うけどホントだよね！でも後悔したなら次からソレを活かせば済む話でしょ？」

「・・・記憶を失っているんですよね・・・でもそんな前向きなところは変わっていませんわね。そうですね、次に活かせばいいのですわね」

「過去を見ても未来には結局糧にだけしかならない。進むべき道は自分で斬り開いていくそれが一番の選択だと俺は思う」

「コウヤ・・・」

資料らしい紙を持ちながら入室してきたのは紅夜だった

「おかえり〜遅かったけどどうしたの？」

「ああ、お前達が探している鍵の欠片だがあの宣教師なら何か知っているかなと思ってな少し調べてみたんだ」

「・・・あ」「」

「?どうしたんだ？」

「「ナンデモナイヨ・・・」「」」

言えない・・・ずっと忘れていたなんて

「おかしな奴だな・・・とりあえずあの宣教師が時折行っていたダ
ンジョンがあるんだ。行く価値は十分にあるぞ」

「なるほど、ナイスだわコウヤ」

「まあな、とりあえず色々お疲れそうだからな・・・みんながパーティーやるそうなんだ今日ももう遅いし来ないか？」

「えっ、パーティーですか？」

「ああ、なんか俺も裏切り者じゃなくてどちらかと言えばリンボックスを救ってくれてありがとうとか言われたし・・・結果オーライ？」

頭を掻きながら少し照れ気味の紅夜を見て笑みを浮かべる。皆さあ・
・今日は宴だ

怖い怖いよベールさん（後書き）

今日を持って18歳になりました。・・・中間テストとか受験とか無かったらもう少し喜べるのにな〜

蜘蛛との闘い？カットです正直めんどくさいです。はい（ばっさり言った！）

次回は少しベールと話してルウィーに上陸！・・・おれ困っているんですよだって明確な悪キャラいなしマジコンヌが適当にやるだけだし・・・どうしようマジコンヌを改心？うん大丈夫あいつは殺すつもりだから。ではでは

白き大地へ（前書き）

PV：5万突破！

ユニーク：6千突破！

皆さまこんな駄文を見てくれてありがとうございます……！！！！

白き大地へ

「あなたは行ってしまうのですか？」

「ああ、俺はやることもある」

あれから数日後、俺はリーンボックスとルウィーを繋ぐ橋に立っている。ネプテューヌ達は気を利かせてくれたのかも、先に進んでいる俺の目の前には少し涙目のベール。あれからここに残ってくれないかとベールも含めて色々な人に誘われたが俺はそれを全部断ってネプテューヌ達に付いていくことにした

「なら一つ約束してくれませんか？」

「なんでも」

「絶対に私のところに戻ってくることそれが約束ですわ」

「楽勝だ。約束しよう」

あつちの大陸にはあのドラゴンがいるなにか因縁がある俺の敵だ

「あと最後に一つよろしいですか？」

「簡単なことならな」

するとベールは突然紅夜に抱きついた

「お、おい・・・」

その行為に紅夜は思わず顔を紅潮される

「ぎゅーっとしてください」

「・・・は？」

「もう、ぎゅーっです。抱きしめてください」

そついい腰にまわした力が強くなり彼女の巨乳が押しつけられる。
紅夜はなんとか平常心を保ちながら抱きしめ返した

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

二人だけの時間が流れる空も大地も二人を見守るように静かだった

「- - - -」

「ん、何か言ったか？」

「・・・何でもありませんわ。行つてらっしゃい」

少しの沈黙の後、ベールは名残惜しそうに紅夜から離れた

「ああ、またなベール」

彼等は同時に背を向けるだがその視点はただ空を見つめお互い離れていった……

・・・

「は、はつくしょん!」

「寒い・・・寒いです・・・」

夢見る白の大地『ルウィー』自分も何度か来たことがあるがどの大陸よりとにかく寒いリーンボックスにも雪山があるがそれとは比較できないほど寒い

薄手の服を着ているネプテューヌとコンパは身体を丸めカタカタと歯を鳴らしながら前へと進んでいく。元々コート姿の紅夜は顔色一つ変えず同じコート姿のアイエフは寒そうながらも余裕をもって進んでいた

「ね、ねえ、こうちゃん」

「なんだ？」

「ご、ご自慢の、魔法で何とか、ならない？」

「うゝん、すまん。気温を何とかするような魔法は知らない」

ガーンと口を開けショックを隠せないネプテューヌに紅夜はやれやれと腕を左右に振りネプテューヌの手を取った

「・・・あれ？温かい」

すると今まであれほど肌を刺していた寒さが嘘のように消えた

「ネプテューヌに俺の魔力を包ませて寒さを中和したんだほら、コンパも」

そう言いコンパの手も取る。寒さに体を小さくしていたコンパも幸せそうな顔になった

「温かいですゝゝ」

「みんなに風邪ひいてもらったら困るからな」

両手に花状態の紅夜はコートを掴まれその歩みを止める

「・・・私を忘れてない？みんな？？」

「「「「・・・すみません」「」」」

暗黒オーラに逆らうことは許されず後ろにアイエフ、右にネプテューヌ、左にコンパと前を除けば花畑状態と進化した

紅夜の魔力も莫大にあるがさすがにずっとというわけにもいかず紅夜の先導の元近くの町に行き宿を取ることにした一同

「ああ・・・幸せ～～」

「これはおじいちゃんが言っていた極楽浄土です～～」

宿の中はよく暖房が効いていて外と比べると天地の差があった

ベットに幸せそうに寝転ぶネプテューヌとコンパ、アイエフはベットに座りうとうとしていた

「今日はもう遅いからお前ら寝てる明日から大変だぞ」

自分はもう慣れているが彼女達にとってはこの大陸の環境には少し辛いところがある。明日はこの大陸中を歩かなければならないネプテューヌ達もそれを分かったのか次々とベットの中に潜り込んでいく

「さて、行くか・・・」

鍵の欠片、魔法文化が発達しているこの大地ならそんな謎のアイテムの情報があるかもしれないと外を歩いていく。確かこの町には図書館があるはずだ裏覚えながらも街の中を搜索していく

「あつた・・・」

看板には『中央図書館』と書かれたかなり大きい建物を見つける。
コートに付いた雪を払い入室様々なカテゴリに分けられた場所で
紅夜は歴史関係の本がある所に行った

「・・・・・・・・」

紅夜の目の前には自分の背の数倍ある本棚、更にその本棚にはびっしりと本が敷き詰められているその迫力に紅夜は一つ大きなため息をついた

「・・・読んでいたら全部見るのは不可能だな・・・」

そう言い紅夜は一つの本に触れる。紅夜の回りに魔法陣が展開され紅夜の近くにあった本がひとりでに本棚から離れそして開いきまた1ページまた1ページとめくられていくそれも複数同時に

「・・・・・・・・」

頭の中に莫大な情報が一遍に入ってくる頭痛がするが我慢できる程度なので黙ってこの魔法を使っていく・・・

「ゼエゼエ・・・多すぎだろコン畜生」

この魔法は読むではなく感じる本に書かれて情報をそのまま頭に入れる魔法だ。知らない情報が一気に頭に入ってくるので頭痛が起こ

るがそれを我慢しながらの作業だが何分本が多すぎた椅子に腰を下ろし精神的疲労がかなり効いてきて今日はもう辞めようかと思ったその時だった

クイクイ

「・・・・あつ？」

コートを引かれその方向に向くとこの大陸の住民にしてはあまりにも露出が高い服をきた人形のような可愛らしさがある少女がいた

「あなたが『黒閃』？」

「え・・・ああ、そうだけど・・・」

自分に二つ名を知っているということは協会関係者とかギルド関係者とかが思いつくがなんとも言えない

「時間空いている？」

この少女は自分に用事があるようだふと図書館に設置された時計を見るともう戸締りの時間だ

「ちょっと無理かな・・・」

「そう・・・」

だいたいネプテューヌと同じくらい背だただ性格は全く違うがな

「私はホワイトハート」

「・・・はっ!？」

「もし協会を訪ねることがあれば来て」

それだけ言つと彼女・・・ホワイトハートは図書館から早々と出て行つた

「・・・なんだっただろう」

と思ひながら紅夜は重くなつた体を動かし紅夜は宿へと帰って行つた

白き大地へ（後書き）

ブラン登場！

はあ、自分の脳内女神ランキングって四位とか居ないんだよねなぜならみんな一位だから順番なんて決められないよ！

次回はちょっと久しぶりにあいつが登場！そして・・・！

俺は一体なにを・・・（前書き）

遂にゼロハート登場！戦闘したかったけど無理だった！

俺は一体なにを・・・

そこは殺戮があった場所だった。もはや人の形をしてない物が所々に飛び散り全てが粉々に壊れ地面は真紅の色に染まっていた

――キヒヒヒヒ

その大地に立つ人の形をしてながも人ではない異狂の存在が

――俺を楽しませろ！

どこから現れたのか杖へ剣を持った人がその存在に切りかかるが振るスピードよりそいつの腕が速かった骨を砕きその手に人の大事な脈動する物を抉りだし潰す

――血が、血が欲しい！

魔法を唱えていた女性は反撃を許されず首を掴まれ杖を持っていた腕は手首ごと切り落とされる。そしてそいつはその手に持つ刀を彼女の胴体に持つていていき一閃。声にならない絶叫が聴こえるそいつは切り裂かれた胴体を顔の上まで持つていきまるでジュースを飲みように彼女の血を・・・

「――！！！！！！」

あれが自分なのか零崎 紅夜なのかあまりにも現実から離れそして
惨い

「ぐっ、ゴッホ、ゲッホ！」

誰か嘘だと言つて欲しい。こんなことがあんなことが自分がしてきたことなのか・・・

「こんな・・・こんな、ことを・・・！」

ゼロハートは一体何を考えているんだこんなおぞましいことを知って一体なにになるんだ

――僕はその記憶より僕と紅夜が歩んだ物語も思い出してほしいな

「！・・・ゼロハート！！！」

突如聞こえる声それは窓から聞こえた。そこには勝手に空いた窓そしてそこに座るゼロハートの姿

「もう、折角思い出したんだから空つて呼んでよ」

「・・・お前は一体何がしたい」

アイエフ達は隣の部屋で休んでいるここでもし前みたいに戦闘になったら・・・！

「はあ、この前は謝るよちよつと情緒不安定で思わずやってしまったんだよ。話す場所は・・・外でいい？」

「・・・分かった」

いつものコートを羽織り空は付いてこいばかりに空へ飛ぶ俺もそれに付いていき到着したのは街から少し離れた森の開いた場所だった

「えつと・・・」

シュツ・・・

何かを探す様に辺りを見渡し一瞬空の手がぶれると同時に二つの木が横に切れ綺麗な切り株が出来た

「まあ座つてよ色々知りたいことあるんでしょ？」

「・・・・・・・・」

とりあえず空の言うとおりに腰を下ろすと頬に温かい物を当てられる

「朝の熱いコーヒーだよ」

「・・・センキュー」

意外に気がきくなこいつと思いながら渡されたカン Copp を空ける

「・・・俺がさつき思い出した「事実だよ」！」

俺が言うことを先読みでもしてたののように言う空。空は俺と違い Copp を飲んでいた

「これは推測だけど雪乃を殺してそのあと敵打ってその後の事は思

い出してないんだしょ？」

「・・・ホントなんでも知っているんだな」

眠気は覚めそれと同時に降りかかってくる肩の重みどうしようもない思いが自分の中を駆け巡る

「紅夜の復讐はあれで終わっていない」

「どういうことだ？」

「ん」と確かに紅夜の両親を殺したのも復讐だけど紅夜が真に復讐したかったのは紅夜自身そして世界なんだよ」

「・・・」

「簡単に言えば自分の手で殺した妹の自分に対しての復讐心とこんなことになって何も変わらなかった世界に対しての思いが復讐心になった・・・ま、こんな感じだったね」

「なんて・・・くだらない話だな・・・」

全部それって押し付けじゃないかそんなことの為に？

「僕が止めたんだけど・・・そうだね被害は16世界が減びたよ」

血が白の大地を染めていく何も言えないただ突きつけられた真実を認めれなかった

「・・・あゝまあこの話はもう無しで正直僕もあんまりあの時は

思い出したくないし」

気を使ってくれてるのは謎だがもうどうでもいい気がした

「鬱病になるなよ」これから僕が言いたいことがあるんだから」

・・・は、先まで序曲か

「僕の上に帰ってこい紅夜」

「・・・それに何のメリットがある」

「それを決めるのは紅夜だ。正直ゲームギョウ界居るとややこしく
てしょうがないんだよ」

俺はこの世界にとってイレギュラーな存在、今まで何も起こらなっ
たけど遂にか・・・

「ふう弱気な今の紅夜は嫌い」

勝手に言ってる・・・

「・・・・・・・・」

空は何か考えているように立ち上がりしばらく空を見ていた

「紅夜は今まで救ってきた人のことを考えたことある？」

「・・・ああ俺が救ってきた人が元気で暮らせているかな？ぐらいだ
けどな」

「・・・ゲームギョウ界はね何度もやり直しているんだ・・・」

「・・・ということだ？」

「元々ゲームギョウ界の全ての大地にモンスターなんていないんだ。誰かが連れて来ない限りは」

「意味が分からない」

こいつの言っていることは断片的でよく分からない

「人間が全ての原因なんだ」

その時の空は何かを思い出す様にまだ早朝でまだ人通りが少ない街道を見ていた

「モンスターがいないゲームギョウ界は人間に脅威はない。だからどんどん数を増やしていき科学力もどんどん発達していった」

「・・・聞いている限りはいい方向に進んでないか？」

「はあ、話を進めるね。世界の基準でゲームギョウ界はかなり小さい世界になるこの四大陸だけに人間は溢れだした・・・さてこの後どうなるでしょう？」

「・・・取り、合い」

「そつ、ばつさり言ってしまうば戦争だね。どこの大陸も今のプラネテューヌの数倍も科学力を持っていたからね・・・それはそれは

惨かったよ」

四大陸が今のプラネテューヌ以上の科学力・・・

「め、女神は？居るんだろ？」

「居たね。最初はだれもが信仰する完璧な女神だったよ・・・けどね人間は古いものは捨てるそんな存在なんだ。そもそも女神なんて決まられた人しか見られなかったし存在が結構あやふやなんだ。忘れられていったよ」

そんなこと想像もつかない。今のゲームギョウ界にそんな過去が

「戦争を止めようと女神は頑張ったよ。平和を愛していた人だったからねでもねー女神は殺されたよ人間の手によって」

「！なんで!？」

「さつきも言っただけどその時のゲームギョウ界に脅威なんてないんだ。ただ暴走する欲望を邪魔する女神が鬱陶しかったそれだけで十分理由にならない？」

「・・・・・・・・・・」

「そして女神討伐の後、痺れを切らした人間達は遂に核を使い・・・ドカーンだね」

自己破滅・・・そんなことが

「僕なら一応何とか出来た『無限という名の栄光』グローリー・ザ・インフィニティがあつたからね。

でも女神はそれを断ったこれは自分の性だって言い張ってね・・・
どう聞いて女神は何か悪いことした？」

「・・・してない」

「それくらいわかってくれたか・・・ほっ」

胸に手を置き心底安心した息を吐く空、これは全て人間が導いた終焉だ

「でもね。女神は僕に言ったのこの世界を頼むってだから冥獄界を作った・・・人の進化を調整するためにモンスターを作った」

「・・・でも、それは」

「これも結局応急手当なんだよ人間はいつか欲望という獣を解き放って自分の世界を喰らい尽くすこの未来は変わらないだから僕はその女神の残った力であの合法ロリを作って女神にも世界を変えられる力を託した・・・」

「俺・・・じゃ・・・」

「こういうのもなんだけど・・・紅夜は人の進化を速めようとしているその先は世界の破滅だ」

「ははは・・・なんだよそれ・・・俺が・・・俺は・・・何をやっていたんだ」

もう座る力すら出ない。倒れこむ俺が今までやってきたのは全部・・・
無駄、それ以上だ

「・・・もう一度言うよ。僕の元に帰ってこいもう紅夜は十分やってだから・・・もう休んでいいんだ」

俺はずっと正しいことをやってきたと思っていた助けた人の感謝の言葉が気持ち良かった・・・なのに・・・なのに・・・

「これ以上人を助けるならば僕は紅夜の元相棒じゃなくてゲームギョウ界の破壊神ゼロハートとして君と戦う・・・そんなのは嫌だろっ？僕は嫌だし」

・・・目の前が見えない全部見失った。いままでの信念もなにもかも・・・連れていくか。こりゃだめだ」

そうして空は紅夜を抱きかかえようと近づいた時足下に銃弾が撃たれた

「・・・そうだったね」

「「「・・・」」」

紅夜から離れる空の目線の前には既に変身時のネプテューヌ達を含めたアイエフとコンパだった。その目には明らかな敵意が感じられた。傍から見れば自分は紅夜誘拐しようと思えるだろうね

「紅夜には仲間が居たんだね・・・いいよ。かかってこい」

その言葉と共に太刀が空に振るわれた・・・

俺は一体なにを・・・（後書き）

惨い現実ですね・・・これが真実、今まで支えていた紅夜の信念が倒れかかる

自分流で考えたゲームギョウ界の過去（マジユコンヌよりずっと前）
・・・絶望ですねもうどうにもならないやっっていることはゼロハートが正しいかもしれない・・・
そしてねぶパーティーVSゼロハートの決着は・・・

無限という名の栄光：グローリー・ザ・インフィニティ究極神具と言われる神でしか扱いきれない宝具のような物（空自作）、全ての負の感情を世界中から消すことができるだが消すだけでいずれまた生まれるなので応急手当ぐらいにしかない

。形状は双刃剣だがこの神具は人々が抱きつまれた善の宝具の属性を全て持ちあわしており知識あれば乖離剣でも約束された勝利の剣への変換が出来る更にこの神具自体魔力増幅機能がり魔力なくても真名解放は普通にできる。ただし本来の力は神でそれも善の神でないといと発揮できない

V S ゼロハート!! (前書き)

始まったガチンコ(と叫ばれるのか?)バトル!
空のゼロハートの実力の一片が明かされる!

V S ゼロハート!!

振るわれる斬撃を体を逸らして避ける。太刀は地面に辺りを雪が爆発したように舞う

「遅い、蚊の方がまだ早いよ」

「——っ！」

つかさず横に一闪だがその太刀筋は片手で止められる

「くっ……！」

押しても引いてもびくともしない悲痛な顔をするネプテューヌに対して空は顔色一つ変えずただネプテューヌの頑張り姿を見ていた

「てええええい!!!」

「後ろからの奇襲に掛け声はNGだよ」

持ち前の速さで後ろに回りカタールを降り下ろそうとするアイエフに後ろを見ないまま腹部に蹴りを入れる

「あいちゃん!——ぐっ！」

両手で支えていた太刀を片手にしもう片方の腕から銃を取り出すが引き金を引く前にアイエフと同じように腹部に蹴りを入れられ吹き飛ばすネプテューヌ

「そこです！」

次に仕掛けてきたのはコンパだった巨大な針から放たれる溶液を空は体を剃らし避けていく

「っ———！」

体制を立て直したアイエフはカタールに内蔵された銃で連発するがこれもまるで銃弾が見えているように避けていく

「そこ——！」

ネプテューヌは大きくチャージした火炎弾を撃つ。雪を溶かしながら向かってくる弾丸を空は横目で確認し腕を降り下ろした

「………何をしたの」

三段階にチャージされた火炎弾は空が腕を振るった軌跡に会わし一刀両断された

「おいおい、その程度なの？僕はまだ一歩も動いてないよ???」

そう……ネプテューヌ達の猛攻撃にも関わらず未だに空はその立っている場所から動いてない

ギリッ………！

奥歯を噛む音がする悔しいがこいつ（空）は強い………！

「あなた……一体コウヤに何をしたの！」

倒れたまま指一本も動かさない紅夜の惨状にネプテューヌは喉を震わして問い詰める

「別に真実を知って落ち込んでいるだけだよ」

ネプテューヌの訴えに答えるだがまるで彼女達など眼中に無いように倒れた紅夜を見つめる空

「真実……ですって……！」

「そ、まあ……無熟な君たちに言っても無駄だけどね」

「貴方は一体何者なんですか!？」

「破壊神ゼロハート、紅夜から何回かは聞いたと思うけど？」

確かに聞き覚えがある自分達が苦戦した魔王ユニミテスの使者を不意打ちとは言え一発で仕留めた謎の女神……！

三人は空を囲むように回り一斉に飛びかかるほぼ全周囲の攻撃に紅夜は三人を一人一人見る

「爆ぜよ。風王結界」

三人の刃が空に触れる瞬間、空を中心に突如竜巻が発生し三人がまた吹き飛ぶ

「くっ……！」

アイエフとコンパは抵抗も無く吹き飛ばされがネプテューヌは太刀を地面に突き刺し何とか突風を凌いだ

「あいちゃん！コンパ！」

彼女達は吹き飛ばされた場所に木があり頭を強く打ったのか沈黙化していた

「仲間よりまず自分の心配したら？」

「！」

いつの間にかネプテューヌの懷に潜り込んでいた反射で太刀を地面に刺らしながら切り上げようとするが柄の部分を手のひらで中止される

「まあ、峰打ち程度で済まして上げる——七花八裂（改）」

一瞬でネプテューヌの体に七つの連撃が叩き込まれた

力なく倒れるネプテューヌそれを見下ろす空……圧倒的、いや絶対的な力の差だった

「さてと、紅夜を回収しま……！」

未だ動かない紅夜の側に行こうとすると裾を捕まれ動きが止まる空が振り向くと既に変身は解除されたネプテューヌの姿だった

「これはちよつと驚いた。意識は当分飛ぶくらいに力加減したのに」
既に喋る体力すらないネプテューヌを見下ろす空

「あのね……残念なこと言うけど君達じゃ紅夜の光になれないんだよ分かる？」

拒否するように首を横に振るネプテューヌそれを見て空は大きく溜め息を付いた

「記憶無いし無塾だし我が儘な君に用事はないとつとイーストワール助けて後はダラダラとハッピーエンドを迎えてくれない？大丈夫、マジユコネは僕が殺してあげるからもうすぐでエンディングだから」

「——だ」

「……………」

「そこ、に、こうちゃん、が居な、いのはヤダ……!!」

「メンドクさ。はあ」

黄金に輝く西洋剣が空の手に現れる。それを逆手に持ち狙うは自分とネプテューヌを繋いでいる手

「腕一本くらいなら……問題は無いよね」

自分の顔ぐらいまで剣を上げそして狙いを定め……

「――！！！」

「！？」

落とそうとした瞬間、空の体は横に傾く横を見れば自分の顔にドロップキックを決める紅夜の姿が……………

「っ、あいたた。お早いお目覚めだね紅夜」

「……………こう、ちゃん……………！」

そこに立っているのは間違いなく零崎 紅夜だった

「僕と敵対するつもり？紅夜君は一体何をしたのか理解している？」

「……………分からない」

「はあ？」

今まで見てきたものが全部モノクロの壁絵のように感じられる

「けど……………！」

前に見てきた光はない。腕は震え足は笑う。自分は戦う理由をほぼ失った

「お前は……………！」

回りを見る木に体を叩きつけたアイエフとコンパそして自分の近く

にはボロボロのネプテューヌ

「ネプテューヌ達を傷つけた……！」

守ると誓ったんだその笑顔を守ると決めたんだその障害となるなるものがあるのなら戦うと決めたんだ

「それだけで十分だ……！」

——『シン・クレア・ツール
偽神化』

闇を漆黒を暗黒を纏いその手に天終を握りしめ構える
それだけで自分は………

——戦える！

VSゼロハート!!（後書き）

ゼロハートマジ許さん——!!!

紅夜、殺つてしまえ——!!!

次回は紅夜とゼロハートのタイマンバトル!

勝利の女神はどちらに微笑みのか……!

風王結界：光を屈折させるほどの風の鞘、次回ついにその姿がさらけ出される

七花八裂（改）：一瞬で七つの奥義を叩き込む技、空が手加減していなければ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058w/>

超次元ゲーム ネプテューヌ～黒閃の騎士～

2011年10月11日06時57分発行